

日本醫學雜誌

第 20 卷 第 4 号

昭和 49 年 10 月 30 日發行

原 著

- レンブラントの名画「トゥルップとデーマンの解剖学講義」……………古川 明…(289)
- 庶民史料にみる江戸時代の疾病……………立川 昭二…(313)
- 医療及び保健衛生面における検査技術者の歴史
医療面における発展について……………谷島 清郎…(336)
- 俳句の季語に投影している本草綱目の薬物文化…三浦 三郎…(347)
- 咒禁師及び按摩師について(上)……………新村 拓…(356)
- 越後の蘭方医森田兄弟について(二)……………長谷川一夫…(364)
- Die Beziehungen Japans zur europäischen
Medizin im 18. Jahrhundert……………Heinz Goerke…(418)

資 料

- 伴道与法眼荣藩の家系とその子孫……………伴 七三雄…(370)
- 昭和48年度医史学関係論文目録……………(376)
- 雜 報……………(390)
- 20卷総目次……………(394)
-

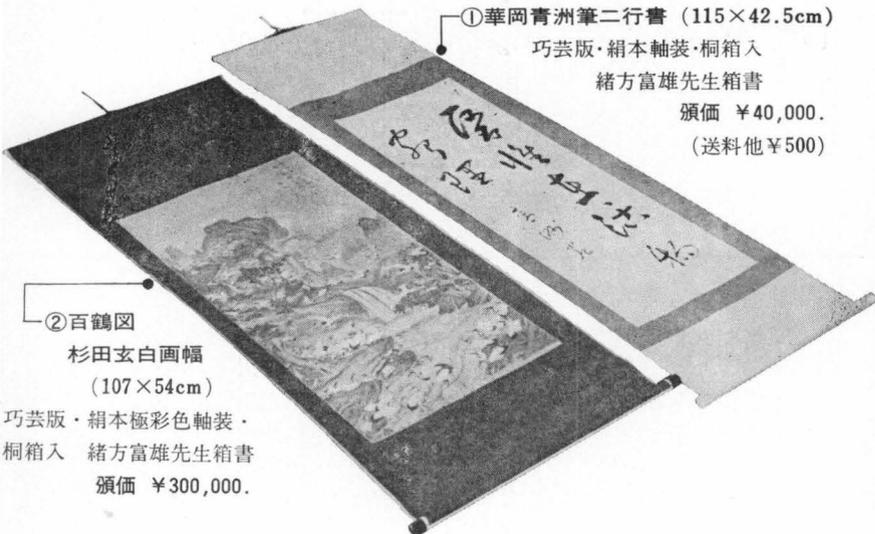
通 卷 第 1398 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2-1-1
順天堂大学医学部医史学研究室室内
振替口座・東京15250番
電話(813)3111 内線544

金原出版
創業百年記念事業

醫學の寶玉



①華岡青洲筆二行書 (115×42.5cm)

巧芸版・絹本軸装・桐箱入

緒方富雄先生箱書

頒価 ¥40,000.

(送料他¥500)

②百鶴図

杉田玄白画幅

(107×54cm)

巧芸版・絹本極彩色軸装・桐箱入 緒方富雄先生箱書

頒価 ¥300,000.

わが国医学の宝玉を完全復元

好評頒布中!

醫學聖
杉田玄白立像



ブロンズ立像 (高さ35cm) 桐箱入・長谷川義起先生箱書

頒価三〇〇、〇〇〇円

偉大な玄白と、似る、という二つの構成上の要素を、造形芸術として、調和の世界を彫り上げよう、昇華させようと繰返し追求して、出来上がったのがこの像である。

日展評議員 長谷川義起 氏 作

①「活物窮理」とは生体について研究・探究することである。世界の近代外科の先駆となった華岡青洲は、「活物窮理」を外科医としての生命をかけた信条とした。

②百鶴図は、杉田玄白が六十歳の誕生日に仕上げたもので、繊細華麗に描かれており、製作は技術の粋を尽し独自の手法により復元、仕上げ部分は手描きによる。

売捌所 / 株式会社金原商店 製作所 / 財団法人日本医学文化保存会

レンブラントの名画「トゥルプとデーマン の解剖学講義」

古川明

はじめに

レンブラントはバロック美術の最大の画家であるばかりでなく、世界の美術史上にかがやく偉大な芸術家の一人である。その傑作「医師トゥルプの解剖学講義」と「医師デーマンの解剖学講義」は、思いがけずも一九六八年に、アフリカのトーゴ共和国から発行された美術切手の図案にとりあげられた。これに次いで、一九七〇年にはカメルーン連邦共和国、さらに一九七一年にはアラビアのアジマン土侯国で、トゥルプの解剖の画が切手図案となった。トーゴは一九五八年にフランスから離れ、カメルーンは一九六一年にフランスとイギリスの支配を去って、それぞれ独立した国である。どちらも現在フランス語を公用語とし、レンブラントの母国オランダとは、とくに親しい関係はない。アジマンはもちろんのことである。

このような切手が記念切手として、オランダから発行されたのなら大いに意義あることで、われわれの歓迎するところだが、トーゴ、カメルーン、アジマンでは、とくに目的はなく、単に国家財源の一助としたにすぎないと見るべきだろう。トーゴの切手は国連の世界保健機関の創立二〇年を記念したもので、多少医学と関係を持たせ、アジマンの切手は医学関係の絵画八種のうちの一種であるが、カメルーンの切手はとくに医学と関係がない。

美術に素人のわたくしではあるが、メディカルフィラテリー *medical philately*⁽¹⁾ に関心を持っている関係上、これらの切手発行に際し、この二つの画にとくに興味を持つようになった。詳しく掘り下げた調査の結果、トゥルプ、デーマン、レンブラントのことはもちろん、解剖の絵画史についても、ある程度の知見を得たので、その概略を報告することとする。

トゥルプの解剖学講義

「トゥルプの解剖学講義」の中心人物トゥルプとその業績については、すでに Heckscher,⁽²⁾ Tyssen,⁽³⁾ Goldwyn,⁽⁴⁾ Blue-farb⁽⁵⁾ らの立派な報告があるが、わが国ではあまり詳しく知られていないので、近く筆者が別文で報告したいと思っている。トゥルプの本名は Claes Pieterszoon (一五九三—一六七四) で、ラテン名は Nicolaus Petreus である。父の代に、アムステルダム家の前がオランダの国花チューリップの球根の競売所だったことから、オランダ語の 'Tulp' で呼ばれるようになったといわれる。またかれが医業を営むようになってから、家の入口の石にチューリップが彫られていたので、Nicolaas Tulp の名で親しまれたともいわれている。

ライデン大学で医学を修め、一六一四年に卒業して、直ちにアムステルダムに戻って開業した。一六二八年に、外科医組合 (ギルト) Chirurgijns-Guild の解剖学講師に任ぜられた。ここでレンブラントの名画が生まれたのであるが、一六五三年にアムステルダム市長に推せんされる直前まで、名声の高い医師として、また解剖学の研究と教育に、医学者としての生活が長い間続いた。有名な著書として、*Observationes Medicae* (1641) がある。市長のほか政府の役職にもつき、一六七四年ハーグにおいて、八一歳の長命でこの世を去った。本年 (一九七四) は死去三〇〇年の記念すべき年にあつたている。

「トゥルプの解剖学講義」*De anatomische les van Dr. Nicolaas Tulp* はあまりにも有名であり、医学生はとくにその画面の雰囲気を感じ、引きつけられずにはいられない画である (図1)。この画は一六三二年、レンブラント

ら、思い切って若い新進画家レンブラントを選んだのだが、これが図にあたり大成功をおさめたわけである。依頼を受けたレンブラントの野望も美事に実を結び、この画は一般の好評を博し、かれの出世作となった。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

解剖を見学する人たちがトゥルプの指導を受けながら、右下隅の部厚い解剖学書を一齐に注視している鋭いまなざしと、画の中心を占めている死体を照らす凛然とするような青白い光線が、はなはだ印象的である。見学者たちの視線の方向については、近年まで正しい解説がなされていなかったが、小川⁽¹⁰⁾によれば、ドイツの医史学者アルテルト W. Artelt によって、前記のように指摘されたという。指導にあたっているトゥルプの視線は前方に向っているが、何を見つめているかを説明したものはまだ見あたらない。正面の壁の解剖図か何かを参考に、解説を進めているのではないだろうか。背後に立つ二人の視線が正面を向いているのは、画面とこの画を見る人たちとをつなぐ役割として、レンブラントに限らず、よく用いられる手段である。

ウォレス Robert Wallace⁽¹¹⁾はこの画を、カイゼルの「エッベルツの解剖学講義」と比較し、次のように述べた。カイゼルの画では、構図が静的であるために、人物は彫像を眺めているような印象しか与えないが、これに反してレンブラントの画では、解剖を見ているすべての者が、解剖に深い人間的関心を寄せている。すぐれた能力の象徴として、帽子をかぶっているトゥルプには、内面的力が与えられているので、かれ一人とほかの七人と対抗できるのである。また拡大された画の一部を見ると、個々の人物の顔は驚くほどたくみに表現され、良い肖像画の条件を守っている。

多くの書によれば、この画はトゥルプが毎週二回外科医組合で行なっていた定期の解剖学講義の背景からモチーフを得たものでなく、おそらく一六三二年一月三十一日に行なわれた解剖から得たものであろう。この解剖は一般の公開講義と異なり、特別にトゥルプの功績を称えるために行なわれたものだと意見が有力である。その証拠に、当時の講義のための解剖なら腹部からはじめるのが通例だが、この場合に腕からはじめていることに特別な意義があると考えられる。また見学者たちの履歴が不確実で、医師の資格を持っていないだろうといわれているし、一部はトゥルプの友人とみる説もあ

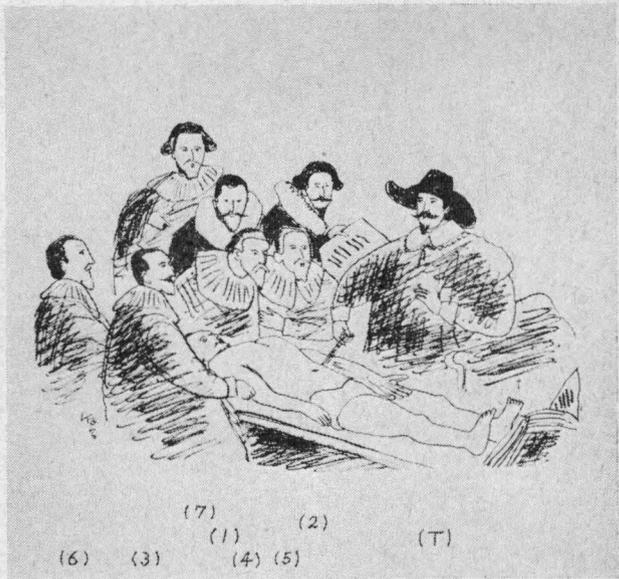


図2. トゥルプの解剖学講義と見学者の氏名
(風間完氏画)

- (T) Nicolaas Tulp
- (1) Jacob Block
- (2) Hartman Hartmansz
- (3) Adriaan Slabraan
- (4) Jacob de Wit
- (5) Mathys Kalkoen
- (6) Jacob Koelvelt
- (7) Frans van Loenen

る。そのような見方からも、この状
景は定期の講義でなく、特別なもの
との考えが出るわけである。

見学している七名の名は図2に記
した通りである。レンブラントはの
ちに、このなかのハルトマンスHart-
mansz とカルクーン Kalkoen の肖
像画を描いたことが記録されてい
る。⁽¹²⁾ 解剖されている死体は Adriaen
Adriaenson (Adriaan Adriaans)
または Het Kint という呼び名の二
八歳の青年で、ライデン生まれの箱
製造業者であるが、絞首刑によって
処刑されたと記録が残っている。⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁷⁾

⁽¹²⁾ Gerson はトゥルプの解剖の画面の左端の人物と最後部の人物は、レンブラントが一六三二年に描いたものでなく、あと
から自分自身または門人のバックー Jacob Adriaensz Backer (一六〇八一—一六五二) によって、描き添えられたものではな
いかと推定した。Lecaldano によると、これは数人の評論家によっていい出されたことで、バックーは一六三二年から
一六四〇年ごろまで、レンブラントの門人としてかれに協力した画家である。

右端に描かれている解剖書はウェザリウスのファブリカだとする説があるが、そうではないという説もあり、未だに定

説がない。一九二六年に Jantzen⁽¹⁾ はこの書物がウエザリウスのファブリカの二五五五年版だと主張した。Heckscher⁽²⁾によると、もしそうだとすれば、開かれたページは二五八―九ページでなければならないが、残念ながら左のページに記載された文字からみると、ファブリカの筋肉のページに該当しない。そこにはレンブラント独特のセミゴシックの字体で書かれたはじめのBの字が判読できる。かれが勝手に、書物とちがった字体に変えるとは考えられないので、この書はファブリカでなく、むしろオランダの解剖書ではないかと主張した。しかし一七世紀初期のオランダの解剖書は大抵四つ折版 *quatro* だったのに、この書は二つ折版 *Folio* だから、写本ではないだろうかと考えた。

Heckscherはその後面の洗浄されたあとに、ハルトマンズ(図2の2)の持っている出席者の表でかくされた第二の解剖図のあることに気付いた。精密な観察によると、出席者の表は一枚の紙片が開いた書物の左ページの上におかれたもので、書物の右ページはトゥルプの肩にかくされている。ハルトマンズの持っている書物のページの上方に“Anathomia …” という字らしい見出しがあるので、この書物も解剖図を描いた写本のようで、ファブリカではないと推察している。マウリツハイス美術館長 Dr. de Vries はこの部分を徹底的に洗浄したら、表の下にかくされた細部を確かめることができるのではないかとさえいい出した。むしろ絵画のエックス線診断が利用されてよい例のように思われる。Arlet⁽³⁾によると、Jantzen はレンブラントがファブリカを持っていたというが、その主張は誤りで、その後出版された Laurentin の *Historia anatomica* であるという。以上のように、この名画に描かれた解剖書は誰のものか未だ不明というほかはない。

トゥルプが持っている鉗子でつまんでいる筋肉の部が、解剖学的に正確でないことは、一九〇五年に美術館の案内人が、医師らしい一人の入場者に、はじめて指摘されたという⁽²⁾。その誤りは、浅指屈筋 *M. flexor digitorum superficialis*(BNA) では *M. flexor digitorum sublimis*) が肘の内側、正しくは上腕尺骨頭 *Caput humeroulnare* からでなく、外側より出ているように描かれていることである。Heckscher はレンブラントが右上肢を見て、このような誤りを描いたのではな

いか、それにしても、トゥルプやそのほかの者がこの誤りに気付かなかったことは不思議だと記している。Jonesは⁽¹⁶⁾ “Principle of Anatomy as seen in the Hand” のなかに、この誤りをとくに指摘し、かれは薬品で防腐処理を施した死体の前腕を見慣れているが、このような誤りは死体の不鮮明な状態の責にすべきではなく、明らかにレンブラントが見誤ったのだと述べた。

以上のように、この名画に対しては、このほかにも各方面からの色々な説が加えられ、観賞とともに興味を持たれている。

デーマンの解剖学講義

デーマン Johannes Deyman (一六二〇—一六六〇) はアムステルダムに生まれ、トゥルプより二七歳年下である。一六三八年にライデン大学に入って医学を修め、ついでフランスのアンジェ Angers で勉強し、一六四二年に医師となった。のちにオランダに帰り、アムステルダムで医業を営んだ。一六五三年に、トゥルプが市長に栄転したので、そのあとを次いで、外科医組合の解剖学講師となった。また医学校の検査技師やセント・ピータース病院の医師も兼ねていたようである。とりたてていうほどの医学業績や発見はなかったが、一六五六年にレンブラントの描いた解剖の画で、名を売ったようになった。かれは一六六六年一二月に、アムステルダムに近いノルデルケルク Noorderkerk というところで、まだ四六歳の若い生命を終えた。⁽¹⁷⁾

「デーマンの解剖学講義」De anatomische les van Dr. Johannes Deyman はあまりポピュラーでないので、医師のなかでも知らない者が少なくない (図6)。現在アムステルダムの国立美術館 Rijksmuseum に所蔵され、カンバスの大きさは一〇〇×一三四 cm である。この美術館はアムステルダムの南部にあり、一八八五年に完成し、一八〇八年以来ダム広場の王宮の二階に集められていた全作品を移管収容した。⁽⁶⁾ 画の中心部を除いた大部分は一七二三年一月八日に、アム



図3. デーマンの解剖学講義 (切手)

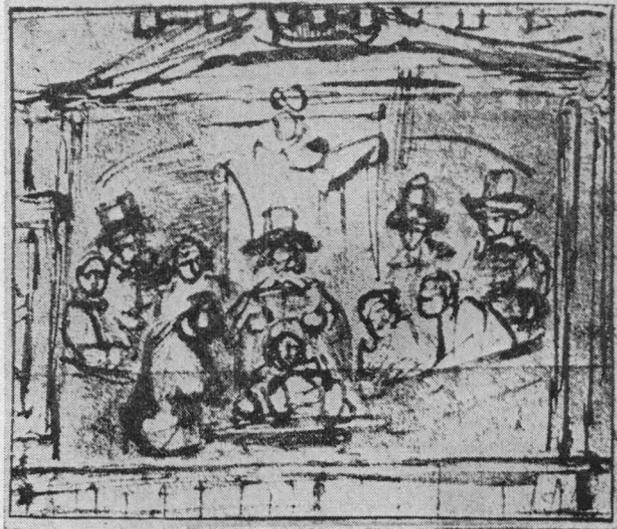


図4. デーマンの解剖学講義
(全景スケッチ)

が想像される(図4)。大きさは一〇九×一三二mmである。シックス収集とは、レンブラントのパトロンで、のちにアムステルダムの市長になったシックス Jan Six (一六一八一—一七〇〇) の収集のことである。

この画は一六五六年、レンブラントが五〇歳の円熟期に描かれたもので、トゥルプの解剖学講義より二四年あとの作品である。見学者たちが何を眺めているかは、原画の欠損のため知ることはできないが、現在残っている画では、助手のカルクーンがデーマンの右側(画面では向って左)で、割りとられた死体の頭蓋骨を左手に持ち、大脳の解剖を進めている

ステルダムの外科医組合の解剖講堂 Snijkamer (Sint Anthonies-Waag) の火災にあって欠損した。解剖される死体の部分は残されているが、デーマンの首から上がなくなつて顔ぼうがわからない。しかしながら、原画の下絵のスケッチはシックス収集 Collectie Six の「レナード」、国立美術館の銅版画室に残っている。全体の構図

デーマンの説明を一同できているのであろう。カルクーン Kalkoen (Gysbrecht Kalkoen あるいは Mathys Kalkoen) はトゥルプの解剖に描かれているカルクーンと同一人物のようである。そのほかの七人の見学者の名は Dirk Visch, Nicolaas Fruyt, Daniel Florianus, Augustus Meyer, Laurens de Lange, Barend Heem, Jacob Hary である。死体は盗みのため絞首刑を受けた Gelderland 州 Diest 村の Joris Fonteijn (一名 Zwarte Jan) とこの青年の Lancourt 領主によって、解剖のため提供された。^{(2)(c)}

Vaubel⁽⁸⁾ は全般に著しく破損されている画なのに、あたかも水の流れを描いたようにきれいに見えるのはおかしいと述べ、この部分があとから補修されたのではないかと想像している。またベルリンの美術専門学校の Jan Johl 教授は医師で画家であるが、一九六七年にデーマンの解剖図から、死体の部分だけを一般の人に理解しやすく、一部は模型的に、油絵で描いた(図5)。これによると、術者は右手で組織を持ち上げ、左手の母指と示指の間に器具を挟んで解剖を進めている。

デーマンは左利きであつたらしい。腹腔は開かれて胃腸は除かれているが、胸腔はまだ開かれていない。原画では両手足が描かれているが、この画では手は右だけ、足は左だけが前方に投げ出されている。

Catto⁽⁶⁾ によると、大脳の解剖の画はレンブラント以前にもあるが、この画のように、死体の足の方から眺めた思い切った構図には、多くの画家が強く感動している。また多くの医学生のように、階段教室で授業を受けた経験のあるものなら、一番下段で解

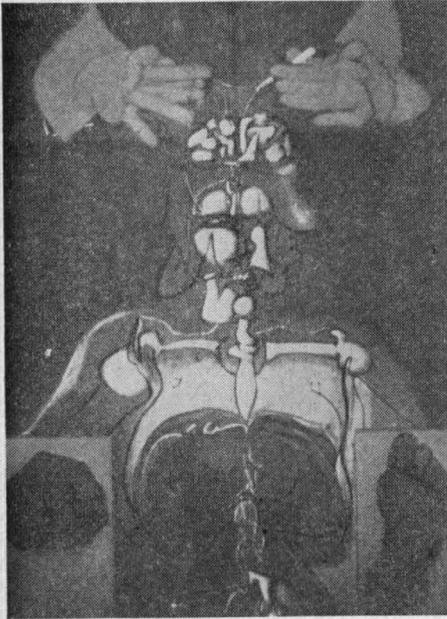


図5. デーマンの解剖学講義
(Jan Johl の模型図)

剖を直視しているような感じをこの画から受けるにちがいない。スケッチの構図の中央に死体を優位に描きながら、等辺三角形の落ちついた形に死体を導いた手法は、明らかにレオナルドの研究から感化を受けた考え方であり、また画のわくの上部の破風の鈍三角形が、対称的で特異だとしている。死体の上半身を水平位置から鉛直位に描いたのみならず、頭を真直ぐに見ながら描いたこのような構図のもとに、デーマンをはじめ見学者たちは、真上から露出された大脳を見下し、われわれは画家自身が占めた場所にあつて、この画を眺めることができる。

嘉門⁽⁸⁾、八代⁽²⁰⁾その他によれば、この構図は一五世紀のルネッサンスの大家マンテナ Andrea Mantegna (一四三〇—一五〇六)の構図法で、レンブラントがイタリア・ルネッサンスに深い関心を寄せていた一つの証拠ともいえる。とくに一六五〇年代後半になると、青年期とちがった意味で、いわゆる古典様式に深い関心を寄せるようになったのであろう。マンテナの構図とは、前面短縮法で、ミラノのブレラ美術館 Brea 所蔵のマンテナの作「死せるキリスト」(一四八〇年ごろの作)がこの典型的構図をとっている。⁽²¹⁾デーマンの解剖の画でいえば、前面短縮の死体の頭のところに立つデーマンの左右に、四人ずつの聴講者が見守っているという、厳格な左右対称の構図である。

レンブラントの略伝

レンブラント Rembrandt Harmenszoon van Rijn (一六〇六—一六九)の伝を、嘉門⁽⁸⁾、土方⁽²²⁾、阿天坊⁽²³⁾らの著書を参考にして記してみよう。かれは一六〇六年七月一五日に、ライデンで粉屋を営んでいた父ハルメン Harmen Gerritsoon van Rijn と、パン屋の娘だった母コルネリア Neeltgen Cornelia Willemsdochter van Zuytbouch の九人のうちの八番目の子(実際には二人の兄がすでに亡くなっていたので第六子)として生まれた。七歳のときにラテン語学校に入學し、一六二〇年には、ライデン大学に進んだが、一年後には退學し、画家スワーネンブルヒ Jacob van Swanenburch (一五七二—一六三八)のもとで、三年間徒弟として修業した。一六二四年にアムステルダムに移り、歴史画家ラストマ

ン Pieter Lastman (一五八三—一六三三) について絵を習ったが、半年後にまたライデンに戻り、ラストマンの弟子リ
ーフェンス Jan Lievens (一六〇七—七四) と共同で工房を作り、独立した画家として制作に専念し、弟子もできるよ
うになった。

一六三一年の秋に、レンブラントはアムステルダムに移り、画商アイレンブルフ Hendrick van Uylenburch の家に
寄寓した。その翌年に、「トゥルプの解剖学講義」の注文を受け、これに成功して一流の画家と認められるようになった。
一六三四年二七歳のレンブラントはアイレンブルフの親戚の娘、二一歳のサスキア Saskia van Uylenburch (一六一二
—四二) と結婚して、幸福な家庭を作った。一六三九年に、ブレストラート Sint Anthonies Breestraat に大きな家を
買って移り、世界中の美術品のみならず、あらゆる品物を集めて楽しんだ。この建物は現在「レンブラントの家」として
復興し、美術館となっている。一六三〇年に父を、一六四〇年に母を失ない、男児ティトゥス Titus を生んだあとの妻
サスキアも、結核のため三〇歳の若さで死去した。

一六四九年に、家政婦だったヘンドリックヘ Hendrickje Stoffels と結婚し、一六五四年に娘コルネリア Cornelia が
生まれた。当時レンブラントは浪費癖のため、経済的に破たんを来し、一六五六年に破産宣告を受けたが、この年に、傑
作「デーマンの解剖学講義」を描いている。家は競売に付せられ、一六六〇年に、アムステルダムの西部、ユダヤ人の多
い新開地ローゼンフラフト Rosengracht に移った。結局妻ヘンドリックエと息子ティトゥスが新しく画商をはじめ、レ
ンブラントはその使用人という形式で、絵の制作を続けた。一六六三年に、ヘンドリックエが夫を残して亡くなり、ティ
トゥスは一六六八年にマグダレナ Magdalena van Loo と結婚して家を出たが、ティトゥスもその後約半年で死んだ。
相次いで肉親を失ない、淋しく暮らしていたレンブラントは、一六六九年一〇月四日に六三歳で、ただ一人の肉親、一五歳
の娘コルネリアに看とられてこの世を去り、ウェステルケルク教会に埋葬された。

レンブラントは生涯に、おそらく絵画六五〇点、エッチング三〇〇点、素描二〇〇点以上を描き、後世に残した。⁽⁸⁾そ



図6. レンブラントの自画像切手
 (右) 生誕 350 年記念 (1956)
 (左) 1937年発行の切手

のなかには四つの有名な集団肖像画がある。二六歳のときの「トゥルプの解剖」、三六歳のときの「夜警」、五〇歳のときの「デーマンの解剖」、一五六歳のときの「織物組合の幹部たち」であり、その二つまでが医学関係なので、われわれに親しみが深い。レンブラントほど高遠な透徹した自己表現を行なった画家はないといわれ、一〇〇点に及ぶ自画像はかれの生活記録となっている。Genaille⁽²⁴⁾はレンブラントの人相を次のように表現している。「かれは身長が低く、ずんぐりとしたタイプだった。額は広く横しわがあり、鼻は高く太く、耳は大きく、力強く結ばれた口元は笑うと肉感的な感じがした。下口唇の下に房ふさしたひげを生やし、顎は大きく、若いときからふくよかに肉づいていた。顔はあまり上品とはいえないが、一点を凝視する大きな眼は絶えずうれいを含み、知的でするどく生きいきとしていた。」

レンブラントの自画像は今までに世界の多くの国から発行された切手一三種に描かれているが、そのうちオランダのものを示してみよう(図6)⁽²⁵⁾。生誕三五〇年記念(一九五六)の切手は、かれの青年期のエッチング肖像画の一部である。立派な口ひげを生やし、ベレー帽をかぶり、自信満々としたすがたで、原画は現在リヒテンスタインのバドゥス Vaduz に、リヒテンスタイン公が所有している。このエッチングには次のようなエピソードがある。一六三九年の春、アムステルダム港にイタリアの名画を満載した船が入ったことを知ったレンブラントは、早速その競売に出かけた。そこでルネッサンスの巨匠ラファイエロの名作「カステリオーネ伯」に接したが、当時は金銭に余裕がなく、みすみす他人に落札するのを眺めていなければならなかった。しかしそのとき大急ぎでスケッチした素描が現在ウィーンのアルベルティナ美術館に所蔵され、その作品から切手の原画となったエッチングの自画像が生まれたのだという。

一九三七年の切手には、それよりやや年長期の自画像が描かれ、原画はアムステルダム国立美術館に所蔵されている。

レンブラントの門下には、有名な画家が少なくなかったが、医学に関係ある画を描いた一人として、Aert de Gelder (Dordrecht 一六四五—一七二七) をあげることができる。かれの一七二三年の作品「ブルハーヴェ一家」(アムステルダム国立美術館所蔵) は、五四歳のときのブルハーヴェと夫人ならびに一人の娘 Joanna が描かれている。⁽²⁶⁾

現在アムステルダムには、レンブラント広場 Rembrandts plein があり、一八七六年彫刻家ロイヤール L. Royer 作のレンブラント像が静かに公園を見守っている。また Jodensbreestraat にレンブラントの家 Rembrandt-Huis が、一九一一年以来美術館として、一般に公開されている。ここには、レンブラント独特の印象深いエッチングが二七五点、素描やかれの使った印刷機、銅板、家具などが大切に保存されている。ニューマルクト広場 Nieuwmarkt plein の中央のデ・ワーフに、アムステルダム歴史博物館 Historisch Museum “De waag” があるが、ここがトゥルプの解剖を描いたところだといふ。⁽⁶⁾ 一方ライデンには、レンブラントの生家があり、ノートエンド広場 Noordeinde plein には、かれの像がある。

トゥルプ、デーマン、レンブラントの相互関係、ならびにバロック時代のオランダ

トゥルプはデンマーンの先輩医師として、市長になってからも、外科医組合の繁栄を願っていたにちがいない。またかれは美術愛好者、推進者としても知られていることから、レンブラントとの親交も厚かったであろう。三人の年令関係を見ると、トゥルプが生まれたのは一五九三年で、レンブラントはそれより一三年あと、デーマンはそれよりさらに一四年あとに生まれた。しかしこれと反対に、デーマンは四六歳、レンブラントは六三歳、トゥルプは八一歳と、後に生まれたデーマンが最も短命で早く亡くなり、先に生まれたトゥルプが最も長生きし、あとまで残ったことは皮肉である(表1)。

レンブラントが二六歳の若さでトゥルプを描いたとき、トゥルプは三九歳の働き盛りであった。レンブラントの画が先

REMBRANDT, TULP, DEYMAN 相互の関係

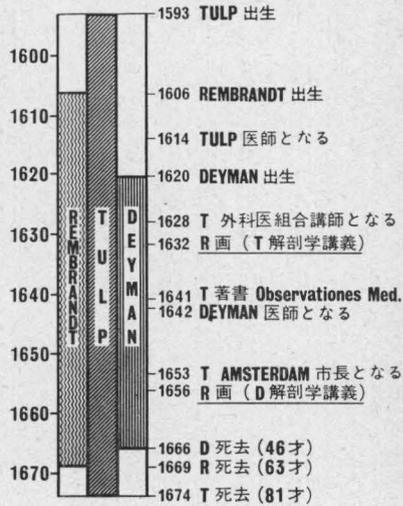


表1. レンブラント・トゥルプ・デーマン相互の関係 (古川)

はのちにアムステルダム大学に発展し、トゥルプは市長として大学の学長を兼ねた。

レンブラントはトゥルプの患者として、診療を受けたことがある。両者の関係で特記されているのは、トゥルプの娘が一六五五年に、レンブラントの後期のパトロンであるシックスの妻となったことである。レンブラントはシックスの母の肖像を一六四一年に描いたことがあり、当時二三歳の染物業者だったシックスは、のちにアムステルダム市の官職につき、トゥルプ市長の部下となり、自らもあとで市長となった。先に記した通り、画の収集家としても名高い。またトゥルプのほかの婿にトリークス Arnot Tholinx と⁽⁴⁾いう医師がいた。レンブラントはこの医師の肖像を描き、また胸像を製作したと記録されている。他方レンブラントの作品「デーマンの解剖」が火災で欠損していたら、脳の解剖だけに、われわれ医師にとっては、トゥルプの画に劣らず、人気の高いものだろうと惜しまれる。

輩を追い抜いて名声を博したのは、その時代のアムステルダムにおける一流文化人、ホイヘンス Constantine Huygens、バールレウス Caspar Barlaeus、ウッシウス Gerard Vossius、トゥルプ Nicolaas Tulp、その他をパトロンに持ち、かれらの助言をうけて受け入れたからである。レンブラントをはじめトゥルプに紹介したのはバールレウスだといわれている。トゥルプが問題の解剖を行なったころ、バールレウスはアムステルダムに新設された美術学校 *Athenaeum Illustris* で教授就任演説をしていた。この学校

この三人の時代、一六世紀末から一七世紀後半はバロック時代にあたり、オランダは国家として多事多端なときだった。一六世紀半ばには、オランダはスペイン王国の一部だったが、一五六八年に沈黙公の異名をもったオラニェウイレム Willem (一五三三—一八四) が宗教と個人の自由を旗印に立ち上り、一五七二年から独立戦争に入った。一五八一年にオランダ北部七州は統合されて、ネーデルラント連邦共和国(オランダ)が設立、独立が宣言された。トゥルプやレンブラントが生まれて間もない一六〇九年に、休戦条約が成立し、事実上オランダは独立を達成した。日本の平戸にオランダ商館が建ったのは、ちょうどこの年(慶長一四)である。

オランダは一六〇二年に、東インド会社を創設し、一六〇九年には北アメリカ大陸に植民地をひろげ、一六二二年に西インド会社を創設した。三十年戦争(一六一八—一四八)がウェストファリア条約 Westphalia によって終結した際(一六四八)、オランダの独立は正式に列国に承認された。その少し前に、日本は鎖国に入り(一六三九、寛永一六)、オランダ商館は長崎の出島に移った(一六四一)。そのころは、トゥルプ、デーマン、レンブラントの三人ともそれぞれに盛に活躍するときであった。その後三次にわたる英蘭戦争(一六六五—一七四)が続き、最後にオランダはイギリスに破れ、新大陸より退いた。ちょうど長生きしたトゥルプが亡くなったときで、今から三〇〇年前のことである。

トゥルプ、デーマン、レンブラントは三人ともに、ライデン大学に学んだ。トゥルプは一六一四年に卒業し、レンブラントは一六二〇年、デーマンは一六三八年に入学したが、二人とも中途退学した。ライデン大学の医化学教授シルウィウス François de la Boë Sylvius (一六一四—一七二) がトゥルプとほぼ同じ時代であり、またブルーハーヴェ Hermann Boerhave (一六六八—一七三八) がライデン大学教授として、オランダ医学を隆盛に導き、リウエンフック Antoni van Leeuwenhoek (一六三二—一七二三) が顕微鏡を作り上げたのは、トゥルプが死去してから間もないころで、日本の蘭学に大きな影響を及ぼした時代である。

解剖の絵画史とレンブラントの作品模写の日本への紹介

西洋で人体解剖が行なわれたのは、小川⁽²⁷⁾によると、BC三二二ごろエジプトのアレキサンドリアで、Herophilus と Erasistratos の実施したのが最初だといわれる。東洋では、漢書の王莽(おうもう)にその記録があり(AD 一六)、わが国では日本書紀に、雄略天皇の三年に人体解剖が行なわれたとある。石原⁽²⁸⁾によれば、中世の科学の暗黒時代に唯一の医学研究機関であったサレルノ医学校では、アラビア文献の影響によって科学に目ざめ、一二三一年にはフレデリック二世の勅命により、五年ごとに人体解剖を実施する権利を得た。これが解剖公許の最初であり、のち一〇年にして、この勅令はさらに緩和されたという。

Major と Garrison は⁽²⁹⁾一三〇二年二月の、ボロニアの Bartolomeo da Varignana 教授による人体解剖が最も古い正確な記録だと記している。この死体は中毒死の疑のあった Azzolino という貴族で、裁判所の命によって実施された。大矢⁽³¹⁾は一五世紀ごろの彩色写本 *De proprietatibus rerum* に出ているこの解剖の図を披露した。また Proscauer⁽³²⁾によれば、最も古い人体解剖の絵として、一九五六年にイタリーの *Via Latina* (*Via Dino Compagni*) で発見された四世紀のローマのカタコンバ(地下墓地)の壁画に描かれた公開解剖の図をあげている。ボロニアの Mondino de Luzzi は一三一六年に解剖学書 *Anatomia* を完成し、一四八七年にパドアで出版したが、その扉絵には解剖の状況が描かれている。⁽²⁹⁾ Certo はフロレンスの彫刻家兼画家 Antonio Pollaiuolo (一四三三—一九八) が芸術家の立場から多数の死体を解剖していたことを記し、これが美術解剖学のはじまりとした。

オランダでは一五五五年に、はじめて人体解剖が許可された。岩熊⁽³⁴⁾は一七世紀におけるオランダの解剖学と外科学の優秀なことを強調し、理由として、当時のこの国の富強、オランダ人の気質、外科医組合の発達の三つをあげた。解剖の絵画の進歩にも触れ、これはギルトでの講習の機会が多く、現今の記念写真撮影のような心理で、画家に描かせたからだと

表 2. 17・18世紀に描かれたオランダの“解剖学講義”の画

Painter 画家	Doctor 医師	制作年	所 蔵
Aert Pieterszoon 1550—1612	Sebastiaan Egbertsz 1568—1621	1603	W-M
Michiel-Petrus Mierveld 1596—1623	W. van der Meer ?	1617	?
Thomas de Keyser 1596—1667	Sebastiaan Egbertsz 1568—1621	1619	R-M
Nicolaas Elias 1588—1655	Johan Fonteyn 1574—1628	1626	W-M
Rembrandt van Rijn 1606—1669	Nicolaas Tulp 1593—1674	1632	M-M
Rembrandt van Rijn 1606—1669	Johannes Deyman 1620—1666	1656	R-M
Adriaan Backer 1635—1684	Frederik Ruysch 1638—1731	1670	W-M
Cornelis de Man 1621—1706	? ?	1681	Delft
Johan van Neck 1636—1714	Frederik Ruysch 1638—1731	1683	W-M
Thomas van der Wilt ?	Abraham van Bleyswick ?	1727	?
Cornelis Troost 1697—1750	Willem Roëll 1697—1755	1728	W-M
Tibout Regters 1710—1768	Petrus Camper 1722—1789	1758	W-M
Adriaan de Lelie 1755—1820	Andreas Bonn 1738—1819	1792	R-M
W-M : Waagmuseum		R-M : Rijksmuseum	
M-M : Mauritshuis museum		Delft : A hospital in Delft	

うと考察した。一七一一八世紀におけるレンブラントをはじめ巨匠の解剖学講義の画は、美術的に最もすぐれたものとして、後世に残されている(表2)。この表は著者がGoldwyn(4)の表を元とし、Nuyens(7)の書を参考に、嘉門氏の援助により、補足作製したものである。Hahn-Dumaitre(35)によると、オランダの解剖学書のなかで、解剖の場面を描いた扉絵の傑作三つをあげている。その書物はパウ・Pieter Paaw : Primitiae anatomicae de humani corporis ossibus (Leyden 1615)、グラーフ・Regner de Graaf : De succo pancreatico (Leyden 1671)、ブランカールト Steven

Blankart: Anatomia practica rationalis (Amsterdam 1688) の三つである。このうちブランカールト(一六五〇—一七〇二)は「勃郎合爾都または武蘭加兒」として、わが国の蘭学期に知られている。その解剖書の扉絵は宇田川玄真(一七六九—一八三四)が著した「医範提綱付図」(一八〇八、文化五)の扉絵として、亜欧堂田善の門人新井令恭が刻した⁽³⁶⁾と云う。

わが国では、一七五四年に山脇東洋(一七〇五—一六二)によって、はじめて人体解剖図「蔵志」⁽³⁷⁾が作られた。東洋の門人で、円山応挙の門下でもある、浅沼佐盈の筆により、一七五九年に記録と図が整えられ公刊された。これに次いで、杉田玄白らの解体新書(一七七四)、宇田川玄真の医範提綱(一八〇五)、その他の解剖書と図版が刊行された。江戸時代の実証的解剖図としては、四〇種以上のもので残されているが、腑分けの状況を描いた絵画は少ない。石原によれば、市太郎解剖図(越後長岡)の巻頭にある解剖場の実写図(一八三三)は早書略画風の墨絵ながら代表的なもので、江戸時代の人体解剖を知る上で貴重なスケッチであるという。明治一〇—二〇年の作と推定されるものに、一陽亭芳国の描いた紅毛人の日本女性解剖図がある。昭和になってからだが、山村耕花(一九二七年作、慶大医学部解剖学教室蔵)や、前田青邨(一九七〇年作、院展出品)らの「腑分けの画」が江戸時代の腑分けを描いた傑作として知られている。⁽³⁹⁾

江戸時代には、ショメル Noël Chomel の家庭百科辞典“Huishoudelijk Wordenboek 1768”の翻訳書「厚生新編」その他によって、洋画、油絵、版画などの知識や技術が伝えられたものと推定される。従って西洋の名画も、模写によってある程度観賞できたであろうし、当時の洋画家のなかには、レンブラントの名も知られていたかもしれない。レンブラントと日本の関係は別の面からも知られている。嘉門氏はレンブラントが一六四二年から五九年の間に、四三点のエッチング作品に和紙を使っていたことを確かめた。このことは江戸時代に、上等な和紙が長崎からアムステルダムへ輸出されていたことを証明している(朝日新聞、昭四五・二・二掲載)。

「トゥルプの解剖学講義」の模写がいつはじめて日本に渡来紹介されたかははっきりしていないが、わたくしは江戸時代

でなく、明治になつてからだと推察してゐる。“De anatomische les van Dr. Nicolaas Tulp”は通常「トゥルプ博士の解剖学講義」と訳されているが、この doctor はとくに「博士」の意味でなく、むしろ「医師」の意味ではないだろうか。富士川⁽⁴⁾によれば、大化改新のあとに撰定された大宝令に「医博士」の名があり、博士（はかせ）は医人のうち優秀なものが任せられたが、室町時代よりのち江戸初期まで、わずかに朝廷医官のうちに博士の名を残すだけとなり、以後消滅した。明治二〇年（一八八七）の学位令発布によって、再び「博士」（はくし）の呼名が用いられるようになり、広義の doctor は「医師」全般に、狭義の doctor が「博士」として用いられている。学位令発布前ならば、Dr. Tulp の doctor を「博士」でなく、単に「医師」と訳しただろうと推定すると、レンブラントの名画「解剖学講義」の模写が日本に渡来紹介され、われわれの先輩医師がこれに接し得たのは、学位令発布の一八八七年よりあとのことであろう。嘉門氏も、レンブラントの作品が日本に紹介されたのは、明治三〇年ごろ、即ち一九世紀末だろうと推定している。

摘 要

レンブラントの名画「トゥルプの解剖学講義」は、トーゴ、カメルーン、アジマンの切手図案に採用された。この画はトゥルプの要請により、一六三二年レンブラントが二六歳の若さで描いたかれの出世作である。解剖を見学している人たちの氏名は記録が残されている。現在ハーグの王立美術館に所蔵され、多くの人びとに觀賞されている。

「デーマンの解剖学講義」もトーゴの切手図案となったが、この画は一六五六年レンブラントが五〇歳の円熟期に描いたものである。画の大部分は、一七二三年アムステルダム外科医組合の講堂の火災で焼けた。現在アムステルダム国立美術館に所蔵されているものは、その一部だが、原画のスケッチによって、全景を想像することができる。ドイツの医師で画家の Jan Jahl はこの画を模型的に描き、解説を加えている。

レンブラントの肖像は多くの国の切手に描かれているが、ここにはオランダで発行された二種の肖像切手写真を供覧し

た。また著者はトゥルプ、デーマン、レンブラントの三者の相互関係をわかりやすく知るために、表を複製して参考に供した。

一七一—一八世紀におけるオランダの解剖学の絵画は、美術的にすぐれたものとして後世に残されている。「トゥルプの解剖学講義」の画は、とくにわれわれ医師に親しみ深いものだが、日本の先輩医師がはじめてこの名画の模写に接することができたのは明治の中期で、一九世紀末のことと推定する。

レンブラントの二つの解剖の名画は、立派な美術品としてのみならず、一七世紀における医師たちの知識欲を表現したものであり、芸術と医学史の貴重な資料として、世界の人びとからいつまでも、觀賞し続けられるであろう。

本稿の大意は日本医史学会・蘭学資料研究会の合同例会（昭和四五・一二・一九）で口演した（日医史一六、三〇四、蘭学資料研究報告二四一、昭四五）。座長緒方富雄博士と同例会に映画「レンブラント、人間の画家」を供覧されたオランダ大使館に謝意を表す。美術方面より、嘉門安雄氏（ブリジストン美術館）の教示と風間完画伯の作品贈与を受けた。医史学方面より、小川鼎三、大島蘭三郎、新井正治、八十島信之助、三井但夫、石原 明、酒井シヅ、岡西順二郎の各博士、その他の方がたの指導、援助を頂いた。文献のコピーには、Mrs. Jean Runciman (Wellcome Institute), Prof. S. M. Blufarb (Northwestern University, Chicago) 岡山大学医学部図書館の特別な配慮を得た。以上の方がたに厚く御礼を申し上げます。

文 献

- (1) 古川 明：メデイカル・フィラテリーと初期の医学切手 医学のあゆみ八四、六五〇—六五四、八五、二六四—二六六、四五—五—四五七、一九七三。
- (2) Heckscher, W. S.: Rembrandt's Anatomy of Dr. Nicolaas Tulp. An Iconological Study. New York University Press. 1958.

- (3) Tyssen, E. H. M. : Nicolaas Tulp. Medical Life 36, 394—442, 1929. 39, 317—328, 1932.
- (4) Goldwyn, R. M. : Nicolaas Tulp. Med. Hist. 5, 270—276, 1961.
- (5) Bluefarb, S. M. : Nicolaus Petreus alias Nicolaas Tulp (Editorials). J. A. M. A. 182(4), 491—492, 1962.
- (6) 黒川幸一：オランダ・ベルギー、海外ガイド13、日本交通公社、一九七二。
- (7) Nuyens, B. W. Th. : Anatomische Lessen te Amsterdam 1550—1798. Amsterdam, P. N. van Kampen & Zoon.
- (8) 嘉門安雄：ロンブラント、中央公論美術出版、一九六八。
- (9) Massimo Pallottino (Editor in chief) : Encyclopedia of World Art. McGraw-Hill, New York, 1966.
- (10) 小川鼎三：絵画のなかの医学シリーズ5日本メルク、一九六九。
- (11) Wallace, R. : The World of Rembrandt. ロンブラント、日本語版(嘉門安雄監修)、タイムライオンブックス、一九六八。
- (12) Gerson, H. : Rembrandt Paintings. New York, 1968. (Lecaldano による)
- (13) Lecaldano, P. : The Complete Paintings of Rembrandt. Weidenfeld and Nicolson, London, 1973.
- (14) Jantzen : Heckscher による
- (15) Artelt, W. : Heckscher による
- (16) Jones : Heckscher による
- (17) Newerla, G. J. : Medical History in Philately and Numismatics. Waltham, MA., 1971.
- (18) Vaubel, E. : Die Anatomie des Dr. Joan Deyman. Die Grunenthal Waage 8(4), 175—178, 1969.
- (19) Cetto, A. M. : Dr. Deyman の解剖。チバ：かがみ 1 : 17, 86, 1960. 2 : 25, 1961.
- (20) 八代修次：ロンブラント、フアフリ世界名画集18、平凡社、一九七二。
- (21) 辻 茂：マンテニア、フアフリ世界名画集70、平凡社、一九七二。
- (22) 土方定一：評伝ロンブラント・ファン・レイン、新潮社、一九七二。
- (23) 阿天坊羅：ロンブラント、Art Library 8、鶴書房(東京)、一九七二。
- (24) Genaille, R. : Rembrandt. Self-portraits. Tudor Pub. Co., New York. 1963.
- (25) Anonym : Rembrandt. L'Echo Timbrol. 1374, 1968. 1381, 1969.
- (26) Lindeboon, G. A. : Iconographia Boerhaavi (Book Review). Med. Hist. 8, 384, 1964.

- (27) 小川鼎三：解剖とその歴史、小川ほか：解剖学Ⅰ、金原書店、一九七〇。
- (28) 石原 明：医史学概論、医学書院、一九五五。
- (29) Major, R. H. : A History of Medicine. Charles C. Thomas. Springfield, Ill., 1954.
- (30) Garrison, F. H. : An Introduction to the History of Medicine. W. B. Saunders Co., Philadelphia & London, 1968.
- (31) 大矢全節：イタリアの外科（表紙のことば）、手術、二七（七）七三七、一九七三。
- (32) Proscauer, C. : The Significance of Medical History of the Newly Discovered 4th Century Roman Fresco. B. N. Y. Acad. Med. 1958. (Encyclopedia of World Art にみる)。
- (33) Cetto, A. M. : 美術家のための解剖の史的展望、チバかがみ、一、一七、一八、一九六〇。
- (34) 岩熊 哲：和蘭の解剖学と外科術（倉仁医館随筆39）、九大医報一四（九）四四二—四四九、一九四〇。
- (35) Hahn, A. et Dumaitre, P. : Histoire de la Medecine et du Livre Médical. Oliver Perrin. Paris, 1962.
- (36) 小川鼎三：解体新書、中公新書、一六五、一九六八。
- (37) Achiwa, Goro (阿賀波出郎) : On the First Anatomical Chart in Japan. Japanese Studies in the History of Science. 5, 193—205, 1966.
- (38) 石原 明：実証解剖図シリーズ20、三共株式会社、一九六九。
- (39) 三井但夫：腑分け（解剖）の絵について、慶応義塾大学医学部新聞、二四二、一九七一。
- (40) 富士川游：日本医学史（決定版）、日新書院、一九四一。

Rembrandt's Famous Painting "Anatomy Lessons of Dr. Tulp and Deyman"

by Akira FURUKAWA, M.D.

Rembrandt's famous painting "Anatomy lesson of Dr. Tulp" was taken up as the design for the postage stamps of Togo, Caeroun and Ajman (Fig.1). This painting was drawn in 1632 by Rembrandt in his youth (26 years old) at the request of Dr. Tulp, and for this work, his name became world famous. The names of the inspectors in this anatomy lesson were recorded (Fig.2). Now it hangs in the Mauritshuis museum in the Hague, admired by many people.

"Anatomy lesson of Dr. Deyman" was also taken up as the design for the stamp of Togo (Fig.3). This painting was drawn in 1656 by Rembrandt, in his mature period (50 years old). A large part of the painting was burned in 1723, by the fire of the Surgeon's Guild in Amsterdam. Now its remaining part hangs in the Rijksmuseum in Amsterdam. We can imagine its original picture from its sketch which is left now in this museum (Fig.4). The schematic drawing of this picture was drawn by the German physician-artist Jan Johl (Fig.5).

Rembrandt's self-portrait has been copied many times in the postage stamps of the world. I am showing two of them, issued in the Netherlands (Fig.6). The relation between Tulp, Deyman and Rembrandt is listed by the author (Tab.1).

Dutch anatomical paintings from the 17th to the 18th centuries are kept as excellent works of art

(Tab.2). "Anatomy lesson of Dr. Tulp" is especially familiar to Japanese physicians. It was at the end of the 19th century when the copy of this picture was introduced for the first time in Japan and our senior physicians could admire it.

Rembrandt's two anatomical paintings are not only great works of art, but also the representation of the appetite for medical knowledge of physicians in the seventeenth century. They will always be admired by many people in the world, as treasures of fine art and medical history.

(Shinohara Hospital, Suginamiku, Tokyo)

庶民史料にみる江戸時代の疾病

—「日本人の病歴」覚書

立川昭二

はじめに

当世は貧者富者悉く偏りて、富者も多く出来貧者も多く出来て双方に疾病起り、まず富者は安逸懦弱に暮し常に美味に飽き淫酒に度を過し、ひたもの（すべて）煩いをなし、また貧者は寒風に犯され炎暑に焦れ或は日夜朝暮の心労に倦^うなして、煩を生ずるなり。其内貧者の煩いは富者の煩よりも数多き事なれども、存分の薬を吞むこと能わず。富者は聊のことにも身を困いて薬を吞み、或は薬薬慰薬などいうて、榮耀にも薬を用るなり。また医者も富者の病氣といえ、喜びて種々にいいなして薬を用るなり。また留飲といえるを煩うもの多し。この病以前はなかりしといふ。当世は人々安逸にして身体を遣はず氣を遣うといひ、また好味暴食する故ともいふ。昔は身体を遣はぬものも暴食するものもなければ、いかにも此病はなかりしなり。是は何様太平の世の疾ならん。当時もとかく貴人と福人との煩なり。また当世所々に売女余多出来たる故瘡毒を煩うもの多く、また虚勞の症なるもの多しといふ。其外の疾にも品々出来たりと聞く。

これは、武陽隱士と名乗る匿名の筆者が、封建制解体期の世相を熱っぽい口調で責め立てた見聞記として名高い『世事

見聞録』(文化一三年)の「医業の事」の一節である。

ここで、下級武士出身の市井人である筆者は、いみじくも疾病の階級性、そして疾病構造の歴史性という重大な事実をみごとに指摘している。

この一文で、病名としてあげられている売春婦を病巢とする「瘡毒」とは梅毒であり、また「虚勞」の症とは労咳とおなじ肺結核と考えていいし、さらに、昔はなく「太平の世の疾」という「留飲」は、飲食の不摂生による慢性胃カタルと考えられるが、ともかく、ここでとくにあげられている以上、この三つの疾病が当時罹患率の高い疾病であったと考えていいであろう。

そして、ここではあげられていない「品々出来たると聞く其外の疾」には、いかなる疾病があつたのであろうか。時代が大きく変わろうとする江戸時代後期、日本人はいかなる病気を病み、死んでいったのか。また、当時の庶民はかれら自身その病気をどう認識していたのか――。以下は、庶民生活をつたえる史料をてがかりに、この問題にいささかの接近を試みたものである。

江戸時代の疾病構造——ひとつのアプローチ

江戸時代には、疫病が大流行した時期における限定された地域の死者数の記録などを除いては、全国はもとより各藩にかぎってみても、今日の疾病統計のようなものはまったくない。では、江戸時代の疾病構造を知ることがかりを、どこにもとめたらいいであろうか。

その時代の疾病を知るには、その時代に書かれた医書を見ることがまず考えられる。しかし、専門家による医書は、そのほとんどが医学の専門的な水準と関心から書かれているため、かならずしもその時代の民衆レベルでの疾病構造をそのまま反映しているとはかぎらない。また、専門的な用語は当時の民間の用語とかなり異なっているため、庶民の日常

生活的な病像をさぐるのに適していない場合がある。

いっぽう、一次史料としては個人の日記や回想録の類たぐいがもつとも価値が高いが、そこではある個人あるいはかぎられたある一族の病歴をさぐることはできても、やはり時代の全般的な疾病のありかたをつかむことはできない。また、官撰の史書たとえば『徳川実記』、あるいは民間人の手になる年代記たとえば『武江年表』などは、疫病、流行の記録については貴重な史料といえるが、疫病以外のさまざまな疾病はこれらでは当然のことながら欠落している。

こう考えてきたとき、その時代の疾病構造、とりわけ江戸時代のそれを知ろうとするとき、ひとつのてがかりとして考えられるのが、いわゆる見聞記の類である。

文運さかんな江戸時代には、数多くの見聞記が書かれ、あるいは出版された。名高いものでは、三浦浄心の『慶長見聞集』、喜多川守貞の『守貞漫稿』などが知られ、さきの武陽隠士の『世事見聞録』もそのひとつである。

これら見聞記はいずれもその時代の世相をありのままにうつしだしたものにだけに、当然のことながら当時の疾病のありようがありのままのすがたで出てくる。もとよりそれは、医学には素人である民間人の筆になるだけに、医学的に正確さを欠くこともあり、また、そのとりとめもない記述に統計的な意味をもとめることはかならずしもできない。しかし、世事風俗の生なまの事象を没主観的に随聞随記した見聞記の類には、おのずからその時代の民衆生活のなかの疾病の生なまのすがたがうつしだされていることもたしかなことである。

そこで、ここで試みに、江戸時代後期の見聞記のなかから、名高い『譚海』をまずとりあげてみよう。

『譚海』⁽²⁾は、寛政七年（一七九五）夏に、津村涑庵（正恭）が二十年間の筆録を十五巻にとりまとめた見聞記である。

著者津村涑庵（文化三年没）は、京都に生まれ、江戸に住み、佐竹侯（秋田）の御用達をつとめた文人で、いくつかの雅文詩歌の著作もあるが、その名をながくとどめたのは、「時々人の物語を聞置しわざのわすれがたき事を書とめ」た『譚海』一書であった。涑庵は自身全国をひろく旅行し、体験も豊富であったが、本書には直接の体験談は稀れで、ほとんど

が他人からの伝聞で、その聞書はあまりにも雑然としているが、そこには不思議に選択的偏向がなく、上は皇室大名から下は賤民乞食にいたり、場所も江戸京坂にかぎらず遠国辺地におよび、天明寛政期の世相を知る一大宝庫といえる。そのとりとめもない噂話や風説のなかには、たとえば「平賀源内エレキテルを造る事」「若州医杉田玄白解体新書の事」など歴史上の重要事件も書きとめられている。

ところで、そうした人事世事のなかには、当然疾病の話が随所に出てくるし、また疾病や薬方のことが主題として語られている条項もある。たとえば、さきの源内のエレキテルのところでは(巻二)、これが頭痛・腰痛を療治することになっており、また清国からきた白牛の糞を疱瘡の薬に用いることが、ひとつの話題としてまとめられている(巻二)。

さらに、本書が医史学の面とくに利用価値の高い理由は、全十五巻のうちのさいごの巻十五を「諸病妙薬聞書」として、あげて疾病の療法・薬方の覚書にあてていることである。筆者漆庵は医薬についての専門家ではないが、文中「田虫・水虫・しらくも・あせもの家法」があることを記しているので、まったくの素人というより医薬について多少の知識と関心をもっていった人物とおもえる。こうした人物が当時の民間流布の薬方をひとまとめにしたのが、本書巻十五であり、その意味では本書は江戸時代後期の民間療法を知るひとつの有力な材料であり、それとともに、当時の庶民の日常生活のなかにあった疾病のすがたを読みとる有力な手がかりでもある。つまり、ある疾病についていくつもの話題や薬方が記されていることは、それだけその疾病の罹患率が高かったということができ、また病名の表現法は当時の民衆が日常感覚的にいだいていた病識あるいは疾病認識のありかたをあらわしているともいえる。

そこで、まずこの『譚海』巻十五にあげられた疾病をほぼその記載順にしたがってあげ、それにたいする療法・薬方についての項目数をかぞえ、さらに巻一から巻十四にいたる他の十四巻にあげられているおなじ疾病の出度数をかぞえ、それぞれに加えてみる。

それによると、五回以上の出度数の疾病、つまり罹患率の高いとおもわれる疾病はつぎのとおりである。

眼病	23	食傷	16	齒痛	15	疝氣	13	痔	12
火傷	11	風邪	9	痢病	8	出来物	8	瘡毒	7
腹痛	7	腫病	7	疱瘡	6	淋病	6	大便不通	6
小便不通	5	中氣	5	頭痛	5	癩	5	しつ	5

このほか、疾病としてはつきりあつかうには多少問題がのこるが、出度数の多い病氣としては、つぎのようなものがある。

うち身	8	陰所の腫・疵	8	溺死	7
鼻血	6	小兒の疳	5	病犬かまれ	5

ところで、『譚海』一書の数字で推計するのはいささか心もとないので、おなじ江戸後期のおなじような見聞記としてもう一冊『耳袋』をとりあげ、そのなかに出てくる疾病を拾いあげ、『譚海』のおなじ病名のところにあてはめてみよう。

『耳袋』(あるいは『耳囊』)は、文化十一年(一八一四)に根岸鎮衛やすもりが永年の聞書を十卷千条にまとめた見聞記である。著者の根岸鎮衛(文化十二年没)は佐渡奉行から勘定奉行を経て江戸町奉行にまで累進した官界の要人で、その情報網からおのずと耳に入った奇談・紀聞を細大もらさずありのままに筆録したのが本書で、『譚海』とおなじように、その話題の範囲はきわめてひろく、主観的な要素はほとんどみられない。その千条のなかには、「積聚の事」「瘵さいつの妙薬の事」といったように、疾病を主題とした条項がいくつもあり、またその他の話題でも疾病にふれている場合が多くみられる。

この『耳袋』のなかの疾病としては、疱瘡(10)・疝氣(5)・浮腫(5)・痔(4)などが出度数の高い疾病としてあげられ、また『譚海』には記されていない病氣として、たとえば「はやうちかた」(狭心症)などがみえる。

さらにここで、これら見聞記二書に、江戸時代後期の庶民生活をうつつしだした文学として小咄(笑話)と川柳をとりあげ、そうした世界で疾病がどのようにとりあつかわれているかを、おなじように出度数をしらべ、これをさき見聞記の病名に加えてみたい。

小咄の史料としては、宮尾しげを編『江戸小咄集1・2』（東洋文庫）によった。同書は「俗談今歳花時」（安永二年）から「忠臣蔵開帳咄」（嘉永四年）にいたる二十四冊の小咄本（笑話本）があつめられている。また川柳の史料としては、さいわい山本成之助著『川柳医療風俗史』があるので、同書から抽出した。

こうして、小咄・川柳という庶民生活のなかに出てくる病気を、前記見聞記二書の病名に加え、それぞれの出度数をあげ、表示してみるとつぎのようになる。

譚	海	耳	小	川	計
眼	病	眼	眼		13
とり	め		病		
9	1		1		
や	め		病		
み	1		3		
1					
つ					
き					
7					
風					
眼					15
1					
雪					
め					
1					
もの					
もら					
い					
2					
め					
まい					
1					
片					
眼					
1					
盲					
人					
2					
盲					
目					
1					
め					
くら					
1					
眼					
がん					
一					
いち					
1					
歯					
ぐ					
きは					
れ					
2					
歯					
痛					
8					
4					
か					
く					
痛					
症					
4					
こ					
う					
ひ					
4					
咽					
喉					
腫					
痛					
1					
口					
中					
腫					
痛					
1					
耳					
だ					
れ					
3					
鼻					
血					
6					
鼻					
血					
2					
鼻					
血					
1					
近					
眼					
1					
19					
5					

ま め 3	足 の 腫 1	わ き が 3	手 足 の 痛 み 2	腹 瀉 1	腹 く だ り 5	腹 痛 1	腎 虚 1	疝 氣 13	肩 は り 3	頭 痛 5		魚 の 目 1	く さ 2	し ら く も 1	い ぼ 3	頭 の 出 来 物 8	虫 歯 5
						腹 病 1		疝 氣 5		頭 痛 1		魚 の 目 1			い ぼ 6		虫 歯 1
							腎 虚 3	疝 氣 3		頭 痛 1							
							腎 虚 5	疝 氣 4			面 に き 施 び 2						
					8		9	25		7					9	8	
〃 疳 5	〃 胎 毒 2	小 児 虫 氣 1	陰 門 の 疝 1	産 後 の 腫 氣 1	血 道 3	陰 所 の 腫 ・ 疝 8	痢 病 8	痔 12	淋 病 6	寝 小 べ ん 1	小 便 不 通 5	大 便 不 通 6	風 疾 1	す ね く さ 1	雁 が さ 3	ふ み ぬ き 2	く じ き 1
					血 道 1		痢 1	痔 4	淋 病 2	寝 小 便 1						踏 た て 1	
								痔 1	淋 病 2	寝 小 便 1							
									淋 病 2								
						8	9	17	12		5	6					

勞咳2		いも(毒)1	河豚毒3	魚毒3	きのこ(毒)2	食傷7	喘息2	黄胆病3		痰こぶ2	痰血1	痰咳2	風・風邪9		//ひまわり1	小児馬脾風1	譚海
	解毒1				茸毒1		ぜんそく2		吐血1			咳2	風邪2	はやくさ1			耳袋
						食傷2							風2				小咄
勞咳5						食傷1	喘息1						はやり風5				川柳
7			11			10	5						18				計
下血1		溺死7	酒毒1	癩痢4		乱心1	狂気2	気ちがい1	瘡3	餓死2	疫癘1	疫病1	霍乱3	中気・中風5	癩・積5	気鬱2	譚海
	雷溺	死4			狐つき5	乱心1							寒かくらん1		積聚2	癩病1	耳袋
			酒乱1											中気1	癩・差込4		小咄
				癩痢2	狐つき1				瘡2				霍乱2	中風2	癩6		川柳
		11		6					5				6	8	17		計

	譚	海	耳	袋	小	咄	川	柳	計		譚	海	耳	袋	小	咄	川	柳	計
	変	生	1								流	飲	1						
チ	ン	カ	1							疝	症	1							

さて、この表の合計をみると、つぎのような疾病が高い数字をしめしている。

眼病 28 疝氣 25 瘡瘡 22 食傷 21 齒痛 19 風邪 18 瘡毒 18 痔 17 癩 17
 腫病 14 火傷 13 淋病 12 痢病 9 腎虚 9 中風 8 腹痛 8 労咳 7 頭痛 7

まず、目につくのは第一位が眼病ということである。日本人に眼病が多いということは、のちに来日したポンペなども指摘しているとおりで、日本に眼病が風土病的に淫侵していたことを、ここであらためておもしろいられる。なお、目の齒の病氣はきわめて日常的な疾病であり、また民間療法にもっとも依存しやすい疾病であったということも、こうした史料の性質からこの二つの疾病の出度数の高い理由でもあったろう。

ベスト・テンのなかに入っている疫病（流行病）として、瘡瘡（痘瘡）・風邪（流行性感冒）・瘡毒（梅毒）の三つがあるが、おそらく伝染病のなかでこの三者はもっともひろくふかく日本人を侵していたと推測していいであろう。それらに、ここでは順位は低いが労咳（肺結核）がこれらとならぶ伝染病として大きな力をふるっていたにちがいない。

食中毒は素人でも診定できるといふ理由もあるが、食傷が第四位の疾病であったということも記憶されなければならぬ。また、栄養障碍が主因と考えられる腫病（脚氣）が第九位で高い罹患率であったことを示唆しているし、さらに生命に直接かかわらないが、日本人の食生活・住生活に起因するとおもわれる疾病として痔が第八位を占めているということも、注目すべきであろう。

そして、さいごに目につくのは第二位の疝氣と第八位の癩の二つの疾病である。いずれも今日の医学辞典にはない病名である。しかし、こうした病名で呼ばれた疾病が今日ないというのではない。むしろ当時の医学的水準からはっきりと診

定・判別できないまま、とくに胸部・腹部・下腹部の疼痛をともなう各種の疾病が、こうした俗称で一括され、江戸時代の庶民のあいだでひろく用いられたのである。この両者は、疝癪と一体化していわれることもあるが、ともかく第二位と第八位という高い順位を占めているということは、庶民史料という性質上当然のこととはいえ、きわめて興味ぶかいことである。また、当時の医学用語としてはかなり一般化していたと考えられる乳岩（乳ガン）などの病名がみられないのも、べつの意味で興味ぶかい。

ところで、こうした数字が、ただちに江戸時代の疾病構造をしめしていると主張することはできないし、いわんや死因構造をしめしているということではない。

おそらく、江戸時代にもっとも高い死亡率をしめた疾病といえ、いうまでもなく疫病である。さきの疱瘡・風邪・瘡毒ももとより日本人を侵した大きな疫病であるが、より激甚な惨禍をもたらしたのは、江戸時代にたびたびおそってきた飢饉・災害などの前後に流行したいわゆる時疫とよばれる疫病で、これによって一時に一国でなん万という人びとが大量死亡した惨事が、江戸時代には繰り返しておこった。

この時疫とはなにか、という問題は、別に考察されなければならないが、ここでは、それは腸チフスなどを主症とし、それに感冒などが合併し、さいごに肺炎などを併発したものとだけいうにとどめておく。⁽⁵⁾

また、飢饉による餓死は、いわば急性の栄養欠乏症というべきで、これを疾病のなかに入れるとすれば、これが江戸時代の死亡率のもっとも高い疾病という意味で、死因第一位の疾病であったと考えられる。さらに民衆総体にとりついていた慢性栄養失調も当然考慮されなければならない。

『譚海』には、天明飢饉にふれ、この疫癘・餓死という言葉がそれぞれ一度だけ出てくる。こうした飢饉と疫病とはあまりにも日常的な風景であったためか、あるいは奇談・異聞を主題とするこうした見聞記、また諷刺的な話題を内容とする小咄や川柳では、その記載はおのずと欠落したとも考えられる。

とはいえ、周期的におこるこうした突発的な飢餓と疫病の発生をのぞけば、さきの表にあらわれた出度数の高い疾病が、当時の日本人の大多数を日常苦しめていた罹患者率の高い疾病であったこと、また死因につながる疫病、たとえば痘瘡・瘡毒・風邪・食傷・中風（脳卒中）・労咳などの疾病が死因順位の高い疾病であったということは、いちがいに否定することはできないであろう。

江戸時代の庶民の病識——疝氣と癩をめぐって

見聞記それに小咄や川柳といった庶民生活史料のなかにあらわれた江戸時代の疾病として、前掲の表でみるかぎりでは、三つの疫病（伝染病）をのぞくと、今日のいわゆる内科的な疾患としてベスト・テンに入っているのは、疝氣と癩それに食傷（食中毒）と腫病（脚氣あるいは腎臓病など）だけである。つまり、当時の民間の医学知識の水準から、あきらかに食中毒と診定される食傷、浮腫の症候をしめす腫病とを別にすれば、疼痛をともしなう胸部・腹部・下腹部の内臓疾患のほとんどを、疝氣あるいは癩（積聚）の名称で呼んでいたことがわかる。

したがって、人びとがいわば自分流儀でつかったこの疝・癩の名でよんだ症候群が、今日のいかなる疾病にあたるかを推定することはきわめてむづかしい。また、医家も疝・癩について論じており、ふるくは平安時代の『医心方』（九八二年）に、また江戸時代では『病名彙解』（一六八六年）などにも、疝氣・積聚についての解説がみられるが、そうした医家の議論・解説だけから、こうした民間用語に診断をくだすこともまた妥当でない。

そこで、ここでは見聞記などの庶民生活史料にみられるこうした疾病の症例・薬方をいくつかひろい、医家の説とも照合せながら、これらの疾病の正体にいささかでも接近してみたい。

疝 氣

疝氣の薬

大便のとき、白き虫うどんを延したるやうなる物、くだる事有。此虫甚ながきものなれば、氣短に引出すべからず、箸か竹などに巻付て、しづかに巻付々々、くるくるとして引出し、内よりはいけみだすやうにすれば出る也。必氣をいらちて引切べからず。半時斗にてやうやう出切る物也。此虫出切たらば、水にてよく洗て、黒焼にして貯置べし。せんきに用て大妙薬也。此虫せんきの虫也。めつたにくだる事なし。ひよつとしてくだる人は、一生せんきの根をきり、二たびおこる事なし。長生のしるし也。

これは『譚海』巻十五に出ている疝氣についての説明のひとつである。筆者津村涼庵は、この説をよほど思い込んでいたのか、巻十三にもこれとほとんどおなじ文章が出ている。

ところで、この文章からみるかぎりでは、排泄にともなつて出てくる白い細長い虫とはあきらかに条虫などの寄生虫であらう。したがつて、虫が出きると疝氣がおさまるといふ意味では、疝氣は寄生虫病とここでは考えられる。

日本人は最近まで寄生虫保有率の高い国民であつたが、肥料に尿管を使用していた江戸時代は非常に高率の寄生虫病が浮侵していたことはいふまでもない。そして、寄生虫がひきおこす症状には、激しい疝痛をともなう腹痛があり、これはときに胃潰瘍の穿孔や胆石症と間違えられる。また胃の中に入れば胃瘰癧をおこし、腸に入って腸閉塞をおこす。さらに回虫は移動しやすく、虫垂炎や胆嚢炎などもおこす。今日の医学でいう疝痛 Colic のうちもつとも多い胃疝痛・胆道疝痛には、寄生虫症のものがある。疝氣にはまず、こうした寄生虫に起因する疾病があつたと推測される。

つぎに、『譚海』には、疝氣についてつぎのような薬方が記され、「せんき腰いたみ」といふ表現が使われている。

せんき腰いたみ忽なおす方

鳥もちを大丸薬ほどにまるめ、砂糖にても氷おろしにてもまぶし、五粒程さゆにても茶にても用べし。

せんき腰いたみには

またたび一味せんじて、其湯を飲べし、即功有。

これとおなじ表現は、『耳袋』の「疝痛を治する妙薬の事」という条項に、「疝氣にて腰を痛め候事度々成しが、またたび壹匁、酒を茶碗に一盃用ひて即効を得し」という文章にみられる。

ここで、疝氣に腰痛という随伴症状のあることがはつきりと観察される。そして、またたび（木天蓼）は、今日の漢方でも、腰痛・疝痛の処方に用いられている。

いうまでもなく、腰痛には原因も症状もいろいろあり、今日の医学でも、精密な検査をしないと正確な診断がくだせない。江戸時代にいわれた腰いたみも、その原因は直接に腰の筋肉や脊椎あるいは神経系にもとづくもの、たとえば椎間板ヘルニアや坐骨神経痛ばかりでなく、内臓の潰瘍や胆石あるいは糖尿病、またひろく泌尿系の疾病や婦人科の疾患からくる腰痛も、当然このせんき腰いたみのなかにふくまれていたであろう。したがって、疝氣には、脊椎や筋肉の局所性疾患による腰痛はもとより、腰痛を随伴症状とする全身性疾患、また反射的な腰痛をしめす内臓諸器官のさまざまな疾患が、そのなかにふくまれていたと考えなければならぬ。

また、疝氣による疼痛は、寒冷にあうととくに激しくなることがしばしば記されている。

たとえば、小咄本のひとつ『笑長者』（安永九年）には、「疝氣」と題した小咄に、「疝氣の隠居が、自分の疝氣がおこると雪がかならず降る」といった話があり、また、『今歳花時』（安永二年）には、疝氣持の男が女郎買いに行つて、「あまり冷えるから火鉢できん玉をあぶつて居る」などという状景がみえ、近松門左衛門の作品『重井筒』にも「冷える加減か俄に疝氣が起つた」とある。去来に「夕涼み疝氣おこしてかへりけり」という発句があり、つぎの川柳なども疝氣

と寒冷との因果をしめしている。

冬を隣りに疝気芽を出す

雪あたりばつたりと寝る疝気持ち

ふるくから、疝(アダハラ)は寒の侵入によっておこると考えられ、かつて『医心方』⁽⁶⁾に、「疝ハ痛ナリ、或ハ小腹痛ミテ大小便ヲ得ズ、或ハ手足厥冷シテ臍ヲ繞リテ痛ミテ白汗出デ、或ハ冷氣逆上シテ心腹ヲ槍キ、心痛又ハ裏急シテ腸痛セシム」と記されているように、その疼痛に寒冷との関連を示し、また『医心方』では、七疝のうちの寒疝の説明で、「寒ニ遇エバ発スルガ故ニ寒疝ト云ウ」ともある。

日本の冬季の寒冷な気象、とりわけ江戸時代後期に出現した異常厳冬、それに、総じて日本人の生活環境の低さが、こうした疝気多発の引金となったと考えられよう。

さらに、近世初頭の医師曲直瀬玄朔(一五四九—一六三一)の『済民記』⁽⁷⁾では、疝の証として、たとえば「寒疝は囊冷て硬く玉にひく。陰経萎て痛む。是れは水を渡り湿りたる処に臥し風寒におかされて痛むなり」、また、「狐疝は腫れて瓦の如し、臥す時には小腹に入り立つはへのこに入る」というように記し、泌尿器疾患またはヘルニアとして理解していた。

そして、見聞記や小咄の書かれた江戸時代後期になると、この疝気について、医家ではたとえば香川修徳(一六八三—一七五五)などは、その『一本堂行余医言』巻三で、疝は内臓に鬱気が凝滞して疼痛をおこすもので、おもに下腹部にこり、四方に移動し、ときには心臓を衝くこともあるが、とくに陰囊あるいは辜丸、また背脊や脇腹に激痛を与える⁽⁸⁾、と説いている。

こうした平滑筋の攣縮性の疼痛としては、たとえば浄瑠璃『源平布引滝』にみえる「疝氣の筋ばり」といった表現がそれにあたるだろう。また、小曲集『鹿の子餅』（明和九年）にある「きんたま」と題した話にみえる「疝氣できんたまの大きくなる事土塚のごとし」というように、疝氣には睾丸が腫張して脱腸（ヘルニア）をおこす症例のあることをしめしている。

また、蘆川桂洲の『病名彙解』⁽⁹⁾（貞享三年）には、「病源」よりの引用としてつぎのように記している。

諸疝ハ陰氣内ニ積テ復寒氣ノタメニ加ヘラレ、榮衛ヲシテ調ワザラシメテ、血氣虚弱ス、故ニ風冷其腹内ニ入テ疝ヲナスナリ。

さらに、『病名彙解』では、これにつづいて、「入門」からの引用として、疝氣についてつぎのように説いている。

酔飽勞役房慾忿怒火ヲ動シ、火鬱シテ久シキトキハ湿ヲ生ジ、津液凝テ痰瘀ヲナシ、流テ肝経ニ入ル。肝ノ性ハ急速ナリ。又暴ニ外寒ノタメニ束ネラル。是ヲ以テ痛甚シ。専ラ寒ト言モノアリ。其標ヲ論ズルノミ。

じつは、『譚海』巻十の一文に、「年来湿氣おほく、殊に疝氣をくるしみ」という表現がある。この湿とか湿氣というのが正確にはなにを指すかということにははっきりしないが、慢性皮膚疾患あるいは梅毒とする説もあり、ともかくこうした文章から察すると、疝氣のなかに肝臓病・腎臓病それに性病などの疾病もふくまれていたことが暗示される。

なお、当時来日した外人のなかには、たとえば医学・植物学者のツンベルグ（一七四三—一八二八）は、その旅行記に⁽¹⁰⁾、「鍼の療法の主な効力はセンキと称する胃痛を鎮めることであり、センキは酒を飲む結果だと思ふ」と述べ、さらにつきぎのような観察を記している。

最も一般にある病は、私の見たところではセンキの病である。この国に暫くいる外人もこの病にかかる。この病は激しい痛を起し、体の各部に腫物を残し、屢々水腫病を誘発し、続いて眼疾を起し、瘰癧が固くなる。

このように、疝氣は、今日の医学でいうところの疝痛を主証とする疾患、たとえば寄生虫症、腹部・下腹部の内臓諸器管の潰瘍や胆石症、ヘルニア、睾丸炎などの泌尿系の疾患、婦人病など、さまざまな疾病がふくまれ、とくにその疼痛は

寒冷によって症状が悪化するもので、これらを入びとは医学的に診別できないまま、今日のいわゆる症候群のひとつのように、一様に疝氣と呼んでいたと考えられる。

そしてあるいは、そうした症状が悪化すれば、『東海道中膝栗毛』にあるように、なかには、「あそこの番頭めが、此間疝氣が天窓へさしこんで、それなりにあたまがしゃっきりとなって死だ」ということも間々おこったのかもしれない。

癩

『譚海』巻十五にみえる疝氣の条項に、つぎのような一文がある。

疝氣の薬、疝積散と云、芝新橋横町加賀町にて商ふ。

右土用に入日、寒に入日、一年に兩度服する薬なり。此日に此薬を用れば、せんき・しゃく根をきりておこらず。

これを見ると、疝氣と癩とを病名では区別しても、ときには療法で区別していないことがわかる。さらに、たとえば『耳袋』の一節、「疝癩胸を責さし込て時々苦しみける」というように、疝癩と一体化した病名としてもちいる場合さえでてくる。

ところで、疝氣がおもに腹部・下腹部の疼痛を主証とするのにたいし、いまの『耳袋』の一節、「胸を責さし込て」というように、癩は胸部の疼痛を暗示するものが多い。近松門左衛門の作品『用明天王職人鑑』にも「胸の癩がさしのぼり」という表現があり、『譚海』の癩の薬方のところでも、つぎのような説明がみられる。

積の張葉

楊梅皮末・胡椒末・蕎麥粉

右目形等分にして酔にとき、めし粘にて紙に付て、胸にはるべし。夫より胸へ差込事なし。但此粉平日は別々に包て貯べし。ひとつに包置時は用て功なし。

もとより、これだけではいかなる疾病であるかは診定することはできないが、胸部の疼痛をとまなう急性の疾患といえ、たとえは心筋梗塞や渗出性肋膜炎などが考えられる。

いっぽう、癩には胸部の疼痛だけでなく、疝氣とおなじように、腹部の疼痛を示す表現も多い。たとえば、小咄本『喜美談語』(寛政八年)では、癩というのは「腹の内に一尺ばかりの棒があつて、つっぱる。夫がつかえるのだ」という表現があり、また当時の川柳にも、つぎのような癩をよんだ句がある。

芋虫のこなししている強い癩

奥様の癩がさし込むお脇腹

第一句は芋虫のようなこなし(しぐさ)をして腹部を丸くまげて苦しんでいる病人をあらわしており、第二句の脇腹は妾腹の意と側腹部の意とををかけているところから、やはり腹部の疼痛をあらわしている。こうした表現から、いっぽんに癩は発作的な腹痛、いわゆる胃痙攣あるいは神経性の胃痛であると考えられてきた。

他方、専門の医学の分野でも、癩についてはふるくから論ぜられ、たとえば『医心方』では、陰陽の気が内臓の一部に集積して腫塊をなし、種々の症状を發すると説かれ、その説は近世初頭の曲直瀬玄朔の『医学天正記』などにうけつが

れ、江戸時代後期になると、さきの『病名彙解』では、「病源」からの引用として、積聚についてつぎのような伝統的な説をあげている。

積聚シヤクツ

五積六聚ノ分チナリ。病源ニ云、五臟ノ氣積ヲ名テ積ト云、六府ノ氣聚ヲ名テ聚ト云。積ハ痛テ其ノ部ヲ離レズ、聚ハ其ノ痛常ノ処ニアル事ナシ。難經五十五ノ難ニ云、積ハ陰氣也、聚ハ陽氣也。故ニ陰ハ沈テ伏シ、陽ハ浮テ動ク也。五積ハ肥氣肝伏リヤウ、心痞氣脾息貫肺貫豚腎ナリ。六聚ハ六府ニアツカル也。

このように、積聚は内臓に気が積んで腫瘤のようなものができて発症するという考えを示す一節が、『耳袋』につぎのような奇談として記録されている。

積聚の事

近き頃の事とかや、在辺に手習の師有ける。常に積聚を愁て、死に至りて其子及び隨身の弟子近隣の者を頼けるは、我死せば火葬いよし何卒腹中の積聚を打碎給るべし、後來の人積を愁ふ助養手段にもならんと呉々申置身まかりぬれば、遺言に任せその死骸を焼けるに、背中に一塊有。則積塊也とて、子弟其外共集りて、鉄鎚或は石を以打に聊も不碎、千術万計なす共破れず。折節古老来りて其訳を尋、不審に思ひ、手に持たる杖を以突ければ、武ツ三ツに破れける。皆々不審に思ひ、破れたるを集め石鉄鎚等にて打に、始のごとく聊も不割也。杖もてすれば微塵となる故、右杖は何の樹なりと尋るに、いたどりを以て造り候よし。虎杖は積を治する妙薬ならんと爰に記す。

いかに昔であっても、火葬のあとに病変組織が残るということはなく、鉄槌をもって打碎けなかったその積塊が、虎杖コウシヤクの杖で微塵に打碎けたというのは、積聚の鎮痛薬に用いられたイタドリイタドリ（疼取り）にかけた作話でしかないだろう。しかし、こうした話から、癩には、日本人に多い胃ガン、後腹膜腫瘍あるいは脊椎の骨腫瘍などによるものがあつたと推察される。

いっぽう、癩には、今日の精神神経症とくに発作的なヒステリーなど、女性に多くみられる一種の精神機能的疾患を指

していた場合もしばしばみられる。

傾城の癩、人を見て起る也

切れると云ふ字、只見ても癩

奥様のお癩、妾の吐逆なり

また、小咄『今歳花時』にも、「御新造様が癩を引付て目を取詰ました」といった表現、あるいは『忠臣蔵』七段目茶屋場で、「おかる癩の起りし体にて反り返る」など、興奮的発作による癩癩の症状を癩とよんでいる表現がみられる。

以上、癩は、疝氣と結んで考えられることもあったが、疝氣の下腹部にたいし、癩の部位は胸部を主とし、その症状は発作的な癩癩などを主証とする疼痛をとまなう内臓の局所的疾患、それに精神神経性疾患をふくんでいたと考えられようか。

* * *

八十四歳を迎えたとき、杉田玄白は老衰のわが身をしみじみとみつめた一文『耄耋独語』を書き残したが、その冒頭で、かれ玄白はつぎのように記している。

生得健実なるにあらず、積聚などいへる宿疾もある事は常人に異ならず、時々発動する事もありし。(11)

玄白の宿疾（持病）であった積聚とはなにか。ときの名医玄白にしてすら、わが身の持病を、じつはこうした庶民の用語で診断していたのである――。

〔後記〕 この小論を作成するにあたって、大塚恭男博士および慶大名誉教授島田信勝博士から貴重な御教示を得たと、また文献についてはとくに慶大北里記念医学図書館の蔵書を利用していただいたことを記し、ここに謝意を表させていただきます。

註

- (1) 『世事見聞録』からの引用は、国立国会図書館所蔵の写本に拠った。
- (2) 『譚海』からの引用は、国立国会図書館所蔵の写本に拠った。
- (3) 『耳袋』からの引用は、鈴木裳三氏校訂の『日本庶民生活史料集成』第十六卷所載の文章に拠った。
- (4) 『ボンベ日本滞に見聞記』(沼田・荒瀬訳)につきのように記されている。「……世界どこの国といえども、日本ほど眼病患者の多いところはない。それについて、長崎での経験を材料にして眼病に関する一つの統計をつくらねばならなかったが、それによると、住民の大体八％は眼病にかかっているといわねばなるまい。もちろんこれは長崎だけのことで、他の地方ではその割合はいろいろさまざまであろうが、日本全国を通じてみて眼病はずいぶん多い。」
- (5) 拙論「飢饉のなかの疾病」『北里大学教養部紀要』第八号参照。
- (6) 『医心方』からの引用は、日本古医学資料センター刊行の翻刻本に拠った。
- (7) 曲直瀬玄朔『済民記』からの引用は、慶大北里記念医学図書館所蔵の写本に拠った。
- (8) 香川修徳『一本堂行余医言』巻三にはつぎのように記されている。「疝ハ鬱氣ノ凝滯シテ、痛ヲナス者ナリ。多クハ小腹ニ在ッテ、或ハ上逆シテ奔突急痛ス。或ハ四方ニ走注シテ痛ヲナス。或ハ臍下ヨリ升奔シテ心ヲ衝キテ痛ミ、或ハ下ッテ陰囊ニ控エテ痛ヲナシ、或ハ背脊ニ引キ、或ハ脇肋ニ牽キ、或ハ小便縮マリ、或ハ大便秘シ、或ハ前後スルヲ得ズ、或ハ大便忽チ瀉シ忽チ秘シ、或ハ久泄ヲナシ、或ハ久秘ヲナシ、或ハ舉丸ニ控エ引キテ、腹ニ入レバ則チ痛忍ブベカラズ。」
- (9) 蘆川桂洲『病名彙解』からの引用は、慶大北里記念医学図書館所蔵の写本に拠った。
- (10) 山田珠樹訳『ツンベルグ日本紀行』(昭和三年) 四四二―三頁。
- (11) 杉田玄白『耄耋独語』からの引用は、慶大北里記念医学図書館所蔵の写本に拠った。

Diseases in the Edo era as described in Popular Literature

by Shoji TATSUKAWA

This paper is an attempt to trace the structure of diseases and the view of disease among the common people in the Edo era as described in personal records...TANDAI “譚海” and MIMIBUKURO “耳袋”..., Comic stories and SENRYO “川柳”

By tabulating the names of the diseases found in the above mentioned literature, we were able to note the following diseases as serious diseases in the Edo era. (The number in parenthesis indicates the number of times of the diseases appearing in them),

Eye disease	(28)	SENKI	(25)
Smallpox	(22)	Food poisoning	(21)
Toothache	(19)	Influenza	(18)
Syphilis	(18)	Haemorrhoids	(17)
SHAKU	(17)	Edema	(14)
Burns	(13)	Gonorrhoea	(12)
Diarrhea	(9)	Impotence	(9)
Cerebral apoplexy	(8)	Abdomical pain	(8)
Pulmonary tuberculosis	(7)	Headache	(7)

According to the above-mentioned literatures we were able to surmise that the most serious epidemics

in the Edo era were those of smallpox, influenza, syphilis, gonorrhoea and pulmonary tuberculosis, and that eye disease, food poisoning, haemorrhoids and edema prevailed widely among the Japanese in those days.

On the other hand, they called most internal diseases with pain by the names of SENKI (疝気) and SHAKU (癩). It is very difficult to identify the exact name of both diseases. We, however, were able to surmise that they were the following syndromes. That is, SENKI included some abdominal diseases with colic which was caused by worms, ulcer or gallstones of internal organs, diseases of the urinary and reproductive systems and others and the pain took a turn for the worse in cold weather. SHAKU included some chest diseases with acute or paroxysmal pain which was caused by spasm of the heart or stomach and some tumours, and nervous or mental disorder.

医療及び保健衛生面における検査技術者の 歴史、医療面における発展について

谷 島 清 郎

衛生検査技師、臨床検査技師は、いわゆるパラメディカル系の技術者として、医師のもとにありながら半ばそれから独立して医療及び保健衛生面における医学的諸検査に従事するもので、その重要性は次第に認められるようになってきた。

しかし、これら技師の資格制度が定められたのは、昭和三年の「衛生検査技師法」が最初で、その歴史が新しく、同じ職種である看護婦や放射線技師に比べて医学史的研究も少ない。

しかしながら、こうした資格制度ができる以前にも、もちろんその母体はあったので、それを仮に、医療及び保健衛生面における検査技術者”と呼ぶことにして、我国における発生を調べた結果、明治維新後の急激な伝染病の流行などに伴う衛生上の必要から、先ずそうした方面で誕生したことを明らかにした。また、彼等の従事した検査の内容、検査技術習得の事情などについても、特に保健衛生面における発展をこれまでに報告した。⁽¹⁻³⁾

今回は、このような検査技術者の医療面における発展過程を調査した。

調査のための座標としては、これまでの報告と同様、検査室などの諸検査機関の存在、検査技術者の名称及び彼等の従事した検査の内容を主体にした。ここで、医療面とは、疾病の診断、治療、予防など的一切を含むものとし、また検査とは、この医療面で行われている科学的なもの一切を意味するものとする。ただし、医師が直接行う聴診、打診などに類す

るものは除外した。

(一) 明治二十年頃までの医療面における検査及び検査機関

医療面の検査技術者がいつごろからみられるようになったかを知るために、先ず、医療面でどのような種類の検査が行われるようになったかを調べてみると、簡単なものは既に江戸時代から行われていたことがわかる。すなわち、尿の酸性、糖量を調べる物理化学的な検査や寄生虫の観察などである。

明治に入ってからには、さらに、顕微鏡による寄生虫卵、細菌、尿沈渣の観察及び血球計数などがみられるようになり、物理化学的な検査では、尿の性状や成分について、たとえば糖分、たんぱく質、尿素、尿酸の測定など相当複雑なものまで行われるようになった。また、生理学的な検査に属する肺気量計のことも記されている。^{註1)}

なお、血液成分についての検査は殆んどみられず、単に外国記事の紹介として、血中コレステリン量の測定などがあるにすぎない。ちなみに、注射器は、明治六年には既に今日の原型をなすものが使用されているが、これは主に薬物注入用であつたらしい。先の血球計数に用いられた血液は、指先よりメス様のもので傷つけ、スポイドで採取したものである。一方、検査を行ったとみられる医療機関についてみると、明治十年頃までには、私設の病院はもちろん公立の病院が殆どどの府県に設置されていた。⁽⁴⁾

しかし、まだその頃、病院の中に検査室はみられないし、検査技術者も存在しなかったようである。⁽⁵⁻¹⁴⁾ おそらく医療面の諸検査は、医師自身がそれを行っていたのであろう。

(二) 旧日本軍隊病院における検査室の出現と検査担当兵の活動

病院など医療機関の中に検査室が設けられ、そこに医師でない専門の検査技術者がみられるようになるのは、明治二十

年代に入つて、旧日本軍隊の病院におけるものが最初である。^{(15)(18)註(2)}

明治十九年、海軍病院に薬剤掛や薬剤官が置かれて、医事に関する試験、分析を担当するように決められたのをはじめ、その後、各地の海軍病院や陸軍病院（昭和十一年までは衛戍病院と呼ばれた）に試験室、試験所、理化学的試験室、衛生試験室などという検査室が設置されるようになった。

そして、これらの検査室には、薬剤官、薬剤士、また階級に応じて看護長、看護師、看護手、看護と呼ばれる検査担当の兵達が存在した。

しかし、行われた検査は、薬品や鉱物、被服、飲食品についての理化学的、細菌学的試験や裁判化学的なものなど軍隊生活における環境衛生、食品衛生、薬事に関するもので、いわば、保健衛生面の検査に属するものが主体であった。

医療面の検査に関してこのような検査室がみられた例を、軍隊病院の中に求めると次の通りである。

明治二十九年、東京衛戍病院細菌研究室、細菌学的診断実施。⁽¹⁹⁾

同三六年、横須賀海軍病院病的検査室、喀痰、便、尿の細菌検査実施。⁽²⁰⁾

同四三年、海軍病院規則第二二条、細菌学的及病理学的検査、病的検査室に関して規定。

同四三年、習志野衛戍病院病理試験室、パラチフス菌保有者検索。⁽²¹⁾

大正八年、佐世保海軍病院病的検査室、看護手、鍍銀染色の一新法報告（写真左）。

以上の事例にみられる通り、海軍病院には多く、病的検査室と呼ばれる検査室が存在し、陸軍病院ではこれに対し、病的試験室と呼ばれる検査室があった。

そして、これらの検査室では、特に病的人体材料についての細菌学的、病理学的検査すなわち医療面の検査が行われたのである。なお、大正十年にはこれに加えて医化学的な検査を行うよう海軍病院令で定められている。

もちろん、病理試験室の方で飲用水の細菌検査が行われた例もあるし、また、先の試験室、試験所などで病的材料の検

上等看護手 一等看護手 二等看護手 三等看護手

明治二十九年三月二十一日勅令第三十二號ヲ以テ上等看護手ヲ看護師ト
 百十號ヲ以テ海軍武官官階表ヲ改定シ少尉相當官(高等官八等)タル看護

士官	准士官	下	士
兵曹長	上等兵曹	一等兵曹	二等兵曹
看護長	看護師	一等看護手	二等看護手
			三等看護手

大正四年十二月二日勅令第二百十六號ヲ以テ海軍武官官階表中少尉相當
 レ次デ大正九年一月十五日勅令第十號ヲ以テ海軍武官官階表中ヲ改メテ
 護科等ニ區分シ特務士官ヲ特務大尉、特務中尉、特務少尉ニ准士官中上

雑

日高看護手ノ考案セル鞭毛並ニ「スビ
 ロヘータ」鍍銀染色ノ一新法ニ就テ

海軍軍醫少佐 今井金三郎

我方佐世保海軍病院ニ於テ病的検査室附トシテ勤務中ナル海軍二等看護手日
 高傳行ハ風ニ病的検査掛トシテ細菌學的検査ノ技術ニ習熟シ特ニ鞭毛ノ染色法
 ニ就テ興味ヲ有スルコト年アリ餘暇アレハ斯術ニ没頭シ日夕研究ヲ怠ラス從來
 文献ニ現ハレタル諸種ノ鞭毛染色法ヲ比較研究シ頗ル細技ニ熟達セリ遂ニ自家
 獨特ノ一新改良法ヲ案出シ極メテ良好ナル成績ヲ擧グルニ至レリ該染色法ノ要
 旨ハツエツトノ一氏ノ媒染液ニ就テ改良ヲ加ヘ極メテ簡單ニシテ而カモ強力ナ
 ル一新媒染液ヲ製出シ更ニ鍍銀法ヲ施スニ當リビールシヨウスキ一氏鍍銀液ノ
 手技ノ煩雜ナルニ改良ヲ施シ單純ナル「アンモニア」銀トシテ使用シ極メテ良

海軍省官等表, 明治30年
 (海軍衛生制度史より)

病的検査室と看護手
 (軍医会々報, 27号, 41頁,
 大正9年より)

查を行った場合もあるなど、相互に往来があったのは当然である。

これら検査室の検査担当は、既に看護長や看護手などの制度ができていたのであるから、やはり当初から同じような兵達がその任務を命ぜられていた(写真右)。後に海軍では、大正九年に看護兵、看護兵曹、看護兵曹長と改められた。

看護手や看護兵達の検査技術に関する教育については、始めのうちはそれぞれ個々の病院で、看護術などと共に行われた。^(22, 24)しかし、大正十一年に、海軍では軍医学校に選修科が設置され、そこで、防疫(細菌検査)、レントゲン、化学試験を行う

専門技術者を養成する目的のもとに育てられた。^(25, 26)結局、これらの検査担当兵達が医療面における検査技術者の始めであると考えられる。

(三) 一般病院における検査室の設置と検査技術者

軍隊病院における検査室の機構は、後に、海軍

で大正五年頃から軍艦^(27,28)にも適用され、細菌検査担任艦などもできたが、この頃になって、ようやく一般病院に検査室が普及するようになってくる。

次にその例を示す。^(8,14,28,29)

大正始め、神戸市立東山病院試験室、鏡検査、医化学室あり。

同三年、日本赤十字社病院病理試験室できる。

同五年、共済病院病的検査室あり。

同九年、県立神戸病院臨床検査部できる。

同十四年、倉敷中央病院研究室できる。

昭和始め、東京衛生病院検査室あり。

同四年、金沢医科大学附属病院検査部できる。

同十二年、東京通信病院試験室あり、外来及び病室に小検査室附属。

これらの中で、特に検査技術者が存在したのは、神戸市立東山病院の細菌検査助手で、明治三五年から雇用されているが、これは特殊な例で、その他は、日本赤十字社病院病理試験室の技手（昭和九年から）と金沢医科大学附属病院検査部の検査員（昭和四年から）だけである。

従って、一般病院では、大体昭和の始め頃から次第に検査室に検査技術者が勤務するようになったといえる。

大学病院でも、外来検査室や各科の研究室に診療、研究の手助けをする用具が置かれ、病理組織切片作製、尿、便の検査などを見習いで行うようになったのは昭和の始めからだとのことである。⁽³⁰⁾

以上の他に、病院ではないが、検査機関の一つとして東京顕微鏡検査所、九州伝染病研究所というところがあった。前者は明治二四年、遠山棒吉によって設立されたもので、医学的諸検査を事業としたが、そこに検査技術者が存在したかど⁽⁴⁾

うか確かでない。後者については、いつごろ設立されたのかわからないが、大正十一年には確かに検査技術者が在職していた。⁽³¹⁾

これら一般病院における検査技術者達の資格については、大学病院におけると同様、単なる見習いであつたか、または軍隊病院などから移行してきた人達であつた。

結 語

医師ではなく、半ばそれから独立して医療及び保健衛生面の医学的諸検査に従事する検査技術者、すなわち今日の衛生検査技師や臨床検査技師の歴史的背景については、これまで特に保健衛生面を主体に調べたところ、我国では明治の始めに発生し、地方自治体あるいは国の職員として主に環境衛生、食品衛生、薬事面の検査に活躍してきたことを明らかにした。これは、明治維新以来の衛生行政上の政策と深いつながりを有するものと考えられるが、後、国や地方自治体に衛生試験所や細菌検査所などの検査機関が設けられて発展して行く。

また、これら保健衛生面における検査技術者の知識技能の向上に対しては、当時の内務省衛生試験所、北里柴三郎の伝染病研究所が大きな役割を果たしたことも事実であつた。

旧日本軍隊では、最初、こうした衛生行政面の制度や外国事情の視察などから啓発されて、⁽³²⁾⁽³³⁾軍隊病院内に、環境食品、薬品衛生に関する検査機関として試験室、試験所、理化学的試験室などを設置した。

ところが、後に、軍隊病院ではこれを医療の面にまで発展させ、いち早く病理試験室、病的検査室の制度を整える。そこに検査担当の看護兵達を配置し、人体材料の細菌学的、病理学的、医化学的検査などを専門に行うようになった。

従つて、これは、単に医療面における検査技術者の発展のみならず、医療面における検査（一般には臨床検査、臨床病理検査とも言われる）や検査室の発展に対して、実に先駆的役割を果たしたと云うことができるが、検査技術者としての看

護兵達の活躍は、本文の写真に例をみるごとく、当時たいへん大きなものであったと考えられる。

結局、これらの看護兵達が、医療面における検査技術者の母体であろう。

もちろん、検査室を主宰したのは軍医であり、看護兵達の指導は彼等が行わねばならなかったから、これも見逃すことができない。

軍医学校は、そういう意味から重要な存在であった。

軍医学校が、かかる検査の面でいかに進んだものであったかは、それを物語る事例を細菌検査についてみる事ができる。⁽³⁴⁾ また、当時軍医学校にあつて、実際の検査や検査技術の教育に携つておられた方々の回想はたいへん興味深いものがある。^(35, 36)

一般病院でも、早くからこのような検査室制度を採り入れた跡はみられたが、やはり、一定の検査技術者を専従させるに到るまでには時間がかかったようである。

なお、一般病院における検査技術者の知識技能の向上については、先に記した伝染病研究所などが定期的な講習会を開いていたから、これらがその一役を担っていたことを忘れてはならない。^(2, 8)

このようにして、軍隊病院、一般病院に充実していった検査技術者は、昭和二十年、第二次大戦の終了とともに、軍隊病院は現在の国立病院に改組され、やがて多くの病院に中央検査室が生れてますますその重要性が高まり、保健衛生面の検査技師と一体になって今日の衛生検査技師、臨床検査技師に発展して行く。

この間の事情は追って報告する予定であるが、このことを考えると、今日の衛生検査技師や臨床検査技師の発展にとって、また医療面における検査体制の確立に対して、軍隊病院がいかに重要な役割を果してきたかを改めて理解することができる。

(本報告の要旨は、第七四回日本医史学会総会に報告しました。これに対し金沢の津田進三先生より懇切なる御助言、

御激励をいただきました。稿を終るに臨み厚く御礼申し上げます。

註

(1)、次のような臨床各科の歴史や疾病史、医育史を参照し、また診断学、病理学、医育関係の古書、定期刊行物について調査した。

○藤井尚久、本邦内科史、明治前日本医学史三卷、日本學術振興会、東京、昭和三十一年。

○富士川游、日本医学史、日新書院、東京、昭和十六年。

○荒瀬進、徳川幕府直轄の長崎医学学校教育方針とその附属病院運営の回顧、医学史研究、二二号、一〇八五頁、昭和四一年。

○扶歇蘭度、青木浩齋訳、察病龜鑑上中下、舎章軒藏版、安政四年。

○緒方洪庵、扶氏經驗遺訓卷之九、卷之二三及び附録卷之二、適々齋藏版、安政四年。

○本間棗軒、内科秘録卷一及び卷九、自準亭藏版、元治元年。

○小森桃塙、病因精義(一)、(二)及び(九)、京都吉田屋治兵衛、文政十年。

○エルメレンス、原病学通論卷之一及び卷之三、三友舎藏版、明治七年。

○小林義直、内科必携理學診斷法、英蘭堂、東京、明治九年。

○石塚左玄、検尿必携、英蘭堂、東京、明治九年。

○松本市左衛門、医療器械図譜、東京島村利助、明治十一年。

○柴田承桂、顕微鏡用法、東京島村利助、明治十二年。

○吉松文治、診断図説図式、汎愛閣、明治十二年。

○森鼻宗次纂訳、皮下注射要略、大阪浅井吉兵衛、明治六年。

○陸軍本病院録事、新驗毒虫考説、東京医事新誌、二十(一)二二号、明治十一年。

○万国医学会議記事、肝臓ノ排泄機能論、東京医事新誌、三五号、明治十一年。

○熊谷乾、血球計ノ説、中外医事新報、十号、一頁、明治十三年。

○雜報、済生学舎学則、済生学舎医事新報、一号、七三頁、明治二十六年。

(2)、海軍衛生制度史一卷、帝国衛生法令、現行日本法令大全には次のような条例、規則が所収されており、これらを参照した。

○海軍病院通則、明治十九年。

- 海軍病院条例、同三十年。
 - 海軍病院規則、同三十年。
 - 海軍病院令、大正十年。
 - 海軍々医学校令、同十一年。
 - 衛戍病院条例、明治四一年。
- また、陸軍海軍の軍医関係の雑誌は創刊から昭和の始めまで参照したが、次の通りである。
- 軍医学会雑誌一号（明治十九年）～二七号（明治三二年）。
 - 陸軍々医学会雑誌一八号（明治三二年）～一七五号（明治四二年）。
 - 軍医団雑誌一号（明治四二年）～二一〇号（昭和五年）。
 - 海軍医事報告撮要一号（明治十五年）～七二号（大正十年）。
 - 海軍々医学会々報一号（明治四五年）～二一号（大正七年）。
 - 軍医学会々報二二号（大正八年）～三四号（大正十年）。
 - 海軍々医学会雑誌三五号（大正十一年）～五十号（大正十四年）。

文献

- (1) 谷島清郎、江戸時代の衛生検査、医学史研究、三二号、一二五頁、昭和四四年。
- (2) 浦智恵子、谷島清郎、衛生検査技師の歴史、衛生検査、十九卷、三〇八頁、昭和四五年。
- (3) 谷島清郎、浦智恵子、衛生検査この言葉の発生と内容の史的推移について、衛生検査、二十卷、二二頁、昭和四六年。
- (4) 日本科学史会、日本科学技術史大系24、医学I、第一法規出版、東京、昭和四十年。
- (5) 大鳥蘭三郎、近世日本病院略史、中外医事新報、一二二一～一二二六号、昭和十年。
- (6) 横浜市役所、横浜市史稿政治編三、丸善、横浜、昭和七年。
- (7) 千葉大学医学部八五年史、同創立八五周年記念会、千葉、昭和三九年。
- (8) 堀 道紀、佐藤静馬鑑編、神戸市立東山病院史、神戸市衛生局、神戸、昭和三二年。
- (9) 日本赤十字社、日本赤十字社病院沿革、日本赤十字社病院年報、昭和元年。

- (10) 神戸医科大学史、同史編纂委員会、神戸、昭和四三年。
- (11) 金沢大学医学部百年史、同創立百年記念会、金沢、昭和四七年。
- (12) 日野原重明、橘 敏也、聖路加病院に於ける臨床検査室運営の実際、臨床検査、一卷、二四三頁、昭和三年。
- (13) 田村 清、北林 滋、私の検査室東京衛生病院、臨床検査、一卷、一二二頁、昭和三年。
- (14) 川西功躬、大正十四年にできた研究室—倉敷中央病院、Lab. Friends 二巻、二三頁、昭和四六年。
- (15) 壁島為造編、海軍衛生制度史一卷、海軍医学会、大正十五年。
- (16) 博文館編輯局、現行日本法令大全上中下、博文館、東京、大正二年。
- (17) 飯尾次郎、帝国衛生法令、丸善、東京、明治二九年。
- (18) 陸軍々医学会雑誌、海軍々医学会々報。
- (19) 都築宗正、腸窒扶期ノ細菌学的診断ニ就テ、陸軍々医学会雑誌、八五号、六七一頁、明治三十年。
- (20) 百瀬一一、明治三六年中横須賀海軍病院病的検査室ニ於ケル業績、海軍医事報告撮要、四三号、七一頁、明治三六年。
- (21) 鶴岡岩三郎、騎兵第十三聯隊ニ於ケル「パラチフス」菌保有者検索成績、軍医団雑誌、十八号、九三九頁、明治四三年。
- (22) 海軍病院条例第二条、明治三十年。
- (23) 衛戍病院条例第二条、明治四一年。
- (24) 石黒大介、病院付看護卒ノ教育ニ就テ、軍医団雑誌、十一号、一五七頁、明治四三年。
- (25) 海軍々医学校令第十七条、大正十一年。
- (26) 有馬 玄、海軍奉仕五十年回顧録(二)、東京医事新誌、七五巻、七六九頁、昭和三年。
- (27) 松隈武次、新艦艤裝ニ就テ、海軍医事報告撮要、七十号、一頁、大正八年。
- (28) 有馬 玄、海軍奉仕五十年回顧録(四)、東京医事新誌、七六巻、四九頁、昭和四四年。
- (29) 東京通信病院三十年史、同病院、東京、昭和四四年。
- (30) 土屋 茂、金沢大学医学部第二内科技官の談話。
- (31) 海軍々医学会雑誌、三七号、二三〇頁、大正十一年。
- (32) 谷口 謙、伯林衛戍病院署記、陸軍々医学会雑誌、三三号、一頁、明治三三年。
- (33) 雜録、陸軍々医学校ノ任務、同前誌、六五号、四五七頁、明治二六年。

- (34) 藤野恒三郎、静岡県立浜松第一中学校の観望塔、モダンメデア、十三巻、二四三頁、昭和四二年。
(35) 守屋 博、臨床病理創世記、医学のあゆみ、五九巻別冊、昭和四一年。
(36) 金井 泉、臨床検査の今昔、臨床検査、十三巻、一五八頁、昭和四四年。

(金沢大学医療技術短期大学部衛生技術科)

The Rise and Development in Japan of Medical Laboratory Technicians in the Clinical Area

by Kiyoo TANISHIMA

The author reported in another paper that medical laboratory technicians in Japan had developed in the first part of the Meiji era (1868~1913) in the area of public health.

Today, however, many such technicians work in the clinical area, too. This paper is a short history of their development.

1) In the middle of the Meiji era, medical or clinical laboratories were established in military hospitals.

2) In these laboratories, there were hospital attendants, privates or sanitation soldiers. They were engaged in examining blood, urine, sputum, etc., by bacteriological, pathological and biochemical methods.

They were trained in the above laboratories or in the Army or Navy medical schools.

3) For the first time, such laboratory technicians appeared in civil hospitals in the first part of the Showa era (1926—).

They were apprentices either from hospitals or from the military hospitals.

俳句の季語に投影している

本草綱目の薬物文化

三 浦 三 郎

わが国個有の庶民文芸であり、生活詩でもある俳句は、その初め発句といわれていたように、もとは卑近・滑稽をモチ
ーフにする連歌の詠み初めの句、すなわち発句（第一句）を意味する用語でありました。

これが後に連歌から独立し、五・七・五の一七音で詠む「言い切りの句」（完結した表現形態）となり、またその詩韻
の間に季節感を潜ます仕来りとして踏襲されております。江戸期に入り松永貞徳（一五七二～一六五三）は形式を重んじ、松
尾芭蕉（一六四四～一六九四）以降は幽玄閑寂を尊ぶようになりました。

明治期に入り、短歌や俳句の革新を称え、短歌の結社アララギ、また俳句においてはホトトギスを結成しております正
岡子規（一八六七～一九〇七）の句に

痰一斗へちまの水も間に合わず

という作品があり、この句意が子規の没後、門下生が師を敬慕し遺業を讃えて参集する命日「糸爪忌」の名称の由来にな
っております。

ところが糸爪なる作物を紹介するものは、農書は別として中国本草において本草綱目が最初のものであります。すなわち

前掲、子規の句における「へちま」は本草の薬物であり、句意は糸爪の薬物利用を内容にしております。このように中国本草の薬物利用がわが国に招来し、庶民の基層文化、生活資料に定着し俳句に詠まれていたものはその他にも沢山あります。いま、わが国庶民の生活詩である俳句の季語に投影している本草綱目の薬物文化を若干捉え、わが国庶民の精神的文化を構成する要素とその性格について考えてみたいと存じます。

二

さて、中国明代一六世紀、万曆一八年（一六〇三）、四川蓬溪县事であった李時珍が、二六年の歳月を費して薬物一八九八種について積名と集解、気味、主治、修治、發明、正誤付方など七項にわたって解説している、古今無双の本草書『本草綱目』（五二卷）（金陵本）が南京から上梓されております。

本書に収載している薬物は、神農本草経以来の仕来りである薬物を上・中・下、貴賤の別に区別する三品分類を廃し、代って近代博物学的センスを導入し、水部から人部に至る一六部に大別し、それらをさらに六〇類に細別しております。加えて在来薬物の分条、合併、改名なども李時珍独自の見解に基いてかなり大胆に行っております。引用した本草書においては従来の八四書にさらに二七六書を加えて計三六〇書の多きに達し、古今経史百家書目においても一五一書に四四〇書を加えて五九一書を引用しております。

この引用書の中に四書五経をはじめ、六朝の時代思想の投影物である志怪小説、あるいは漢民族の宗教である道教のテキストから仏典の金光明経などもあり、一方、華北乾地畑作地帯の犁耕農法とその展開文化を説く古代農法の決定版・齊民要術、あるいは庶民の生活指導書に編纂されている居家必要もありません。

一方、呂氏春秋の十二季の首章を源流に仰ぐ、支配者の側から民に時を告らす性格の礼記・月令や淮南子・時則訓、その逆に富農的農家経営における農作業の手順を説く四民月令、また中国の稲作発祥の故地における楚俗三六事を叙した荆

楚歳時記など、古歳時記に記載する薬物民俗などもチェックしているという具合に、いふなれば本草綱目は中国歴代の伝統的医学・薬学を支えていた庶民の生活文化史でもあります。

この本草綱目がわが国に渡来したのは慶長一二年（一六〇七）、林羅山が長崎でこれを得て駿府の家康に献上したことが伝っております。わが国の慶長一二年は中国の明では万曆三五年、本草綱目の初版・金陵本が上梓されてから一一年目、また二版の江西本の版行をみてから四年後に当りますから、道春の得たものは何れの版本であったかを詳らかにし得ませんが、恐らく初版・金陵本と考えられております。

一方、本草綱目の和刻本は寛永一四年（一六三七）以来、しばしば板行されております。

何れにせよ、これら本草綱目の和刻本は、わが国において医学が律令制・封建制を通じて一部特権階級独占の支配から離れ、実用の学として初めて庶民社会に滲透し、江戸期の商売往来に医者衆も一枚加わったその当初、巻頭の序例にわが国の風土医学・漢方医たちのイロハとして心得ておくべきとされている金・元医学の薬理説が掲載されていることと相俟って、医者殿たちが座右の書として大いに活用しようとしていたことに間違いありません。

三

さて、江戸庶民の生活文化の構成要素には上方文化の移植があり、一方、経済的に自信得た彼らは積極的に彼らの日常に王朝文化の復元を試みています。これら地域的にまた時代的に距離のある文化の導入に通伝体の役割りを果たしたものに門つけ芸人、唱門師の一群があったものと私は考えております。

もともと彼らはわが国奈良朝の大宝令に制定した律令制度の行政組織、陰陽寮の官職の流れを汲むものと思われる民間陰陽師の系統に属し、卜筮、相地、祈祷、祓いなどを業とし、また簡単な暦法をあつかい、これに伴う特種な儀礼や芸能に携わる部民でありました。中世から近世にかけてわが国庶民文化の形成に少なからぬ足跡を残していることは諸書に伝

える通りです。彼らは京都では土御門家の支配に属し、奈良の唱門は東大寺、興福寺の二寺に属しております。

これら唱門師たちの主唱した正月儀礼には、初日礼拝、屠蘇、門松、注連飾り、蓬萊、春箸、宝引、若水、白朮詣り、破魔矢、歳徳神、恵方詣、四方拝、寒垢離、七種粥、成木責め、綱曳き、小豆粥などがあり、これら民間の時令伝承は何れも古代大陸における巫系医学思想の具象物、すなわち庶民生活の日常に辟邪・除疫を祈念する呪術的本草文化に外なりません。また三月の桃酒、五月の菖蒲さしや百草踏、土用の桃湯、九月の菊酒や菊枕なども、本草綱目以前の平安朝貴族社会に招来し、江戸期に庶民社会に復元している本草文化であります。何れにせよ、これら庶民の生活慣行に定着している年中行事と私祭は、詩趣に季節感を伴うべきとされている俳句の詠題として恰好のものであります。

しかし、本草綱目に初見し、わが国庶民の生活慣行に定着している薬物民俗になると、その時代区分の作業に手間どり、苦勞しますがわが国庶民の精神的文化の構成要素とその性格を知る上に、見逃すことの出来ない資料価値をもっております。

四

僧ものいはず歎冬を呑む（「冬の日」炭壳の巻）

この句に詠まれている歎冬は神農本草経以来の薬物でありますから、わが国の本草和名（九一八）や倭名類聚抄（九三一と八）にも紹介され、その対応植物としてフキが当てられております。また今日、わが国の生薬市場においてはフキの苔を以って歎冬花として疎通させております。ところで歎冬は植物分類学上、同じキク科に属しておりますが、フキとはその属を異にするフキタンポポを基源にしております。属名 *Tussilago* はラテン語の *Tussis*（咳）と *ago*（癒す）の合成語ですから、この植物は洋の東西を問わず初めから鎮咳・祛痰の目的に供されていた薬草であり、その自生区域は欧州か

ら北アフリカ、シベリヤ、インド、中国など北半球の殆んどに涉っておりますが、独りわが国においてのみその自生は知られておりません。

一方、フキは大陸でその自生をみない、日本個有の風土植物とされています。このように日本の国土に影も姿も見せない異地植物、フキタンポポを基源にする生薬・欸冬に、分類学上その属を異にする風土植物フキを当ているように、薬物療法に最も肝腎な供用薬物の基源を曖昧にせざるを得ない処にわが国の風土医学・漢方の「泣き処」があり、これがまたわが国生薬市場にトラブルの種になっております。

しかし、神農本草経以来の鎮咳祛痰薬、欸冬花の薬方として熏烟吸入法を紹介するものは本草綱目が最初であります。すなわち、「欸冬花三両を燃やし、風の無い処で筆管でその烟を口一っばいに吸って嘔むがよい」ことを述べております。前掲句の作者は医者であり、「ものいはず」という措辞は本草綱目に説く吸引療法を意味するであろうことは、大方の見解のようであります。

江戸期における文化人、俳諧師たちは大陸のこの民間療法に着目し、あたかも彼らの日常に実践していた生活文化でもあるかのように見做して、生活詩に「欸冬を吞む」と詠みこんでいるものと思われまます。

五

また、俳句で夏の季語に登場する動物に、神農本草経以来の漢薬、蚯蚓があります。現在、わが国の生薬市場では名医別録の呼称『地竜』を慣用し、中葯志においても本草綱目に正条（正名）としている『蚯蚓』ではなく、釈名（異名）にあげている『地竜』を用いております。

本草綱目の釈名の条には、これら同物異名をあげ、「術家では蚓は雲を興し、また陰晴を知る能があるという。その鳴き声は長く吟ずるから歌女ともいう」と、ミミズが鳴く動物であるという術家の説とその別名、歌女の名称の由来を紹介

しております。

そこで平賀源内か誰かが、ミミズに声帯はないから鳴く筈なからうと、ミミズの棲息地を掘り返したところ、ケラが飛び出してきたという。以来、ミミズが鳴くのではなく、ケラが鳴くのだらうと伝わっております。手許の歳時記を紐解いても、秋の季語「蚯蚓鳴く」の項に、「秋の夜何んの虫ともわからず……ジーと鳴いている虫がいる。実は蝮姑の鳴く音だらうともいうが……」と述べてあります。近代俳句にも

蚯蚓鳴く六波羅密寺しんのやみ

川端 茅舎

の句があり、作者はわれとわが創作の妙味に感じ入ったというポーズで、大いに俳味に陶醉しているようであります。

この季語にしてもとは本草綱目に紹介する、中国の未開社会に神仙を唱導する阿謏の輩たちの、蚯蚓に仮託する神仙思想に胚胎した大陸の俗説に外なりません。

また李時珍は蚯蚓の項に「いま小児の陰腫に、この虫に吹冒されたためだといふものが多い」と、小児の陰囊腫張の病源説を紹介しております。江戸期のいたずらものが、この記述内容に尾鱈をつけ、「ミミズに小便を引っかけると罰があたり、ちんぼこが腫れる」と、触れているばかりでなく、その腫れたちんぼこを治すには、そのミミズを洗い清めて放してやればよいとか、女のひとにお願いし、腫れたちんぼこを火吹き竹で吹いて貰うとよいなどと、尤もらしく吹聴しております。

文化人であり教養人たるを気取ってか、外来崇拜の傾向にあった俳諧師たちもさすがにこの俗信ばかりは句作に用うことを躊躇しておるようであります。しかし、天衣無縫の古川柳作家たちは

小便を蚯蚓にしかけてかくの態

(川柳評万句合・宝曆一二年智四)

と、遠慮しておりません。

天瓜粉肌のほめきの句はしく

星野 麦人

真夏の風物詩に登場する大衆薬に天花粉があります。天瓜は中国梁代六世紀、陶弘景の撰した名医別録に収載されている薬物の名称ですが、これは神農本草經にいう枯楼（キカラスウリ）の別名であります。このキカラスウリの根から採った澱粉が天花粉であります。

ところで李時珍は天花粉を、中国宋代十一世紀、蘇頌の撰した図經本草（一〇六二）に収載する薬物として扱っていますが、これは明かに誤り、明初に周憲王＊の撰した救荒本草（二巻）に登場する野草の呼名であります。救荒本草には約四〇〇種に及ぶ野草の名をあげ、その形態を模写し、栽培試作からその植物利用とくに調理可食化に重きをおいて説いております。この名著は日中ともに佚し、現物に接することは出来ませんが、幸い除光啓が中国における三大農書の一つ、農政全書（一六三〇）に全文図譜とも再録しており、そのお蔭で私たちは日中両民族の生命を今日にあらしむるに力のあった救荒本草の全貌を窺うことが出来ます。

本草綱目は天花粉について『周憲王曰く、秋、冬に根を採って皮を去り、一寸ほどに切って水に浸し、日毎にその水を換えて四五日で取出し、搗いて泥にして絹布で濾し、この汁を澄まして粉を取り、晒し乾して用いる』と、野草の根を加工調整し、保存食糧を得る法を紹介しております。

天花粉は中国の伝統医学において滋養強壯、疲労回復などの目的に内服されるものでありますが、外用薬としては『天花粉・滑石等分に末にして、水に調えて搽る』（普濟方）梅毒瘡の治療薬が知られるくらいのものであります。本草綱目に初見するこの梅毒瘡治療の塗布剤が、高温多湿のわが国に招来し、皮膚の撒布剤「汗しらず」に転換をとげ、庶民の日

常に生活資料として重宝されるに到ったものでありません。

それにしても俳人たちが慣用している天瓜粉は、本草学的に正しく天花粉と改むべきであります。

水李時珍は本草綱目に『救荒本草』の撰者を周憲王としているが、明志には父の周定王となっている。

周定王は洪武帝の第五子、開封藩の朱橚であるという。現在の中国では『救荒本草』の撰者を「明・朱橚」としている。

七

以上、述べましたように本草綱目の記述内容は、江戸期の庶民社会に有形無形の影響を及ぼし、実用の文化として生活慣行に定着し、あるいは新たな俗信を形成している例は他にも多いと存じます。これらは庶民の生活詩でもある俳句の詠題になるのも蓋然性あるところです。

また本草綱目は中国歴代本草の中で最もわが国庶民文化に影響を及ぼしている理由としてその渡来期がわが国において医学が支配階級独占の手から離れ、実用の学として初めて庶民社会に滲透した時期であり、一方、経済的に自信を得て積極的に上方文化の移植と王朝文化の復元をはかった江戸庶民の間に町民文化の芽生え初めた時期であったことも、見逃すことは出来ません。

本報告の引用雑俳に、お教示賜りました大磯嶋立庵々主・山路閑古先生に謝意を表す。

Names of Drugs in the Pen-ts'ao-cang-mu being seen in the Haiku of Japan

by Saburo MIURA

The Pen-ts'ao-cang-mu is the greatest Chinese Materia Medica, written and published by Li Shih-chen near the end of the 16th century. It was soon imported into our country, and some of drugs mentioned in it became colloquial words for Japanese people. Several of them appeared as "season words" in the Haiku, as words hinting seasons. The Haiku is a poem style for the public.

The period, when the Haiku became popular, corresponded with the time of coming of that great herbral book and also with the time, when medicinal knowledge was released in our country from monopoly of the higher class and infiltrated into the public.

咒禁師及び按摩師について(上)

—日本古代医療史の研究(一)—

新 村 拓

(一) 咒禁師の職掌

咒禁師は宮内省の被管である典藥寮の職員であつて

咒禁師二人(正八位上) 掌咒禁、咒禁博士一人(從七位上) 掌教咒禁生、咒禁生六人 掌學咒禁

が置かれている(『令義解』官位令、職員令)。範となつた唐制においては太常寺太医署(『大唐六典』卷十四)に、咒禁博士一人(從九品下)、咒禁師二人、咒禁工八人、咒禁生十人、また殿中省尚藥局(同、卷十一)に咒禁師四人が置かれ、掌るところ太医の職の如しとみえる。日本令にみえない咒禁工は咒禁博士の小註に

隋太医、有咒禁博士二(二カ)人、皇朝因之、又置咒禁師咒禁工、以佐之、教咒禁生也

とみえ、職掌において咒禁師との間に区別がみられず、同じく咒禁博士の補佐であつた。日本と同じく唐制の影響を強く受けた朝鮮においては、『高麗史』(志、卷三十、百官一)に咒禁博士一人(從九品)、咒禁師二人、咒禁工二人がみえるが、各々の職掌については不詳である。唐制においては咒禁博士、咒禁師、咒禁工の三者間において、後の二者は博士の補佐というだけで職掌上明確な区別がなされていないのに対し日本令においては、咒禁師は咒禁を掌り、咒禁博士は咒禁生を教えることを掌るものと区別され、あいまいな咒禁工については省くという改更がみられる。実際上はともかく、

規定の上でははっきりとした分掌体制をとったのである。また日唐間において咒禁師の位置が異なり、職員記載順序からみるならば、唐制は咒禁博士をもって咒禁科を代表させ、日本令は咒禁師をもって代表させているとみられ、また唐制の咒禁師は無品であるのに対し日本令では正八位上相当としており、日本では咒禁師が特別な意味を与えられたものと考えられる。また咒禁科それ自体が日本においては特別扱いされたことが位階の上から考えられる。それは唐制において医療技術官人としては最高の医博士が正八品上であり、つづいて針博士が従八品上、そして按摩博士が従九品下であり、位階の上では按摩博士と同じであるが咒禁博士が最後に記されているのに対し日本令では、医博士の正七位下につづいてすぐ下に咒禁博士の従七位上がきており、つづいて針博士の従七位下、咒禁師の正八位上、按摩博士の正八位下、按摩師の従八位上ときている。咒禁師でさえ按摩博士の上位に位置しているのである。位階の差は待遇の差に直結するものであるから、日本においては咒禁科は特別に優遇されたとみてよいであろう。高麗においては咒禁科職員の構成は、唐制のそれを若干規模の縮小した形において、特別な改更をせずに踏襲したものと思われる。

次に「咒禁」の具体的な内容を検討することにしよう。医疾令（『令義解』巻八）には

咒禁生学咒禁解忤持禁之法謂、持禁者、持杖刀誑咒文、作法禁氣、為猛獸虎狼毒虫精魅賊盜五兵、不被侵害、又以咒禁固身体、不傷湯火刀刃、故曰持禁也、解忤者、以咒禁法解衆邪驚忤、故曰解忤也

とある。杖刀を以て呪文を読み、法をなして氣を禁じ、諸害悪から身を守る持禁と衆邪の驚忤を解く解忤という、いわば予防的部門にあたる持禁と治療的部門にあたる解忤の二つからなっている。ところで、この義解の説明は道教の代表的な書である『抱朴子』内篇卷五（至理）にみえる咒禁法の説明に近似するものである。即ち、呉越に禁咒の法があり、これを知るものは大疫の中に入り病人と同床しても感染しない。数十人の従者をつれていても同様である。これは氣が天災を払うからである。また氣は鬼神を禁ずることができ（中略）、また山林に入り毒虫や蛇の居る所を過ぎても、善禁者が氣を以て禁ずれば数十里にわたってこれらの害を避け、伴のものも皆逸れることができる。また虎豹や蛇蜂を禁ずれば

皆伏して立つことができず、若し気を以て刃物の傷を禁ずれば血は直ちに止る。また骨を接ぎ筋肉を接けることもできる。気を以て白刃を禁ずれば、これを踏んでも傷つかず、これを刺しても入らず云々、ということである。従って、日本令にみえる咒禁とは道教に由来するものと考えてよいであろう。⁽¹⁾ 唐制においては、『大唐六典』卷十四)

咒禁博士、掌教咒禁生、以咒禁拔除邪魅之為厲者、有道禁出於山居方術之士、有禁咒出於釈氏、以五法神之、一曰存思、二曰禹步、三曰咎目、四曰掌決、五曰手印、皆先禁食葷血、齋戒於壇場以受焉、

とあり、邪魅の厲をなすものを払い除く方術のことであって、山居方術の士に由来する道禁と釈氏に由来する禁咒とがあることを示している。即ち、道教咒禁と仏教咒禁の二者からなっているのである。五法については『抱朴子』内篇卷十七(登涉)に特殊な歩き方をする事によって人鬼も見ること能わず、それ故に邪鬼から身を守ることを可能にする禹歩法の詳細な説明がみえるが、後の四法については具体的なところはわからない。

ところで、日本の僧尼令第二条に

凡僧尼卜相吉凶、及小道巫術、療病者皆還俗、其依仏法持咒救疾、不在禁限

とあり、これに対する『令集解』の該条文註釈には、「釈云、巫者行事也、前令制湯藥、今令不在制限」「穴云、問依医方治者何、答、古令、依道術符禁湯藥救療者、今除湯藥字」とあって、養老・大宝僧尼令の相違がみえ、古令・前令が何をさし、「道術符禁湯藥」の字句の有無が問題となっている。これについての細かな考証はここでは省き、少し問題は残るが二葉氏の説をとりたい。⁽²⁾ 即ち、飛鳥浄御原令では、「凡僧尼卜相吉凶、及小道巫術依道術符禁湯藥救療者皆還俗、其依仏法持咒救疾不在禁限」という条文があったとし、また大宝令では「凡僧尼卜相吉凶、及小道巫術療病者皆還俗、其依仏法持咒救疾、依道術符禁湯藥救療者不在禁限」の条文があったとしている。浄御原令では道術符禁湯藥は小道巫術とともに禁ぜられていたのであり、大宝令では小道巫術は禁止されていたが、道術符禁湯藥については容認されたのであり、養老令では小道巫術は禁止されていたが、道術符禁湯藥については明文を有しないが別に禁止されていたわけではないとみ

られる。そこで、道術符禁ということであるが、「古記云、持咒謂經之咒也、道術符禁、謂道士法也」とあって、持咒は經咒(仏咒)であるのに対し、道術符禁は道士法(道咒)をいうのであった。また小道については「古記云、小道、謂小厭小符之類」「穴云、小道、謂符造左道是也(中略)其呪禁、解除等、約小道耳」とあって、大宝令の注釈書である古記では小厭小符の類であるとし、養老令の注釈書である穴記では左道をなすという点が強調され、呪禁、解除をその類としている。巫術については「謂、巫者之方術、既是淫耶(邪カ)多端、不可具言」とあって、巫者による淫咒としている。小道巫術と道術符禁とは手段方法において同内容のものと思われるが、志向性において左道と考えられたものが小道巫術の範疇に入れられたものと考えられる。要するに、僧尼が治病行為をなすに於て左道と一括される小道巫術については一貫して行なうことが禁止されていたが、道術符禁(湯藥)、即ち道咒については淨御原令においては禁止されてはいたが、大宝・養老令においては容認され、仏咒については一貫して容認されていたと考えられる。ところで、穴記にみえた呪禁については、少くとも穴記のできたと思われる延暦期の段階においては左道の範疇に入れられ、僧尼のみならず一般においても禁圧されるべきものとなっていたのである。(穴記のいう呪禁が典藥寮の呪禁と同質のものであるかは多少疑問も残るが)そこで前にもどって、日本令の呪禁は道咒であり、唐制のそれは道咒と仏咒からなるものであることをみてきたが、僧尼令第二条の結論と併考するとき、唐制の呪禁は道咒のみを主宰する典藥寮の呪禁師よりもむしろ僧尼において重なる部分が多いといえよう。また少くとも延暦期においては呪禁は左道の範疇に入れられて禁圧の対象となってきたことが知れるのである。

朝鮮においては三国時代の呪禁師については不詳であるが、『高麗史』(志、卷二七、選舉一)仁宗十四年十一月に

凡咒禁業式、貼經二日、内初日貼脉經十條、翌日貼劉涓子方十條、並通六條以上、讀小經瘡疽論七卷明堂經三卷、内兼義理通六机、讀大經針經十机、内兼義理通六机、又讀七卷本草經二机、

とみえる。同時に定められた医業式中にみえる医書(素問經、甲乙經、本草經、明堂經、脉經、針經、難經、灸經)と重

複するものが多く、また『劉涓子方』、『瘡疽論』は癰疽の治療法を述べたものであろうし、『明堂經』は針灸書であるところから医業と咒禁業はほとんど大差なく、強いていうならば咒禁業は治腫治瘡を主とする外科方面を掌ったものと考えられよう。⁴⁾しかし、ここにもられる試験科目（または学習書といってもよい）からは医師と咒禁師との明確な区別はつけない。これらの書は日本の医疾令にみえる医針生の学習書及び『唐令拾遺』にみえる医疾令（開元七年令）のそれとも近似するものであって、朝鮮の咒禁師は範となった唐制とも、また日本のそれとも内容的に異なるものであったことが推測される。

同じ咒禁師といえども職掌の点において、唐では道咒と仏咒からなり、日本では道咒のみからなり、朝鮮では医針業とほとんど変わりのない純医学的なものと、三者性質を異にするものであった。

(二) 咒禁師の系統と衰亡

この項については下出氏の論稿に負うところが大きい。⁵⁾『日本書記』の敏達天皇六年十一月庚午朔に百済国付還使大別王等、献経論若干卷、並律師、禪師、比丘尼、咒禁師、造仏工、造寺工六人とみえるのが咒禁師の初見である、同時に伝来された物件等からみて仏教関係者と思われ、問題としてゐる医療官としての咒禁師ではあるまい。⁶⁾次に、同持統天皇五年十二月己亥に

賜医博士務大參徳自珍、咒禁博士木素丁武、沙宅万首銀人二十兩

とみえる。天武天皇四年春正月に外菓寮（近江令官制下）を既に見ているから、持統天皇五年十二月条にみえる咒禁博士は淨御原令制下の典菓寮（あるいは外菓寮）の職員であったものと思われる。医博士の務大參（天武十四年冠位制）は大宝令制下の従七位上に相当し、大宝令制下の医博士が正七位下であるのに近い位階が与えられている。咒禁博士の二人は無階であったものと思われる。

ところで、この三名の者はその姓からして明らかに帰化人と思われる。『日本古代人名辞典』によれば、木素姓には他に木素貴子（天智二年）がおり、百濟滅亡時に本朝に帰化している。また沙宅姓には沙宅己妻（欽明四年）、沙宅紹明（天智十年）、沙宅千福（齊明六年）などがおり、いずれも百濟人である。また徳姓についても、徳頂上（天智十年）、徳佐王（姓氏録）、徳執得（天智二年）、徳爾（欽明十二年）などいずれも百濟人であり、難波薬師の祖である徳来ももとは高麗人であったが百濟に帰化した人であった。このように百濟系帰化人によって咒禁業がなされたのは、本朝において道咒に通じた人がいなかった事情によるものであろう。彼ら帰化氏族のもつ教養は六朝文化のものであり、道仏思想を含むものであって、特に百濟滅亡時に帰化した百濟の高官を父祖とし、『懐風藻』に伝えるように有能な士達であってみれば、咒禁業に通じていても奇とするにはあたらぬであろう。

次に咒禁師の動きについてみると、藤原武智麻呂伝（『寧楽遺文』）に有為の能吏の輩出したことを讃じ、その中に「神龜五年六月咒禁有余仁軍、韓国連広足等」とみえ、また称徳天皇改元の時の功労者行賞の詔中に「神護景雲元年八月癸巳（中略）咒禁師末使主望足並外従五位下」（『続日本紀』）に従五位下に昇叙され、末使主望足も外従五位下と技術官としてはきわめて高い位階であり、持統朝の木素・沙宅の無階であったのに比してもきわめて特異なことと言わなければならぬ。帰化人の系譜を引く余及び末使主の有する咒禁の能力が高く評価されていたためと思われる。⁽⁸⁾この神護景雲を最後にして、これ以後の咒禁師の動きについては分明でない。『令義解』にみえるから平安初期までは官制上その職が設置されていたことは確実であり、また九世紀半ばの『令集解』職員令にもみえるから、おそらく設置されていたものと思う。しかし、その後の『延喜式』にはみえないから、十世紀には官制上から削除されてしまったと思われる。十三世紀の『官職秘抄』にもみえないから、その職の復活はなかったものと思われる。⁽⁹⁾このような消滅の動きは既に奈良朝においてみられ、実学尊重の気運のうちにあつて関係者にしばしば賞賜の事実があつたにもかかわらず、医針関係者には賞賜があつても咒禁・按摩の関係者にはそのことがみえないのである。⁽¹⁰⁾この消滅の動きについて下出氏は、余仁軍や韓国連広足などの没後

には優秀な伝術者が生まれなかつたか、あるいは術者の新しい渡米をみるものがなかつたために自然と咒禁が衰えて、結局、最後には官制からも削除せざるを得なくなつたというような単純な推理で片づけてしまふわけにはいかないとし、その基因は咒禁そのものの内部と日本におけるその展開方向にあつたと思つたとされ、それは咒禁が個人的身体的の防衛が基底になつてゐるとはいえ、他面において悪鬼精霊を駆使して外部へ適用しようとする自己保全の積極的防衛方向のマジックをもち、そのことは治病目標の方術と背反するものと考えられ、特に咒禁のもつていた厭魅的性格は当時の数々の厭魅をめぐる事件とも関連し、咒禁抹殺のための中央政府による弾圧方針がうち出されたのであるとしてゐる。⁽¹¹⁾そして、宝龜十一年十二月の勅（『類聚三代格』）は「無知の百姓、巫覡を構え合せて、妄りに淫祀を崇め、芻狗の設、符書の類、百方恠を作して街路に填ち溢る。事を求福に託して還つて厭魅に涉れり、唯に朝憲を畏れざるのみにあらず、誠にまた長く妖妄を養へり、今より以後、よろしく蔽に禁断を加うべし」というものであるが、この勅は少くとも奈良末の宝龜十一年までは、そのマジックは厭魅蠱毒を除いて非合法のもでなかつたことを逆に示すわけで、これ以後今まで認められていたものもすべて厭魅の名に含められて禁止されることになつたとし、咒禁がこの年を境として非合法の存在となり、地下にもぐり、民間信仰との結合を深め、修験道として中世に再び浮上してくるといふ展望を述べられている。⁽¹²⁾

（未完）

註

- (1) 『道教』下出積興、頁一七八
 (2) 『古代仏教思想史研究』、二葉憲香、頁一四四
 (3) 『延喜式』虎尾俊哉、頁二八
 (4) 『朝鮮医学史及疾病史』三木 栄、頁五二
 (5) 下出前掲書、『奈良時代の方術』金沢大法文学部論集、史学編十四、『咒禁師考』日本歴史五二号
 (6) 下出前掲書、頁二一〇
 (7) 『玉台新詠と律令及び医心方』滝川政次郎、国語と国文学、S三九・八〇九号
 (8) 下出前掲書、頁二二二
 (9) 右同、二二二～三
 (10) 右同、頁二二三～四
 (11) 右同、頁二二四～二三〇
 (12) 右同、頁二三五～八

杉田玄白

最新刊

形影夜話 自分の影との対話

緒方富雄 / 現代語訳注

四六判 128頁 2,500円(〒160円)

享和2年(1802)に書かれた本書は、玄白宿直のある夜、自分そっくりの影法師と対話をするというかたちで、医学・医術について玄白自信の見識・信念を綴ったものであるが、そこには、おそろしいまでにきびしい、徹底して論理的で実証的な玄白と、倫理的な玄白が伺い知れる。その筆致のてらいなさには、読者のこころにしみじみとく入り、とらえてはなさないものがある。

それゆえ本書は、蘭学50年の発達のを回想して著した「蘭学事始」とともに、かならず読まれるべき玄白の著作である。

本書発行に際しては、できるだけ多く注を取り入れ、原文とその背景の理解を大いにたすけている。また各問答の後の簡にして要を得た解説も貴重である。

■問答の内容——こころがけ / 名人上手というもの / 医の道 / 脈というもの / 腹候というもの / 経絡というもの / 医学の原理を知ること / 医学の原理と治療 / 治療するもの / 処方というもの / 病名というもの / 医者に大切なもの / 業の完成ということ

好評

伏屋琴坂著

和蘭医話

日本医史学会編集
羽倉敬尚 / 内山孝一解説・注 内山孝一解説

A 5 100頁 2,200円(〒160円)

本書はわが国実験生理学の祖、伏屋素狄(号琴坂、通称万町権之進<1747~1811年>)の遺書というべき書(文化2年<1811>刊)の本邦唯一の貴重な覆刻版である。

解説内山孝一

1. 伏屋琴坂の「和蘭医話」と実験記録の概要
2. 「和蘭医話」の体裁と内容
3. 「和蘭医事問答」にみられる腎機能
4. 寛政の婦人解剖図と「和蘭医話」との関係

5. 伏屋琴坂の実験記録の概要
6. 実験生理学の祖伏屋素狄碑
7. 考察

●文献 / 伏屋素狄関係年表(中野操作製) / 伏屋家系図(三木栄作製)

体系・世界医学史

医学博士 三木 栄著

(書誌的研究)医学とは何か・医学史とは何か B 5 900頁 12,000円(〒都内350円 地方690円)

生命畏敬の一語につきる医の本質を探り、全科の医学知識を統合して、細分化に迷う医学史の本幹を示す。また、これを実証に移すため、世界医学編年史・世界医学史の業績目録・世界医学原著目録をも明細に合わせ編んだ著者多年の精魂をこめた研究成果。医学史研究の源泉を究め、医学の根本理念を探るに格好の指標である。

朝鮮医学史及疾病史

医学博士 三木 栄著

B 5 620頁 図表133 10,000円 千280円

著者30数年にわたる知識と努力を結集し、これまで顧みられなかった朝鮮半島の医学の歴史を初めて明らかにした不滅の名著。

越後の蘭方医森田兄弟について (二)

長谷川 一 夫

さらに、越後での千庵の活動を探ってみたい。

千庵より円治宛尺牘⁽¹⁵⁾

(封の上書)

「栃尾町ニ而

森田円治様 貴下用書

(封の裏書)

從賀茂」

同千庵

一輪啓上仕候、時下秋冷日々相催候処御清安可_レ被_レ成_ニ御座_ニ万福奉_レ賀候、随而草屋老母はしめ一同不_ニ相変_ニ消光罷在候間乍_レ憚御静心可_レ被_レ成候、然ハ兼而書状差出シ申候へども相届不_レ申候哉否不_ニ相分_ニ候間重而申上候、此程蘭学遊歴医町方滞留致し居候而井上玄同、野崎謙随等隨身致し居候ニ付、健三郎意庵等にも為_ニ見置_ニ病症等為_レ覚申度候間、此度富喜蔵へ別紙之通り御渡し被_レ遣被_レ下度候、尚書外富喜蔵口上可_ニ申上_ニ候、頓首

九月廿九日

おほえ

一和蘭医方纂要

五冊

一和蘭菓鏡 吉那部

一スポイト

一

右御遣し被_レ下度候、

尚々書外其地下直之品も有_レ之候は、十分御買付被_レ下度候、昨日竹山氏も五十金被_レ遣候、其分町方是五十金も心宛候間、無_レ遠慮御買付可_レ然奉_レ存候、左候へば此辺ニ而之田米は少々買付跡は見合可_レ申奉_レ存候、以上

(封の上書)¹⁶⁾

「栃尾町ニ而

加茂

森田円治様 玉下用書

同千庵」

(封の裏書)

「外ニ熊胆六匁式分添ル

」

富喜蔵飛脚を以一輪啓上仕候、時下寒冷日々相催申候処弥御清米可_レ被_レ成_レ御座ニ珍重之至奉_レ賀上_レ候、随而草字ニ相変_レ消光罷在候間御静慮可_レ被_レ下候、

一兼而御頼之熊胆先月大坂泉宗参候間相尋候処農州琥珀半枚有_レ之候間求め置申候処、近在無_レ抛御方も右之品聞受無理ニ少々なりとも相分ケ呉候様御頼ニ付無_レ抛三匁分ケ遣候間其段先方へ不_レ悪御通音被_レ下度候、極上之品請合ニ而直段九十五匁に仕切申候、近年ハ農州も追々不足ニ而直段引上ケ候趣御存之通ニ候、泉や宗平事故直段ハ精々引合申候へ共引不_レ申候、泉宗申置候ニ者如何成ル熊胆ニ而も懷中被_レ成候而ハ是非ゆるみ参候、又湿り受候而ハ是又同断之義に御座候間、能々紙ニ御包被_レ成錫の壺にでも御入置被_レ成候へば夏中とても請合之趣申置候間此段御申通し被_レ下度候、先日御返し之胆干上ケ候処存外之品ニ相成候間懸_レ御目一度奉_レ存候へ共、拙者持用ニ仕皮を取とぐし候間差上不_レ

申候、

一兼而御頼申置候羽織表出来仕候ハ、御遣し被_レ下度候、若出来不_レ仕候ハ、後音ニても宜敷御座候、

一林東馬事兼而遊歴に参候様申置被_レ成候へとも、此節矢代田方五泉へ参候間来月十五六日頃さへ参り不_レ申候間其段御差合被_レ下度趣浅の方申聞候、且時により明田川徳次郎殿同道も可_レ有_レ之哉とも被_レ存候、

一当年ハ唐船余程参り申候ニ付大坂表などハ唐菓追々引下ケ可_レ申趣とも相聞申候、当秋方米直段追々引上ケ廿四俵半当金迄引上ケ候処、両三日此方少々相ゆるみ老儀計も下落仕候、酒造家大迷惑之年柄ニ御座候、今日も夷講旁内外用向大混雜早々申残候、書外尚期ニ後音之時候、恐惶謹言

十月廿日

尚々市川俊次郎事も十月六日帰宅仕候間乍_レ序鳥渡申上置候、以上

蘭学医の越後遊歴を機会に、彼に随行してきた井上玄同、野崎謙随と共に、千庵自身、息子健三郎（千庵の兄宣徳の第一子で、千庵の養子、専庵と号す）や筒井意庵にも研修の場を与えている。そして、そこにおいては『和蘭薬鏡』のように千庵が京都遊学の折に購入したものが活用されている。

また、後書中にある林東馬はやはり京都遊学中親交のあったひとりで、千庵の人名録中にもみえる。しかし、その職業、学問などについては不明である。

小村椀斎より千庵宛尺牘¹⁷⁾

森田千庵様 玉案下

小邨椀斎

二月五日

当月二日之芳墨昨日相達候拜読仕候、如_レ仰新年之御慶千里一般芽出度申納候、先以御軍家御揃御超歳之由奉_レ歎朴候、随而弊屋無_レ恙加算仕候、御放慮被_レ下度候、此方方可_レ得_レ貴意之所返而預_レ御祝詞奉_レ痛却候、次に被_レ仰越

候分量考則差上申候、御心静に御騰写可_レ被_レ成候、乍_レ併座右書に御座候間御写濟次第御返可_レ被_レ下奉_レ存候、右本中
にちぢ置候点類考ハ榕庵未校之書ニ御座候間差上兼候へ其合本に致置候、無_レ抛差上申候、少しハ御考之益ニは相成
可_レ申哉に候得共草稿書に候間御引証被_レ下候てハ字榕迷惑可_レ仕候、其心にて御らん被_レ下度候、扱々御心にかけれ
銘茶一折御恵被_レ下千萬辱拜受仕候、倦字之節手煎相楽ミ可_レ申候、雪消候ハ何れニ茂御面会可_レ仕日日解氷之節を
屈指相待申候、如_レ貴論_レ俗事紛々には当惑仕候、先は御報まで如_レ此御座候、尚期_レ重便之時_レ候、匆々_レ頓首

仲春五日

小村梳齋 智杵(花押)

森田千庵様 玉案下

尚々時下春寒候、御自愛專一奉存候

千庵と長岡藩牧野侯の侍医小村梳齋は、江戸宇田川塾の同窓の間柄であり、千庵江戸遊学中の人名録にその名もみえ、
親交があった。そして、郷里に戻った両者は江戸滞在中と同様、書中に見える『分量考』の貸与のように、書籍の貸借や
相談相手としてしばしば往復があった。なお、円治の旁系にあたる栃尾市の森田家には、梳齋の義父に当たる小村英庵と
の交流を示す資料もある。現に「于_レ時文政十三庚寅夏五月廿日 長岡 小邨馨英庵識 六十三歳」と奥書きされた『製塩
剂篇録』(秘録聞書・製葉篇・柴焼柁様之伝・菓泉鑿法・製塩剂篇の五部からなる)が残されている。おそらく英庵から
千庵に贈られたものであろう。

次に、千庵から円治宛尺牘⁽¹⁸⁾

花章拜見仕候、如_レ高輪_二時_一下寒気日々相催候処弥御清福被_レ成_レ御座_一候由万福奉_レ賀候、然ハ太之吉事御申越_レ二候間猪
之吉へ申聞候処、廿二日に差遣候趣相申候間其段富川氏へ御通声被_レ下度候、且御同家方_レ為_レ御土産_一小紙御恵被_レ下
是又御礼御通音願上候、太之吉事当秋壮司平内暇願之節引取等之始末平内同服にて不_レ相濟_一取計等有_レ之_二付、当
時拙者方出入差留置候間其段御心得置可_レ被_レ下候、且給料之義ハ町方ハ月金壹分ツ、ニ御座候、且太之吉事店賃不_レ相
濟_一是迄年々致し来候へ共、普請以来三貫三百文位之処壹貫貳百文も日雇銭有_レ之候間、残り之分右給料ニ而御引取置

被_レ下度候、太之吉へ相渡候而ハ、迎も不_レ為_二相濟_一候間其段是又御承知被_レ下度候、

一 鮭之塩引并魚子共太之吉參候節為_レ持遣し可_レ申候間左様承知被_レ下度候、

一 先日専庵船越へ參候節小川元奥參り合候而申越候二者、先年元奥へ貸置候今日方熱病論へエステル内科書三部筒井意庵ニ封印し頼遣候趣申遣候間、意庵方御取調被_レ下近便に御遣し被_レ下度奉_二願上_一候、右御報迄早々如_レ此ニ御座候、猶書外期ニ後音_一候 頓首

十一月廿日

悦安

円治様

尚々珍敷鮎之ずし御恵投被_レ下早速賞味可_レ仕候 以上

重ねて千庵より円治宛尺牘¹⁹⁾

(端裏書)

「栃尾ニ而

加茂

森田円治様

御玉下

同 悦安

一 輪啓上仕候、時下暖氣日々相催候処弥御清安奉_二賀上_一候、然ハ先日醬油斗司仁藏義ニ付御申越被_レ成候へ共御使之人直ニ同人方へ案内致し候、其節帰り御尋も無_レ之候間返書も差上不_レ申候如何相成候哉、御使之人より可_レ申候間左様御承知可_レ被_レ成候、

一 兼而意庵預り參候書物之内熱病論今日方ハ此程入用之義有_レ之候間此ものへ御遣し可_レ被_レ成候、ヘイステルは少々延引ニ相成候而も宜候間右二部ハ無_二間違_一様頼上候、右申上度迄早々如_レ此ニ御座候、屯首謹言

三月十六日

この二通の尺牘はいずれも『今日方』即ち千庵の恩師藤林普山の訳『西医今日方』、『熱病論』即ち加賀藩前田侯の侍医吉田長淑の訳『泰西熱病論』及び『ヘイステルの内科書』²⁰⁾の三部の書籍の返却を催促したものである。「泰西熱病論」は

江戸遊学中の千庵が父甫三宛の尺牘の中に引用文献として記されている。親交のあった吉田長淑のものを筆写して持帰ったものではないかと思われる。また、既述の森田家には普山著『和蘭今日方』自筆写本、やはり千庵と親交があった坪井信道『遠西二十四方』自筆写本などが遺されている。おそらく千庵のそれを弟円治が借用し、現在に至っているものと察せられる。それらは千庵の遊学の成果を物語るものであるとともに、森田兄弟が相互に研鑽を積んでいた様子を伝えてくれるものでもある。森田兄弟は医学関係だけでなく、その外の面でもその探求心は旺盛であったようである。断簡ではあるが、それを次に示す。

千庵より円治宛尺牘⁽²¹⁾

一 翰致^{三啓上}候、未残暑退兼候処弥御安泰奉^レ賀候、幣字老母はしめ一同^(不)相交消光候間乍^レ憚御静心可^レ被^レ下存候、然者御繁用ニ付盆中御入来無^レ之義御閑暇次第御待申居候、皆過日御惠投之砝者未^レタ質驗不^レ仕候へどもアンチモニとは様子違候様被^レ存候、何れ後音相識可^レ否可^レ申上^二候、アンチモニの^{アラカ子}砝は鉛の砝の如きものにて^(虫摺)□ニ焼候へば、硫黄の臭気有^レ之硫黄の火のもゆる物ニ御座候、

一 笠巻長福寺御内閣先月廿二日病死被^レ致候間為^二御知^一申上^二候、

一 拙家新婦之義も来ル八月廿二日引越婚礼之積ニ取極候間其節御都合出来申候は、乍^二御苦勞^一御取持ニ(以下欠損) 硫黄の臭気の有無から、円治寄贈の鉱物がアンチモニと様子の異なるものらしいとの見解を伝えていることが分る。このように、鉱物関係にも話が及んでおり、森田兄弟の多才さを窺うことができる。

千庵は晩年に和歌に親んでいる。和歌を通じて親交のあった人について、今に遺る『無題和歌集』⁽²²⁾にみえる人名をあげれば、以下の通りである。小島住吉屋三豆元、五十嵐久栖、真木屋久八、中沢津治春樹、高馬保内和言、小林要七百世、石井重枝、紺屋惣五郎、小日向中清、五十嵐伊左衛門伴雄、青本喜内義隆、小林彦兵衛さかゆ、森田守古、大枝千入、志田久躬、明田川懐徳、大漆広雄、紙屋清蔵高安、光明院住、可津子、三鏡、佐藤水穂貞助、浅野貞雄、保内熊倉弘冬の人たちである。

(未完)

資料

伴道与法眼栄藩の実系とその子孫

伴 七三雄

私の家の遠祖にあたる伴道与については、中野操著『日本医事大年表』の元禄三年（一六九〇）の項につきのように記されている。「九月二十三日 町医舟橋長庵、喜多村慶庵、伴道与、数原通玄……幕府ニ召出サル」

ここでは、伴家の第六代栄富が天保十三年（一八四二）九月に書き記した伴家の家譜を主として紹介してみたい。

伴家の姓は大伴、苗字は伴、大彦命の後胤と言ひ伝えられているが、詳しいことは不明である。

（註）大彦命は八代孝元天皇の長男で、第九代開化天皇の長兄に当る。（宮内庁書陵部調べ）

下野の国日光の住人、伴意楽を父としたが、母は日光山神職大森禰宜の娘である。弱年より江戸へ参り、今大路道三玄淵の門人となり、医学を修得し、その後召し出されて、五代將軍綱吉（常憲院）のとき、元禄三年（一六九〇）九月廿三日に、御切米貳百俵を給され、奇合医師を仰せ付けられ、元禄九年九月二十五日、奥医師となった。翌、元禄九年九月二十六日に、さらに御番料として、貳百俵の加増があり、同年十二月九日、法眼の位に叙せられた。元禄十年四月廿六日に御匙役となり、同年十二月十八日、三百俵を加増され、尚葉奉行となった。

元禄十一年七月三日には地方として武州榛沢郡之内五ヶ村賀矢

郡之内式ヶ村、合計七ヶ村の知行を賜わり、（現在の埼玉県神保原町附近）年月日は不詳であるが、綱吉直筆の掛軸を拝領し、現在に至るまで家藏している。掛軸は縦一尺四寸五分、横式尺六寸三分であり、金箔地に「咸寧」と横に大書され、その脇に「忠信礼之本 也義理之本也」と二行に書かれている。猶、住いは浅草の鳥越の八軒屋敷（現在の鳥越神社附近）の一画を拝領した。



宝永六年（一七〇九）

將軍綱吉薨御に伴い、

瑞春院（綱吉側室お伝の方）の御附き役とな

ったが、六代將軍家宣

（文昭院）のとき、正

徳元年（一七一二）、病

氣との為願ひ出て、御

役御免、奇合となる。

八代將軍吉宗（有徳院

）のとき、享保二年（一

七二二）十二月八日、

病没した。享年七十一

才、法名宣山、浅草龍

宝寺に葬る。

二代目、伴栄宣は、

初代栄藩の長男として

元禄三年(一六九〇)江戸で生まれ、幼名は豊松、長じて道朔と改名、母は酒井讚岐守医師山本玄広の娘である。妻は御書院番戸田若狭守組の川勝勘兵衛広英の娘であったが、のちに大御番八木十三郎組の大岡数馬光義の養女を後妻とした。

八代将軍吉宗(有徳院)のとき、享保二年十二月廿六日に、相続の儀を相済せ、寄合を仰せ付けられた。同年閏三月十九日に月光院(六代将軍側室輝子の方)の御附を仰せ付けられた。

輝子の方逝去により、九代将軍家重(惇信院)のとき宝暦二年(一七五二)十一月十四日御右筆部屋縁類に於て老中列座のうちに、酒井左衛門尉殿から寄合を仰せ付けられ、宝暦三年九月十八日病死した。享年六十四才。浅草龍宝寺に葬る。

この二代目栄宣には二人の妹と二人の弟があり、長女は本多主税忠昭に嫁し、次女は小普請組小田切喜兵衛支配の井上順庵に嫁している。次男完照は奥医師林良喜重熙の養子となり、後日御番医師林良適となっている。三男の忠英は奥医師法眼小川文庵守忠の養子となり、小川守碩となっている。

三代目相続予定の道朔は早世したため有徳院(八代吉宗)のとき、元文三年(一七三八)五月廿五日、寄合医師湯川寿三の次男玄昌を養子にしたい旨、願い出たところ同年九月廿六日願い通り、御養子仰付けられ、部屋住みになった。元文四年四月十一日、御目見を仰せ付けられ、元文五年九月十二日、月光院(輝子の方)の広敷御用を仰付けられ、輝子の方が逝去するまで相勤めた。この玄昌の実父は湯川吉三であり、母は寄合医師木下道円の娘であった。玄昌は三代目道与栄章と名乗り、二代目栄宣の長女を妻とした。

惇信院(九代将軍家重)のとき、宝暦三年(一七五三)十二月三日相続を相済せ菊之間に於て御老中が御列座の上、西尾隠岐守から寄合を仰せ付けられ、宝暦十年九月三日病死した。享年五〇才であった。

栄章の妻に妹が三人居り、次女は御書院番、齋藤伊予守組の川勝勘左衛門広典の妻となり、三女は大御番米倉丹後守組頭河尻与三郎鎮恒の妻となっている。四女は奥医師林良適法眼茂承に嫁している。女子四人の末に男子栄慶が誕生したため、これを四代目に据えた。

四代栄慶は一つ橋附医師田沢宗伯安久の娘を嫁り、さらに弟の良香は後に寄合医師増田寿慎の養子となり、奥医師増田寿得となっている。

惇信院(九代将軍家重)の御代宝暦三年三月十四日、三代目栄章に男子なく、祖父の栄宣がお願いして居った通り、御養子を仰せ付けられ、宝暦十年十二月四日、栄慶は養父栄章の跡目を相続し、菊之間に於て、御老中御列座、秋元但馬守(秋元涼朝)より四代目道与を継承する旨仰せ渡され、小普請組大久保与七兵衛の支配に入り、其の子土岐大学の支配の節、宝暦十二年五月十日、御番医師を仰渡され、御右筆部屋縁類に於て、御老中御列座、松平右京太夫(老中松平輝高)より仰せ渡されたが、明和六年十二月廿一日、三十四才にて病死した。

五代目、道与栄清は十代将軍家治(浚明院)の御代、父道与栄慶の御番医師の節、明和六年十二月廿七日、父道与の願通り、菊之間に於て、御老中御列座、松平周防守(松平忠順)から跡目相

統を仰せ渡され、小譜請組、設樂甚十郎の支配下に入り、同七年四月四日、將軍の交替の際にも御礼申上げたが、その後、段々に支配替えとなり、長井五右衛門支配の折に、病氣のため隠居を仰せ付けられ、文政十三年（一八三〇）正月二日、病死す。享年七十三才。栄富の妹は最初、御番医師吉田長達宗純と縁組みしたが、不縁のため離婚し、寛政七年（一七九五）十二月晦日、藤堂和泉守家来湊政右衛門義賢に再婚した。

六代目道与栄富には三人の姉があり、長女は早世、次女は御書院番土岐丹波守組の服部平太夫保利に嫁し、三女は早世した。栄富の母は松平老岐守家来、荒川与市郎弘隆の娘である。

栄富は天保六年（一八三五）五月廿四日、婚約を願い出で六月十七日に願の通り許可があり、奥医師小川龍仙院法印忠実の娘と婚姻した。

第十一代將軍家斉（文恭院）のとき父道与が小譜請組長井五右衛門支配の節、文政十年十二月十二日、病氣のため隠居を願出た所、願いの通りに家督相続を相違なくする様に内命があり、菊之間に於て、御老中御列座のもとで、青山下野守（考中青山忠良）から栄富に家督相続を仰せ渡され、父の時の如く、長井五右衛門支配となる。文政十年十二月廿二日、相続の御礼を申上げた。

天保四年（一八三三）五月廿五日、栄富は御番医師を仰せ付けられ、御右筆部屋に於て、御老中御列座、松平周防守殿（松平信頼）その旨をより仰せ渡され、同九年十二月十八日、日光准后の登山参詣の折に附添する様に御右筆部屋に於て小笠原相模守殿より仰せ渡され、同天保九年十二月廿六日、御出発に際し、御付添え致

し、翌天保十年正月二十四日、寛永寺に歸寺、歸府した。その折に人足八人、馬五匹を連れ、御朱印並に途中往復して彼の地に逗留中に、拾六人扶持を下され、准后宮からも、白銀拾枚、紗綾二巻を拝領した。天保十三年四月三日、日光山宮御参詣の折にも御右筆部屋に於て、水野越前守殿から御供を仰せ渡された。同年七月八日には、仲間取締役補佐を、桔梗の間於にて大岡主膳正殿から仰せ渡された。

栄富の長男猶吉は早世し、長女も早世、末弟の金次郎が継目となり、七代栄親となった。

以上、伴家の初代から六代までの略歴を記したが、特にあげて言うほどの事蹟はあまり述べられていないが当時の風習がうかがえるところもあり、参考の一端にもなるかと考え、まとめてみた。

総括

元禄三年（一六九〇）に江戸幕府の医官に任ぜられた伴道与は私の家の遠祖に当る。この初代道与から六代道与栄富に至る実譜を紹介した。特にあげておくべきこともないようであるが、当時の風習をうかがえるところもあり、御参考の一端にでもなれば幸いである。

伴家系譜

1 (一六四七〜一七二七)

○道与 (法眼)

●酒井讚岐守醫師
山本玄広女

○印 男子
●印 女子

2 (一六九〇〜一七五三)
○栄宣

●川勝勘兵衛広英女
大岡数馬光義養女

●本多主税忠昭へ嫁す

●小普請組小田切喜兵衛支配
井上順庵玄直へ嫁す

○完熙
奥医師林良喜熙之養子となり
奥医師林良適となる

○忠英
奥医師小川文庵守忠之養子となり
小普請組青木厨助支配
小川守碩となる

○道朔 (早世)

3 (一七一〜一七五九)
○栄章 (養子)

父、寄合医師湯川春房
母、寄合医師天下道円
守直女

●(栄章之妻)

●御書院番
川勝勘左衛門広典妻

●大御番米倉丹後守組
河尻与三郎鎮恒へ嫁す

●奥医師
林良適法眼茂承へ嫁す

4 (一七三六〜一七六九)
○栄慶

●(早世)

○良香
増田寿慎の養子
奥医師増田寿得

●一ツ橋御医師
田沢宗伯安久女

○4
栄慶
(一七三六—一七六九)

●御番医師吉田長達宗純へ嫁し、不縁となり
藤堂和泉守家来
湊政右衛門養賢に再婚す

●松平老岐守家来
荒川与市郎弘隆女

○5
栄清
(一七五八—一八三〇)

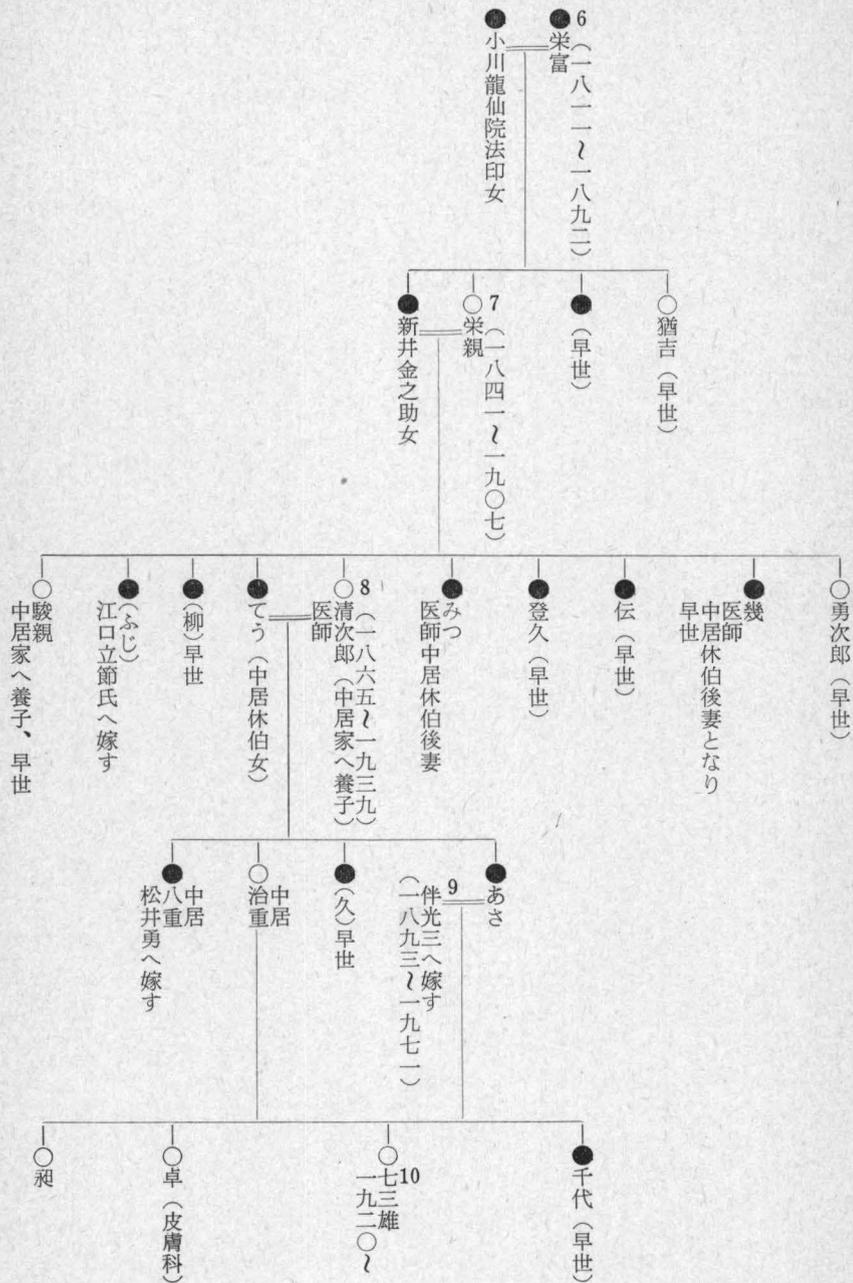
●奥医師
小川龍仙院法印実女

●6
栄富
一八二—一八九二

●(早世)

●御書院番土岐丹波守組
服部平太夫保利へ嫁す

●(早世)



昭和四十八年度医史学関係論文目録

註 ゴシックは巻数、()は号数、次の数字は頁数を示す。
概論

展望・医学史 中川米造 科学史研究 (一〇五) 一〜六
医学文化をたずねて 奈良時代の疾病を考える―古病理学?―
宮崎吉平 医海時報 (五八八) 三

世界の医療史(Ⅻ) 野村拓 医療と施設 (二五二) 二九〜三二
世界の医療史(X) 野村拓 医療と施設 (二四六) 二七〜三一
世界の医療史(Ⅺ) 野村拓 医療と施設 (二四八) 二八〜三一
医史学のすすめ 大島蘭三郎 Japan International Medical
Tribune 六 (四三) 七
医史にみる医の倫理(一) 梅毒 大熊房太郎 臨床科学九(一)
一三二〜一三三

先史時代から現代に至る日本人の小進化的変化 鈴木尚 二四二
〜二五八

医史にみる医の倫理 人体解剖 大熊房太郎 臨床科学 九
(四) 五三〇〜五三三

医史にみる医の倫理 診療報酬 大熊房太郎 臨床科学 九
(五) 六六七〜六七〇

三条天皇考―医療状況を通してみた上級貴族意識の諸相― 新
村拓 医学史研究(四〇) 五〇三〜五〇七

文明史的な日本医師小考 布施昌一 日本医事新報ジュニア版
(二二二) 二七〜二八、(二二三) 一八〜一九、(二二四) 二七
〜二八、(二二五) 二七〜二八、(二二六) 一七〜一八、(二二

六) 一七〜一八、(二二七) 二七〜二八、(二二八) 二七〜二八
東洋医学

孫思邈唐以前の医学を集大成 蔡宗傑 漢方医薬(一四) 三
六〜四〇

王・唐朝の医書「外台秘要方」 蔡宗傑 漢方医薬(一七)
一八四〜一八八

第三医学アールヴェーダ インド医学序説八〜一〇 岩本裕
日本臨床 三一(一) 二〇九〜二二二、(二) 四五三〜四五七、
(三) 七二五〜七二二

インド伝統医学についての一管見 丸山 博 代謝 一〇 臨
増 七九一〜七九五

タイ古医学について 久保全雄 日本の医療協力(四六) 二
双伝

日本の栄養学を切り拓いた人達の追憶 大磯敏雄 保険診療
二八 (二〇二五) 六四〜六五

灯をかかげた人びと(第一〇回) 石川倉次・山野光雄 健康保
険 二七(一) 一四四〜一五四

医学文化をたずねて 来日宣教医 長門谷洋治 医海時報
(五八七) 三

山脇門下の若越医人について 中野 操 医譚(復刊四五号)
二七八〇〜二七八三

兼康家の人々 山田平太 日本歯科医史学会誌 一一(七)
九〜一〇

公衆衛生人物山脈 田中正四 日本医事新報ジュニア版(二二

九) 二二〇三

医学文化をたずねて—絵画、文献資料にみる中世の医師— 樋

口誠太郎 医海時報 (五九〇) 三

お医者山脈 (四三) 順天堂山脈 (一〇〇) 徳川白布 Xレイ・ジャ

ーナル 五 (四九) 二八〇二九

お医者山脈 (四四) (四五) 加藤山脈 徳川白布 Xレイ・ジャ

ナル 五 (五〇) 二六〇二七、(五一) 二八〇二九、(五二) 二

六〇二七

お医者山脈 (四六) 塚本山脈 徳川白布 Xレイ・ジャーナル

五 (五三) 二六〇二七

お医者山脈 (四九) (五二) 杏林館山脈 徳川白布 Xレイ・ジャ

ーナル 五 (五五) 二六〇二七、(五六) 二八〇二九、(五七)

二六〇二七、(五八) 二六〇二七

お医者山脈 (五三) (五四) 杏雲山脈 徳川白布 Xレイ・ジャー

ナル 五 (五九) 二八〇二九、(六〇) 二八〇二九

伝記

郷土史赤松氏略系—開業医として四百年の家系— 田中敬三 西

播文学 (五二) 一一〇二四

Abbe の顕微鏡理論 (一八七三年)—その成立と性格— 常石敬

一 科学史研究 (一〇六) 六六〇七六

師を語る 安藤画一先生 尾島信夫 医海時報 (五七七) 三

綱脇龍妙と看護 清水昭美 綜合看護 八 (二) 六八〇八三

適塾門人跡見玄山 (姓名録番号三九四) について 田崎哲郎・

富安広次 蘭研研究報告 (二七一) 四四〇四五

医学文化をたずねて「安藤昌益」 友吉唯夫 医海時報 (六〇

三) 三

安藤昌益と本居宣長 宮本忍 胸部外科 二六 (一) 一〇〇

浅田宗伯書翰に想う 矢数道明 漢方の臨床 二〇 (四) 一八

五〇一八九

フランス人医学者の横顔、フランス整形外科医 d'Aubigni 教授

と Juret 教授 弓削大四郎 日仏医学 一四 (一) 二) 八

〇〇八四

ルイス・デ・アルメイダの業績と西洋医学の伝来 片岡弥吉

病院 三二 (一) 一〇六〇一〇九

五十歳で発起し西説「草木図説」を出版した美濃大垣の医家 飯

沼慾齋翁 吉川芳秋 現代医学 二一 (一) 一二七〇一四八

師を語る 石川憲夫先生 三輪清三 医海時報 (五八九) 三

稻生若水について 津田進三 漢方の臨床 二〇 (八) 五三八

〇五四三

補綴・入江文郎伝 高橋邦太郎 蘭研研究報告 (二七六) 五

八 岩崎玄真と伊古田純道 西田芳治 秩父教育 (六〇) 三二〇三

六

江川英龍歿時の状況 仲田正之 神奈川県史研究 (一九) 一

一三

医学文化をたずねて 関西蘭方の祖江馬家 青木一郎 医海時

報 (五八九) 三

江馬蘭齋に宛てた前野良沢と杉田玄白の書簡 片桐一男 古文

書研究 (六) 四七〇五三

エリオットと木戸孝允の往来について 今田見信 日本歯科医

史学会誌 一(一)二二二~二二八

オスラー博士の生涯(九七) 病理学から内科臨床へ(一八七二~一

八八三) 日野原重明 *Medicina* 一〇(五)六五八~六六一

オスラー博士の生涯(一〇〇) ヤギル大学で教えていた頃の世界の

医学界の動向とオスラーの関心の焦点 日野原重明 *Medicina*

一〇(六)七九八~八〇一

オスラー博士の生涯(一一)オスラーの二度目の欧州旅行(一八八

四) 日野原重明 *Medicina* 一〇(七)九四二~九四五

オスラー博士の生涯(一二)オスラーのフィラデルフィア赴任

日野原重明 *Medicina* 一〇(九)一一二四~一二七

宇田川蘭学と緒方洪庵「適々齋薬室膠柱方」をめぐる 大

塚恭男 蘭研究報告(二七三)五~七

緒方洪庵らの遺墨についての私見 石原明 蘭研究報告(二

七一)四一~四三

緒方洪庵の医学志望歎願書の検討 緒方富雄 蘭研究報告

(二七二)三七~三九

七〇年の生涯を顧みて 緒方銈次郎(単行本)

緒方洪庵の子、緒方惟直のこと 緒方富雄 蘭研究報告

(二七四)四~二三

追補正誤緒方洪庵の子、緒方惟直のこと 緒方富雄 蘭研究

報告(二七六)一九

師を語る 緒方知三郎先生 赤崎兼義 医海時報(五八八)三

緒方知三郎先生の思い出 金子仁 医学のあゆみ 八七(一)三

九~四一

大久保黄翁筆姓名録について 青木一郎 医譚(復刊四五号)

二七八四~二七九二

結核初感染発病説(二)岡治道の業績 小松良夫 医学史研

究(四〇)四九一~五〇〇

小幡英之助の恩師たち 今田見信 日本歯科医学史学会誌 一

(一)三四~四六

Alexis Carrel(一八七三~一九四四)記念切手(スエーデン) 緒

方富雄 医学のあゆみ 八四(九)四八八

長崎医学史ノート(二九頁) 原好古の医師観 中西啓 長崎県

医師会報(三三三)一八

古河と河口信任 古河の医学史 川島恂二・安田利顕 医人葉

人 二二(三)二二二~三〇

勝海舟のコレラに関する覚え書と罹病 土屋重朗 蘭研究報告

告(二七五)一三二~一七

看護婦カーベルの遺跡ロンドン東イギリス 蒲原宏 医学

のあゆみ 八七(九)五一三~五一六

ギヤルサン教授を偲ぶ 吉倉範光 日仏医学 一四(一~二)

一~六

明和安永年度における桐山正哲の動静「蘭東事始」覚え書(七)

松木明知 蘭研究報告(二六六)

北里柴三郎先生のベスト菌発見とその後の経緯 春日忠善 日本

医事新報(二五五八)六三~六八

目で見る医学史(四六)北里柴三郎 酒井シツ *Medical News*

(一四一) 四

北里柴三郎の人と業績 福島伴次 日本医事新報ジュニア版 (一一〇) 一八〜二一

師を語る 久保猪之吉先生 河田政一 医海時報 (五七二) 三

師を語る 熊谷岱藏先生 中村隆 医海時報 (五八一) 三

師を語る 吳建先生 冲中重雄 医海時報 (五五七) 三

心臓と自律神経と吳建先生 上田英雄 臨床と研究 五〇 (三三)

青ページ 五〜六

吳秀三先生と周辺の人びと——とくに森嶋外および吳文聰との關係をめぐって—— 岡田靖雄・吉岡真二・長谷川源助 医学史研究 (四一) 五四四〜五五〇

大正期の精神医療と吳秀三 岡田靖雄 医学史研究 (四〇) 四七七〜四八一

文豪ゲーテの作品における医史学的背景 藤森速水 医譚復刊 (四五) 二七九三〜二七九八

小林義直とその訳(著)書 鈴木勝・新国俊彦・谷津三雄・鈴木邦夫 日本歯科医史学会誌 一 (一一) 二九〜三三

人にもる公衆衛生の歴史(二〇) 社会医学研究会の活動家(三)、小宮山新一(一九〇五〜六七)、地域保健の先駆者 川上武・上林茂暢 公衆衛生 三七 (一) 四八〜四九

コペルニクス生誕五〇年にむかって(ポーランド) 緒方富雄 医学のあゆみ 八五 (一) 八一

岡山の蘭方医児玉順藏伝の補遺 田中助一 蘭研研究報告 (二七) 一三三

七) 一三三

児玉家文書について 中山沃 蘭研研究報告 (二七二) 三三〜三五

佐藤尚中伝(五〜八) 小川鼎三 順天堂医学 一九 (二) 八四〜八六、(三) 二七三〜二七九、(四) 四三二〜四三七、(五) 八五〜八九〇

佐藤尚中の済衆録自筆原稿 小川鼎三 蘭研研究報告 (二七七) 一〜四

佐藤進と口腔外科 谷津三雄 日本歯科医史学会誌 一 (一一) 一八〜二二

医学文化をたずねて 相良知安と佐賀藩 鍵山栄 医海時報 (五九) 一三

目でみる医学史(五〇) 佐々木隆興と吉田富三 酒井シツ Medical News (一四五) 四

シーボルト来日一五〇年 緒方富雄 医学のあゆみ 八七 (四) 二二二

シーボルト蘭学者たち 緒方富雄

佐渡の奇人 司馬凌海 大滝紀雄 人間の医学 (五七) 六三〜六五

杉田玄白の人間観 宮本忍 胸部外科 二六 (五) 三四七

杉田玄白・覚がき(四九) テリアカの付録悲願達成のよろこび 杉靖三郎 社会保障 二四 (二) 一四〜一六

人にもる公衆衛生の歴史(二二) 社会医学研究会の活動家(四) 曾田長宗(一九〇二〜) 公衆衛生と統計 川上武・上林茂暢 公衆衛生 三七 (二) 一二二〜一二三

建部清庵(一一)(一三) 杉靖三郎 健康医学(二三一)六二、

六五、(二三二)六二、六五

病跡学漢語(五)史上人物のカルテ平清盛とその死 王丸勇 臨

床科学 九(二)二八〇~二八一

心臓刺激伝導系発見者—田原淳先生の生誕一〇〇年を迎えて—

今井環 臨床と研究 五〇(六) 青ページ一一、二二

医学文化をたずねて ダランベールと医学史のことなど 巴陵

宣祐 医海時報 (五九五)三

高野六郎 結核予防会行政創業の人 近藤宏二 複十字(一一

二)一四~一六

高野長英の医学思想 宮本忍 胸部外科 二六(八)五五八

Theobald Adrian Palm の著述論文について 蒲原宏 蘭研研

究報告 (二七七)三一~三三

「冬樹先生遺稿」について 青木一郎 日本医事新報(二五五

一)五一~五三

労働医学の創始者 暉峻義等をおもう 田辺正忠 健康会議

二五(七)四三~四五

現代医学の歴史診察(一)胃がんで死んだ徳川家康 杉浦守邦

保健ジャーナル(九一)七

ベルツ・スクリバの胸像の作者 長沼守敬(一八五七~一九四二)

緒方富雄 医学のあゆみ 八四(四)二〇九

フロレンス・ナイチンゲール遺跡めぐり 蒲原宏 医学のあ

ゆみ 八七(一〇)五四九~五五二

師を語る 中村文平先生 宇山安夫 医海時報(五八四)三

中村惕齋の訓蒙図彙について 木村陽二郎 東京大学教養学部

教養学科紀要(五)一〇五~一三一

長与専齋の来泉 土尾重朗 静岡県医師会報 四~五

棚野直とその筆跡 薄原宏 新潟県医師会報(二八二)

野口英世と石塚三郎について 本間邦則 日本歯科医学史学会

誌(一)一一五

海外医療の先駆 野口英世(一) 高木功 日本の医療協力(四

六)六

ハイステル Heister の画像について 中野操 蘭研研究報告

(二七)二六~二八

Louis Pasteur (一八二一~一八九五) 緒方富雄 医学のあゆ

み 八四(一〇)五八九

長谷川泰における明治医人的な畸人性の考察(一)~(六) 布施

昌一 日本医事新報(二五八六)五九~六二、(二五八七)六

三~六六、(二五八八)六二~六五、(二五八九)六五、(二五

九〇)六三~六六、(二五九一)四七~五〇

秦佐八郎先生生誕一〇〇年と化学療法法の進歩(全) 佐々貫之・

秦藤樹・牛場大蔵ら 日本医事新報(二五六七)三~一五

パニコラウ記念切手(ギリシャ) 緒方富雄 医学のあゆみ

八七(五)二五六

華岡青洲の麻酔下手術年月のこと 宗田一 薬事ニュース(一

八六七)

華岡青洲の麻酔下手術年月のこと 宗田一 The Doctor(三

四九)三〇

師を語る 平井金三郎先生 杉田博 医海時報 (五七〇) 三
 広瀬旭荘と江戸の蘭学者群像 杉本勲 蘭研研究報告 (二七
 二)
 加賀藩最初の蘭方藩医藤井方亭について 津田進三 石川郷土
 史学会誌 (六) 一七八
 フィルヒョウと人類学 森優 臨床と研究 五〇(二) 一七六
 ~一七七
 蘭医フェイルケの富士山の図 片桐一男 日本歴史 (二九八)
 七九~八一
 ベルツとリース 林健太郎 日本歴史 (三〇〇) 九四~九七
 目で見える医学史(四七) ベルツとスクリバー 医界白眉のお雇い外
 人ー 酒井シツ Medical News (一四四) 四
 クロード・ベルナル 森優 臨床と研究 五〇(八) 赤ページ一
 三~一四
 クロード・ベルナルと血管支配神経 森優 臨床と研究 五
 〇(一〇) 赤ページ一七~一八
 F. Broussais (一七七一~一八三八) 記念切手(フランス) 緒
 方富雄 医学のあゆみ 八五(五) 二九七
 東京大学東校オランダ医官 A・E・ボードウインの日講紀聞に就
 いて 荒瀬進 蘭研研究報告 (二七) 二二~二三
 新発田市丸山弘輔氏家蔵文化九年 薄原宏 新潟県医師会報
 (二八〇)
 前野良沢・杉田玄白とそのあとさき 内山孝一 医学のあゆみ
 八五(一〇) 六二〇~六二四

曲直瀬玄朔年譜と今大路家記鈔抜萃 矢数道明 漢方の臨床
 二〇(二) 一九~二五
 曲直瀬玄朔と文禄朝鮮の役 矢数道明 漢方の臨床 二〇(五)
 二四九~二五四
 大正時代の開業医父の場合 松田道雄 医療と人間と (二) 一
 九三~一九八
 書翰から見た箕作院甫と秋坪との交流 緒方富雄 蘭研研究報
 告 (二七三) 八~一〇
 師を語る 宮川米次先生 土屋毅 医海時報 (五八〇) 三
 私の鵜外漁史―幸徳事件をめぐって 吉田澄彦 日本医事新報
 (二五八二) 五九~六一
 医師としての森鵜外(六) 伊達一男 日本医事新報 (二五五
 四) 七二~七四、(二五五六) 六六~六八、(二五五九) 六六~
 六八、(二五六〇) 六九~七一
 人生の正師・森田正馬先生(上) 森田正馬生誕百年記念によせて
 八木敏夫 生活の発見 一七(六) 二九~三二
 結核になやんだ知名人(一七) ラッセル 岡西順二郎 複十字
 (一一三) 九
 John Coakley Lettson (一七四四~一八一五) 緒方富雄 医
 学のあゆみ 八六(五) 二六四
 Otto Loewi (一八七三~一九六一) 生誕一〇〇年記念切手 緒方
 富雄 医学のあゆみ 八六(一) 二〇
 謎の人物ロイトルを追って 石田純郎 日本医事新報 (二五五
 二) 六五~六七

回復組合の創始者 Low 博士 Walter C. Alvarez Modern Me-

dicine 11 (1) 三四~三五

J. L. センリン先生伝 坂本勇 獣医畜産新報 (五八三) 九

三~二〇〇

目でみる医学史(四九) 山極勝三郎と痛 酒井シヅ Medical

News (144) 四

安富寄視考 片桐一男 蘭研研究報告 (二六九)

吉田富三君(一~二) 緒方富雄 医学のあゆみ 八五(七) 四

五四、(八)五〇〇

吉田富三博士を悼む 太田邦夫 医学のあゆみ 八六(二) 九

七~一〇〇

種痘の先覚者米原恭庵の業績について 米田正治 日本医事新

報 (二五四八) 七一~七二

医療開業試験委員渡辺晋三先生について 瀬戸俊一 日本歯科

医史学会誌 一(一) 七七~七八

医療制度史

日本医療制度史(三八) 実費診療所の設立とその意義

菅谷章 社会保障 二七(七〇二) 二四~二五、(七〇四) 二

〇~二一

日本医療制度史(四〇~四二) 医療組合病院の設立とその運動

菅谷章 社会保障 二七(七〇五) 二〇~二一、(七〇六) 一六

~一七、(七〇八) 二〇~二一

日本医療制度史(四三)~(四五) 無産者診療所の設立とその意義

菅谷章 社会保障 二七(七〇九) 二〇~二一、(七一〇) 二〇

~二一、(七一一) 三八~三九

日本医療制度史(四六)~(四七) 大正・昭和期(敗戦まで)の病

院 菅谷章 社会保障 二七(七二三) 二〇~二一、(七一

四) 一六~一七

日本医療制度史(四八~五二) 各種医師団体の結成と医師法の成

立(その一~五) 菅谷章 社会保障 二七(七二五) 二〇~

二一、(七二六) 二〇~二一、(七二七) 六~一七、(七二八) 二

〇~二一、(七二九) 二〇~二一

日本医療制度史(五三) 歯科医師の身分法の成立と発展 菅谷

章 社会保障 二七(七二二) 二〇~二一

日本医療制度史 薬剤師の身分法と薬事法制の成立と発展 菅

谷章 社会保障 二七(七二二) 二〇~二一、(七二三) 四〇

~四一、(七二四) 二〇~二一、(七二五) 二〇~二一、(七二

六) 二〇~二一

日本医療制度史 産婆・助産婦の身分法の成立とその変遷 菅

谷章 社会保障 二七(七二七) 四二~四三、(七二八) 二〇

~二一

日本医療制度史 看護婦の身分法の成立とその変遷 菅谷章

社会保障 二七(七二九) 四〇~四一、(七三〇) 二〇~二一、

(七三一) 二〇~二一

日本医療制度史 保健婦活動の歴史と保健婦の身分法 菅谷章

社会保障 二七(七三三) 二〇~二一、(七三三) 四〇~四一

日本医療制度史 診療所取締規制の制定とその意義 菅谷章

社会保障 二七(七三五) 三四~三五

日本医療制度史 準戦時体制下における厚生省の創設 菅谷章

社会保障 二七(七三六)二〇〇二一、(七三七)二〇〇二二

日本医療制度史 医薬制度調査会と日本医療団の設置 菅谷章

社会保障 二七(七三八)二〇〇二一

日本医療制度史 医薬分業の法制の変遷と分業運動(その一)五

菅谷章 社会保障 二七(七三九)三八〇三九、(七四〇)二〇〇二二、(七四二)二〇〇二二、(七四二)二〇〇二三、(七四四)二〇〇二二、(七四五)二〇〇二二、(七四六)三八〇三九、(七四七)四〇〇四一(七四八)四〇〇四二、(七四九)四〇〇四一、(七五〇)三八〇三九

「医療政策史」の学習会をおえて 杉山さち子 健康会議 二五(七) 三六〇三九

医療保険史説 健康保険開始される(一)四 布施昌一 ペン

十字 五(三) 三四〇四〇、(四) 二五〇三一、(五) 二六〇三二、(六) 二四〇三〇

私の社会保障史(四) 船員に関する社会保障の空白時代 築誠

社会保障 二四(三) 一二〇一五

戦後医療技術史年表作成の試み 佐藤三重子・上林茂暢 医学史研究(四一) 五二〇一五二

国民総医療費の推移と若干の分析 中村文子 医学史研究(四一) 五二〇一五三二

医療社会事業のあゆみ 中島さつき 医学史研究(四一) 三五〇一五三七

患者運動より見た医療史―序論と問題提起― 長宏 医学史研究(四一) 五三八〇五三九

GHQの医療政策と針灸漢方医療 鎌江真五 医学史研究(四一) 五四〇

戦後医療技術史の特徴と課題をめぐって―医療史の技術史側面― 林正秀 医学史研究(四一) 五四一〇五四三

医薬分業論争の史的考察(七) 多田羅浩三 医学史研究(四一) 五五一〇五五六

日本医学史話 漢方医受難の歴史始まる 末安幸俊 医海時報(五七五) 三

日本医学史話 漢方存続に涙ぐましい努力 末安幸俊 医海時報(五七九) 三

日本医学史話 徒勞に終わった議會への請願 末安幸俊 医道時報(五八〇) 三

日本医学史話 明治政府による漢方医弾圧 末安幸俊 医海時報(五八二) 三

公衆衛生 新社会衛生史ノート四九 後藤新平と「国家衛生原理」 三浦豊彦 労働衛生 一四(一) 四五〇四八

新社会衛生史ノート五〇 別子鉱山の開坑 三浦豊彦 労働衛生 一四(二) 四五〇四八

社会衛生史ノート(五一) 大日本私立衛生会設立の頃 三浦豊彦 労働衛生 一四(三) 四五〇四八

社会衛生ノート(五二) 後藤新平と職業衛生 三浦豊彦 労働衛生 一四(四) 四五〇四八

新社会衛生史ノート(五三)五五) 足尾銅山小史 三浦豊彦

労働衛生 一四(五) 四五、四八、(六) 四五、四八、(七) 四

五、四八

新社会衛生史ノート(五六) 石原修の女工と結核 三浦豊彦

労働衛生 一四(八) 四五、四八

新社会衛生史ノート(五七) 三浦豊彦 労働衛生 一四(九)

新社会衛生史ノート(五八) 死の灰 三浦豊彦 労働衛生 一

四(一〇) 四五、四八

新社会衛生史ノート(五九) 撻兵論 三浦豊彦 労働衛生 一

四(一一) 四五、四八

新社会衛生史ノート(六〇) 三浦豊彦 労働衛生 一四(一二)

WHO創立二五年記念切手(リベリア共和国)(Alexander Fleming 像) 緒方富雄 医学のあゆみ 八六(一〇) 七三四

WHO創立二五年記念切手(リベリア共和国)(Jonas Edward Salk 像) 緒方富雄 医学のあゆみ 八七(一一) 一四

GrenadaのWHO二五年記念切手(william Havey 像) 緒方

富雄 医学のあゆみ 八七(九) 四八五

乳幼児保護事業の性格と役割 毛利子来 医学史研究(四〇)

四七三、四七五

安土桃山時代の養生書 井上清恒 健康(二〇六)一八、一九

医学文化をたずねて(二四) 日本における中世医学とくに軍陣医学

学の一例(戦国時代阿波武士が携行した救急療法書) 今市正

義 医海時報(五五八) 三

病氣と社会 立川昭二・西三郎・白本博次・園田恭一 医学の

あゆみ 八四(一一)一四

病院史

小石川養生所 酒井シツ 労働の科学 二八(八) 五〇、五二

病院史のひとつま一人前になりはじめたころのハウスキーパー

長谷川一子 病院 三二(二) 六九

病院史のひとつま 国立病院の再編成(一) 国立創設の頃

尾村偉久 病院 三二(五) 六九

病院史のひとつま 国立病院の再編成(二) 国立の地方、私大

移譲・移管問題 尾村偉久 病院 三二(六) 六九

戦時の国立療養所(一) 〇(五) 私の日記より 黒川清之 日本

医事新報(二五六九) 六三、六七、(二五七四) 六六、六八、

(二五七五) 六四、六六、(二五七六) 六七、六八

明治初期備南地域の病院設立をめぐる一品治郡の場合(旧・岡

山県) 妹尾啓司 蘭研研究報告(二七二) 六一、六四、

(二七六) 二二、一八

地方史

長崎医学史ノート(二七) 幕末のオランダ料理 中西啓 長崎

県医師会報(三三二) 一〇 尾本涼海の話 中西啓 長崎県医師

長崎医学史ノート(二八) 会報(三三二) 一一

長崎医学史ノート(二九) ポードウィンの生理学講義 中西啓

長崎県医師会報(三三三) 八

長崎医学史ノート(三〇) かくれキリシタンの伝承 中西啓

長崎県医師会報(三三四)

長崎医学史ノート(二二) 大阪の薬種業界の改令 中西啓 長

崎県医師会報 (三二五)

長崎医学史ノート(二二) 医学者としてのシーボルト 中西啓

長崎県医師会報 (三二六)一〇

長崎医学史ノート(二三) 桜井迪齋の西遊雜記 中西啓 長崎

県医師会報 (三二七)一二

長崎医学史ノート(二六) 石坂竿齋あてシーボルト書簡(二)

中西啓 長崎県医史会報 (三三〇)一四

長崎医学史ノート(二七)二八 対馬の神道医学 中西啓 長

崎県医師会報 (三三一)一一、(三三二)一四

長崎医学史ノート(二九) 貝原好古の医師観 中西啓 長崎

医師会報 (三三三)一八

長崎医学史ノート(三〇)三一 子の年の大風 中西啓 長崎

県医師会報 (三三四)一六、(三三五)一九

名古屋における医学史発達の歩み 吉川芳秋 東海医学史研究

会 二六

岡山県の蘭学者と遺跡 緒方富雄 医学のあゆみ 八六(一)

三六

長崎の出島 緒方富雄 医学のあゆみ 八七(五)二七四

幕末多摩医療史雜考 新藤恵久 日本歯科医師会雜誌 二五

(一〇)一〇七〇、一〇七一

在村蘭研究序説―三河を例に― 田崎哲郎 愛知大学文学会文

学論叢 第五〇輯

蘭学

新撰組と蘭方医 新藤恵久 蘭学研究報告 (二七二)五二、五

四

日本生物学史雜誌三〇 オランダ正月 木村陽二郎 高校理科

研究 六(一〇)四、六

竹山屯田蔵「クラームス蘭々辞典」原書(一八五五年ゴダ版)

蒲原宏 新潟医師会報 (二七六)

オランダ流の呼称について 越中哲也 蘭学研究報告 (二七

一)四、六

医学

賀茂海軍衛生学校 和田明二 日本医事新報 (二五五九)六三

、六五

明治初期の尾張医学史資料の二、三名古屋大学医学部の始源と偉

大な先人たち 吉川芳秋 保険診療 二八(一〇二八)五八

、六〇、(一〇二九)五八、六〇、(一〇三〇)九四、九六

仙台藩の医学学校 鎌田常郎 医海時報 (五九)三

須賀川医学学校と福島医学学校 小泉衡平 日本医事新報 (二五六

三)六六、六八

千葉大学医学部と医史学 大島蘭三郎 千葉医学会雜誌 四九

(二)一四八

日本大学歯学部の前身―東洋歯科医学専門学校第一回の学則につ

いて 鈴木勝・新国俊彦・谷津三雄・鈴木邦夫 日本歯科医

史学会誌 一(一)八一、八二

東洋歯科学校設立について血脇守之助へ送った佐藤運雄の手紙

今田見信 日本歯科医史学会誌 一(一)八三、八五

医学史の上からみた日本医科大学 小川鼎三 日医大誌 四〇

(一六) 二二〇二五

医学文化をたずねて 明治初期の医学教育 阿知波五郎 医海

時報 (五七五) 三

ヨーロッパの科学史医学史上の大学、研究所、博物館について

立川昭二 北里大学教養部紀要 (一六) 七三〇

各料史

本邦導尿カテーテルの始祖 大矢全節 日本医事新報 (二五五)

九) 一三九

静脈・皮下注射の始まり 大島蘭三郎 日本医事新報 (二五五)

九) 一三八〇一三九

日本整形外科の古典と資料(一) 骨継療治重宝記 蒲原宏 東

洋薬事報 一四(四) 四〇六

日本整形外科の古典と資料(II) 難波骨総秘伝と接骨秘伝書

薄原宏 東洋薬事報 一四(五) 一七〇一九

日本整形外科の古典と資料(III) 杏蔭齋正骨要訣 蒲原宏 東

洋医事報 一四(六) 七〇一九

日本整形外科の古典と資料(IV) 正骨範・正骨原・軍陣備用救急

摘方 蒲原宏 東洋薬事報 一四(七) 一七〇二〇

日本整形外科の古典と資料(V) 折肱要訣 蒲原宏 東洋薬事

報 一四(八) 一七〇一九

日本整形外科の古典と資料(VI) 整骨新書 薄原宏 東洋薬事

報 一四(九) 六〇九

日本整形外科の古典と資料(VII) 整骨範草稿 蒲原宏 東洋薬

事報 一四(一〇) 一七〇二〇

日本整形外科の古典と資料(VIII) 釣玄四科全書整骨篇 蒲原宏

東洋薬事報 一四(一一) 一七〇二〇

日本整形外科の古典と資料(IX) 整骨揆乱 蒲原宏 東洋薬事

報 一四(一二) 一七〇二〇

日本整形外科の古典と資料 遠西整骨規範 蒲原宏 東洋薬事

報 一五(一) 一八〇一九

外科技術の進歩からみた大正時代 林正秀 医学史研究 (四

〇) 四六八〇四七二

山上養貞(延年) 著脈法手引草 明和七年刊 蒲原宏 新潟県

医師会報 (二七八)

脈管学の今昔物語 西丸和義 広島医学 二六(四) 三六五

三七六

砂虱療治方 蒲原宏 新潟県医師会報 (二八三)

「糖尿病」という名称について わが国における由来と海外諸国

の現状 三村悟郎・福満昭二 Diabetes Journal 一(二) 四

二〇五四

「インスリン」創製当初の回顧 竹田正次 Diabetes Journal

一(二) 七八〇八一

インスリン発見五〇年の歩みと今後と展望 阿部正和 日本臨

牀 三二(七) 二一五八〇二一六〇

坂口食はどのようにして生れたか 村地悌二 Diabetes Journal

一(一) 三九〇四二

日常生活の中の神経学(一) いわゆるバリノー徴候を有する患者

の悩み 豊倉康夫 日本臨牀 三一(一)一九一〜一九三
 日常生活の中の神経学(二) 無名の古代作品から 豊倉康夫
 日本臨牀 三一(一)四二五〜四三一
 こわゆる Parinaud 症候群について 岩田誠・豊倉康夫 脳と
 神経 二四(一)一五三七〜一五四六
 西説内科撰要について 大滝紀雄・大島蘭三郎 蘭研研究報告
 (二七三) 一〜二
 橋本宗吉「西説産育手術全書」の原著 宮下三郎 大阪府立図
 書館紀要(九)二二二〜二二五
 二〇〇年前蘭学誕生―解体約図のこと 緒方富雄 日本歯科医
 史学会会誌 一(一)一〜一〇
 一九世紀の新潟県下における人屍剖検事績の概略 蒲原宏 県
 立ガンセンター新潟病院誌 一三(一)九三〜九八
 医学文化をたずねて 身体意識へのいとぐち 三輪史爾 医海
 時報(五九六)三
 体貌観測の歴史的考察 西大助 西医学 三六(五)三六〜四一
 医学用語の起こり 元氣と病氣 小川鼎三 Graef (三二)五
 和蘭全軀内外分合図について 酒井シヅ 蘭研研究報告(二七
 一)一〜三
 遠西医範と医範提綱 大島蘭三郎 蘭研研究報告(二七三)三
 二〇〇年前解体新書の原稿一応完成 緒方富雄 医学のあゆみ
 八四(九)五〇八
 微生物学における人体実験の記録 飯田広夫 メディヤサーク

ル 一八(一)一三〜一八、(二)六五〜六九、(三)一一二〜
 一一六、(四)二三〜二七、(五)一九八〜二〇三、(六)二四七
 〜二五二、(七)二八七〜二九三、(八)三四三〜三四七、(九)
 三七七〜三八三、(一〇)四一七〜四二二、(一一)四四四〜四
 五〇、(一二)四八九〜四九四
 瘡癩神について 関根邦之助 日本歴史(三〇二)一一〇〜
 一二七
 わが国予防医学の起点描いたアイヌ種痘図、肉筆と版画の関係
 中野操 日経メディカル 二(五)二二〇〜二二二
 歯学史
 近代歯科学の先駆者上村泉三について 杉本茂春 医譚(復刊
 四五)二七四〜二七七九
 智歯の訳者について 山田平太 日本歯科医史学会会誌 一
 (一)七六
 アメリカ小児歯科界の長老たち 上原進 日本歯科医史学会会
 誌 一(二)五八〜七一
 「願懸重宝記」にみられる歯科の迷信、俗信 鈴木勝・新国俊
 彦・谷津三雄・鈴木邦夫 日本歯科医史学会会誌 一(二)五
 五〜五七
 「よはい草」を読んで、その内容の検討 鈴木勝・新国俊彦・
 谷津三雄・鈴木邦夫 日本歯科医史学会会誌 一(二)一五一
 〜一五四
 口腔領域における民間療法 一、民間関係 黒須一夫・桜井達
 也 日本歯科医史学会会誌 一(一)四七〜五〇

核歯の一方とその源流 取歯、打牙、齧歯の相互關係 杉本

茂春 日本齒科医史学会誌 (一) 一一〜一七

薬学史

中村惕齋の訓蒙図彙について 木村陽二郎 東京大学教養学部

教養学科紀要 (五) 一〇五〜一三一

植物性薬品開発の歴史 宗田一 代謝、臨時増刊号『和漢薬』

五三〜五四

粟罌殻について 宮三郎 漢方の臨床 二〇(五) 二四五〜二

四八

日本製薬史稿(その二)―Ⅱ西欧医学の伝来と製薬の新展開(二)―

宗田一 医学史研究 (四〇) 四八二〜四八九

動物への薬品応用の始まり 佐藤仁太郎 日本獣医学研究会報

(二) 一一

獣医学史

日本陸軍獣医教育体制の特異性と連帯性 白崎平司 日本獣医

史学研究会報 (三) 一一〜九

陸軍獣医学資料館について 広江巖・新田鉄雄 日本獣医史学

研究会報 (三) 一〇〜一六

蘭方獣医学について(第一章) 坂本勇 日本獣医史学研究会報

(二) 一九〜二一

獣医学の仏教・医学との関連(序説)(抄) 篠永紫門 日本獣医

史学研究会報 (三) 一七〜一九

看護史

看護婦カーベルの事績と故郷を尋ねて 蒲原宏 看護教育 一

四(八) 五二三〜五二八

本邦近代看護史補遺 長門谷洋治 日生病院医学雑誌 一(二) 九七〜一〇四

風俗史

「川柳医療風俗史」補遺 山本成之助 日本医事新報 (二) 五

九) 七三〜七四、(二) 五五〇) 七三〜七四

続・医療風俗史(二) (七) 山本成之助 日本医事新報 (二) 五

六四) 六七〜六八、(二) 五六六) 六二、(二) 五六七) 七一、(二)

五七八) 六六〜六七、(二) 五八〇) 六五〜六六、(二) 五八二) 六

四〜六七、(二) 五八二) 六三、(二) 五八三) 六五〜六六、(二) 五

八四) 七〇、(二) 五八六) 六三〜六六

学会

戦後日本医師会史の時代区分 野村拓 医学史研究 (四) 一

五三三〜五三四

日本伝染病学会―半世紀のあゆみ(その一、その二・完) 熊谷

謙三郎 日本臨床 三一(九) 二八六四〜二八六七

第二三回国際医史学会見聞記―イングランド医史学的散歩―

蒲原宏 MINOPHAGEN MEDICAL REVIEW 一八 一二六

〜一三二、一九一〜一九六

第二三回国際医史学会総会に出席して 本間邦則 日本齒科医

史学会会誌 一(一) 七二〜七四

その他

村上藩医五十嵐又磧筆ヒボクラテス像 蒲原宏 新潟県医師会

報 (二) 七七

桂川甫賢筆ヒボクラテス像 蒲原宏 新潟県医師会報 (二七九)

島津圭斎筆ヒボクラテス像 蒲原宏 新潟県医師会報 (二七五)

狩野守尚筆神農像 蒲原宏 新潟県医師会報 (二七四)

上野公園一〇〇年 緒方富雄 医学のあゆみ 八七(六) 三二六

江戸史蹟「道三堀・道三橋」について 矢数道明 日本医事新報 (二五五四)七〇~七十一

ロードス島の医学遺跡 蒲原宏 医学のあゆみ 八七(五) 二七九~二八二

蘭学者の遺跡を訪ねて 樋口宏 蘭研研究報告 (二六九)

ロンドン医学史案内 阿知波五郎 医学のあゆみ 八五(二) 八〇~八二

渡部重雄氏蔵「六老之図」(田家茶話) 蒲原宏 新潟県医師会報 (二八一)

温知社幹部次韻の「仙桃集」について 矢数道明 漢方の臨床 二〇(七) 三六九~三七七

「医学中央雑誌」の七〇年 日本医師会雑誌 七〇(一一) 三二五~三二六

メディカル・フィラテリーと初期の医学切手(一)~(三) 古川明 医学のあゆみ 八四(一一) 六五〇~六五四、八五(四) 二六四~二六六、八五(七) 四五五~四五七

G. H. Armauer Hansen の癩菌発見一〇〇年記念切手 (ノルウェー)

1) 緒方富雄 医学のあゆみ 八五(九) 五三八

心臓月間記念切手(メキシコ) 緒方富雄 医学のあゆみ 八四(一) 三〇

偉大なる医人の古郵便切手 保坂孝雄 日本医事新報 (二五五) 六七

大矢真一著『日本科学史散步 江戸期の科学者たち』中央公論社、一九七四年六月、B6版、二五四頁、一二五〇円

江戸時代後半に輩出した多くの科学者がのこした数々の業績は現今の日本の科学の基礎となっているものがすくなくない。本書は前に著者が雑誌『自然』に連載されたものをまとめたものに、さらに何編かを加え、『自然選書』の一冊として出されたものである。

和算家毛利重能から佐久間象山に至る三十人について、それぞれの履歴、業績をあげ、それに各人の墓、(墓のない、または不明の人は記念碑)のことを説明している。私がこの本について特に感銘を覚えるのは、大矢さん自身がこれらの墓にいちいち参詣されたところを、さり気なく、さらりと書いておられることである。ほとんど日本全国といってもよい程の各地を廻られた大矢さんは、私どもの先輩に対して、深い深い敬慕の念を抱いておられるにちがいないのである。

全編三十編のうち半数近くを医者が占めており、それらの墓が案内図がついて、分かり易く説明されている。但しそれ等の案内図の多くが方角を示していないのは余りいただけないが、いかにも「方向オンチ」と自称する大矢さんらしくて、かえってほほえましい。(大島蘭三郎)

「テキストを吟味して正しいものを使わない限り、中国医学の古典について論ずる資格はない」。これが故岡西為人博士の持論であった。事実博士の主宰された古典の講読は必ず序文を詳しく読むことから始まった。これを読めばそのテキストの経歴が大体わかるからであるが、これは本文とは別の意味で難解であり、初学者には理解することが困難な場合が多い。といっても長年月の間に多くの系列を生じてしまった医薬学書の全体について論じた書もほとんど皆無の状態、僅かに多紀元胤の『医籍考』と岡西博士の『宋以前医籍考』の二大名著があるだけであるが、両書共に入手困難であるし、その上少数の専門家以外には使いこなすことはむづかしい。

『中国医書本草考』は森立之の『本草経集注』の復原稿本の影印作業の進行中に南大阪印刷センターの山田正氏から出された「中国医学古典研究の手引き書」という要望に応えて計画されたものときいているが、博士の生涯の論文の中から医薬書についての解説的なるものを取り出し、それに若干の未発表の論文を加えたものである。この書は博士の遺著となつてしまつたが、それは校正その他に時間がかつたためであつて、論文の取捨選択はすべて著者自身の手によつて行われ、逝去の時には初校が進行中であつた。

著者には昭和四十三年頃に『中国医書及本草書誌』という書を

まとめる計画があった。その内容は今回の書の出版案内として用いた南大阪印刷センターの『グラフィカ』一六号に私が紹介しておいたその冒頭部分の草稿と目録からわかるように『宋以前医籍考』の例に倣って、中国の主要な医業書を分類して配列したもので、大著になる筈であったが、どういふ理由からかその計画は中止されてしまった。現在草稿も残っていないところからみると、恐らく構想のまままで終ってしまったものであろう。

『中国医書本草考』は論文集ということもあるが、このような整然とした配列はとらず、一、二、三章で医書を、五章で本草書を取上げ、四章では宋代と江戸末期の医書校勘を中心とした書誌学の問題に触れている。第六章は陳存仁氏の『中国針灸沿革史』の訳文であるが、著者の主要な関心が前五章にあったことは明らかである。医書については一章を『素問』、『靈樞』、『傷寒論』等の主要な医書の、二章を『千金方』等の医学全書の解説にあて、各書の来歴から刊本まで挙げて詳しく説明してある。この一、二章が書籍別であるのに対して、三章が金元の医家別になっているのは、この時代の書とされいるものについては問題点が多く検討も不十分であるという著者の姿勢を示すものである。医書にくらべて本草書についての記載はやや簡単であるが、これは近く刊行予定の『本草概説』に譲ったのであろう。

他の分野と同様にこの分野においても近年新出の資料や論文があるが、著者は自らの目で確かめない限り取り挙げないという信条を持っていたため、この書ではそれらには触れられていない。又論文集であるため文体に違いがあり、各処に重複が認められる。

更にこれは出版者が独断で進めてしまったことであるが、隷書体の活字を使用したために慣れない人にとっては少し読みにくいかもしれない。このような小さな問題点はいくつかあるが、長年月に亘って各方面の雑誌に投稿された論文がまとめられて、信頼のできる解説書ができ上ったことは、これらの雑誌の中には現在目に触れにくいものが多いだけに、中国医学古典を扱う者にとっては甚だ好都合で、座右に置いて活用すべき書籍である。

弔 報

評議員金城清松氏逝去される

本学会の評議員で、最年長者であられた金城氏は去る九月九日に満九十四才と二十日の生涯を終えられた。氏は琉球医学史の權威であり、亡くなる直前までその執筆に従事し、その年表と琉球医学史がいずれ出版される予定であると聞く。

金城氏の著作ですでに出版になったもの一つに『琉球の種痘』があるが、その末尾に氏の年譜がある。そのなかから主なところを拾い、読者に伝えて氏のご冥福を祈りたい。

明治十二年八月 沖縄県国頭郡大宜味村字喜如嘉に生れる。

明治三十三年四月 沖縄県医生教習所を首席で卒業。

明治三十四年～三十七年 大阪私立石神伝染病研究所で細菌学を研究。

明治三十七年～昭和二十年 那覇市下泉町にて内科、特に呼吸器専門で開業。

明治四十四年 那覇市外泊後原に結核サナトリウム白山療養園

を設立。

大正三年 共立銀行取締役を選任される。

大正六年 沖繩結核予防会を創立。

大正八年 産業銀行取締役を選任され、つづいて農工銀行取締役となり、大正十一年には農工銀行と日本勸業銀行の合併により、

日本銀行地方顧問となる。

昭和九年 沖繩奨学会を設立。

昭和二十年 沖繩戦直前に鹿児島に移る。

昭和二十六年 沖繩に帰郷し、翌年から三十二年まで那覇市牧志町に開業。その頃より医学史の研究に着手し、昭和三十八年に

前記の『琉球の種痘』が出版された。

氏の晩年はずっと四女秋子氏の嫁ぎ先（東京都三鷹市下連雀町三―三―一―三 又吉康哉）で琉球医学史の完成に力を注がれた。

会 報

三浦医学研究振興財団より 日本医史学会に助成金でる

三浦義一氏の私財提供により生れた財団法人三浦医学研究振興財団より、本学会に本誌の刊行に対し本年度も三十五万円の助成金が出された。三浦医学研究振興会の趣旨を再びここに載せて感謝の意を表す。

財団法人三浦医学研究振興財団設立趣意書

最近における医学および医療技術の長足なる進歩は、まことに

目ざましいものがあり、種々の疾病の本態が明らかにされたり、治療の面に於て飛躍的發展がもたらされたことも数多いことは明らかであり、種々の疾病の死亡率に著しい低下の見られたことは、多くの人の知る通りである。

しかしまた一方では、慢性、難治性の疾患のために長期療養を強いられる患者の数は、むしろ増加の傾向にあり、さらに進歩した医療技術を応用してもなお不治とされている疾病も多く、また逆に、今日の複雑なる社会機構、特に大都市に於ける異常なる生活のために、新たに種々の疾病を発生させる傾向すらも認められる。これらの種々の疾病の犠牲となった患者の悲惨な状態は、誠に由々しき問題である。

このような状態を見ると、わが国における医学の研究は、特にその病源に肉迫する底の基礎研究を重視し、その病根を追究した上での新しい医療技術を開発することが、極めて緊急かつ重要な課題であろう。

此の観点よりすれば、従来わが国に於ける医学の研究は、欧米の先進諸国に較べて十分とはいえない難点が多いことも事実であり、とくに諸外国に於ける研究成果を十分に取り入れながら、日本国民のための医学をさらに発展させることの必要性も強く感ぜられる。そしてこのことには研究費不足の隘路ということが大きな要素となっていることも否定できない事実である。

わが国に於ける医療の研究や医療技術の開発に對する諸経費については、公的機関よりの年度予算によるものが中心となっているが、この予算が常に不足勝ちであり、重要緊急なる研究が意

の如く進まないのが実情である。これを解決するためには、この予算の増額を希ふばかりでなく、多少にかかわらず広く民間一般よりの援助が必要であることは明瞭である。

以上のことを要約すると次のようになる。

1 近代医学、医療技術は長足の進歩をとげてはいるが、なお未解決の点が多く、国民の健康という面からも、急速に、かつ広範囲にわたる基礎的研究が必要である。

2 このためには、関係各機関が、公私あらゆる面でこれを助成し研究を振興し促進することが必要である。

3 これらの医学の研究、医療技術の開発に対する諸経費の不足を補い、援助を与えて日本国民の健康の保持と疾病の予防治療をより完全なものにするためには、いわゆる官民一体となつて、その実をあげることが望ましい。

財団法人三浦医学研究振興財団は、以上のような目的を達成するためにつくられたものであるが、その設立の提案者である三浦義一氏は昭和45年満72才を過ぎてはいるが、少年期より種々の病に罹りつつもこれを克服し、壮年期には脊髄疾患のため一時歩行困難とさえなるほど、多年にわたり、疾病の悲惨さ、健康の貴重さを自ら体験し、医学が如何に人間の生活に重要な意味を持つべきを具に経験し、医学の研究、医療技術の発展に重大な関心を払つていた。

今回、売財一億七千万円を提供して、ここに財団法人三浦医学研究振興財団の設立を發起するのも、いささかにせよ、医学の研

究、医療技術の開発に寄与して、わが国民の福祉に役立てたいという趣旨からである。幸いにして、わが国のすぐれた研究者による医学の研究の一助ともなればと祈念してやまないものである。

なお、氏は、さきに郷里大分県に、県立図書館を建設寄贈し、又荒廃に瀕した史跡義仲寺を独力にて復興する等、社会事業に多大の貢献をなしたることを附記しておく。

日本医史学雑誌二〇巻総目録

一号

第七四回日本医史学会総会

渡来百五十年記念シーボルト顕彰記念会特別講演

シーボルトと門人……………緒方 富雄……………一

Anatomia Reformata. The Dutch Handbook

of Anatomy from the Baroque Period; the

Contents and Presentation

……………A. M. LUYENDIJK-ELSHOUT……………108

シンポジウム：医師としてのシーボルト

シーボルトの処方……………小川 鼎三……………四〇

画家の眼を開いたシーボルト……………兼重 護……………四六

シーボルトと長州……………田中 助一……………五三

シーボルトの治療法……………中野 操……………五九

蘭学史におけるシーボルトの役割……………沼田 次郎……………六四

医師としてのシーボルト……………山形 敏一……………七一

日本眼科史上のシーボルト……………福島 義一……………七六

雑報…………………………八六

二号

原著

慶長年間の医家肖像二点の考案……………小川 鼎三……………一〇五

江馬塾における「扶氏経験遺訓」の需要（上）……………片桐 一男……………一七

江戸時代における西欧遺伝学の受容と紹介：矢部 一郎……………一三五
「唐律令」および「養老律令」における有疾獄囚の待遇について……………新村 拓……………一三〇

西説内科撰要について（四）……………大滝 紀雄……………一四一

絵巻物に描かれた日本の医療……………樋口誠太郎……………一五三

吉益東洞と賀川玄悦……………

―鎮帯・座椅の禁をめぐって―（英文）……………大塚 恭男……………一六九

寄書

ポール・ストラティン医学史博物館長ヘルタ・ハンセン館長の死を悼んで……………松本 明知……………一六四

史料

浅井家文書（一）……………竹内 孝一……………一六六

堀内文書の研究（十）……………片桐 一男……………一七四

例会記事……………大塚 恭男……………一八四

脚気病院とその後…………………………一八五

雑…………………………

三号

第七十五回 日本医史学会総会

第十六回 蘭学資料研究会大会

研究発表合同集会……………酒井 シツ……………一九九

「解体新書」の「西説内科撰要」に及ぼした影響……………大滝 紀雄……………二〇一

解体新書読書の語学的考察……………佐藤 良雄……………二〇三

解体新書と越後の国……………蒲原 宏……………二〇五

佐々木中沢の解剖と「解体新書」……………山形 敏一…二〇七
 解体新書と家畜関係書について……………松尾 信一…二〇六
 八王子で発見された「解体新書」……………新藤 恵久…二〇〇
 毎年三月四日観臟記念に行われた「医家先哲追
 薦会」と富士川先生作歌琵琶「蘭学創始」に
 ついて……………赤松 金芳…二二二
 オランダ航海表……………大矢 全節…二二三
 栗山孝庵と杉田玄白及び小田野直武……………田中 助一…二二三
 「前野良沢」寸考……………末中 哲夫…二三四
 小塚原と山谷との管見……………関根 正雄…二三五
 蘭学事始の研究……………内山 孝一…二二七
 クルムス解剖書の脚注と「重訂解体新書」……………大島蘭三郎…二二〇
 いわゆるターヘル・アナトミアについて(その
 三)序文……………酒井 恒…二二二

解体新書発刊年時フランスに於いて陶歯創造に
 着手その後の経緯について……………瀬戸 俊一…二二五
 解体新書出版後の利用……………石原 明…二二五
 享保十四年の蘭書和解「西説伯楽必携」につい
 て……………坂本 勇…二二七
 小浜における杉田、中川家の新資料

原 著

『遠西医範』と『医範提綱』(一)……………大島蘭三郎…二二三
 越後の蘭方医森田兄弟について(一)……………長谷川一夫…二二四

一資料から見た科学者シーボルト……………矢部 一郎…二九六
 江馬塾における「扶氏経験遺訓」の需要(下)
 ………………片桐 一男…二九六
 西説内科撰要について(五)……………大滝 紀雄…二九六
 例会記事……………二九〇
 雑報……………二八一

原 著

四号
 レンブラントの名画「トールプとデーマンの解
 剖学講義」……………古川 明…二九六
 庶民史料にみる江戸時代の疾病……………立川 昭二…二二三
 医療及び保健衛生面における検査技術者の歴史
 ………………谷島 清郎…二二六
 俳句の季語に投影している本草綱目の薬物文化
 ………………三浦 三郎…二七七

咒禁師及び按摩師について(七)……………新村 拓…二二五
 越後の蘭方医森田兄弟について(二)……………長谷川一夫…二二四
 Die Beziehungen Japans zur europaischen
 Medizin im 18. Jahrhundert……………Heinz Goerke…二二二

資 料

伴道与法眼栄藩の家系とその子孫……………伴 七三雄…二七〇
 昭和48年医史学関係論文目録……………二七六
 雑報……………二九〇

日本医史学会々則

第一条 本会は日本医史学会と称する。

第二条 本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかす。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展覧などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係學術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条 本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条 会員は会費として年額三〇〇〇円を前納する。入会者は一〇〇〇円を納入する。ただし外国に居住

する会員は年額一五ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条 本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、

幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は会員より理事長が任命する。

六、役員任期は二年とし重任を妨げない。(ただし会長を除く)

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 評議員は若干名とし、普通会员の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内(東京都文京区本郷二の一の一)に置く。

第九条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十条 会則の変更は総会の承認を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発刊期日 年四回(一月、四月、七月、十月)末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名

を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

著者負担 表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で五

印刷ページ(四百字原稿用紙で大体十二枚)までは無料とし、それを越えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校正 原著については初校を著者校正とし、二校以後

は編集部にて行なう。

別刷 別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先 東京都文京区本郷二丁目一の一、順天堂大学

医学部医史学研究室内 日本医史学会

編集委員 大島蘭三郎、大塚恭男、藏方宏昌、酒井シツ、樋口誠

太郎、室賀昭三、矢部一郎、矢数圭堂

編集顧問 小川鼎三、A・W・ピーターソン

日本医史学会役員氏名(五十音順)

理事長 小川 鼎三
 常任理事 緒方 富雄
 常任理事 石原 明
 大島蘭三郎
 会計監事 宗田 一

理事 赤松 金芳 阿知波五郎 石川 光昭
 今田 見信 内山 孝一 大塚 敬節
 大矢 金節 緒方 富雄 蒲原 宏
 佐藤 美勝 杉 靖三郎 鈴木 正夫
 鈴木 勝 宗田 一 津崎 孝道
 戸苅近太郎 中野 操 三木 栄
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系

幹事 大塚 恭男 酒井 シツ 杉田 暉道
 谷津 三雄

日本医史学会評議員氏名(五十音順)

赤松 金芳 安芸 基雄 阿知波五郎
 青木 一郎 石原 明 石田 憲吾
 石川 光昭 石原 力 今市 正義
 今田 見信 岩治 勇一 内山 孝一
 大島蘭三郎 大塚 敬節 大塚 恭男
 王丸 勇 大矢 全節 緒方 富雄
 小川 鼎三 大滝 紀雄 葦島 四郎
 片桐 一男 川島 恂二 蒲原 宏

久志本常孝 神原悠紀田郎 酒井 シツ
 酒井 恒 佐藤 美実 清水藤太郎
 杉 靖三郎 杉田 暉道 鈴木 正夫
 鈴木 勝 鈴木 宜民 瀬戸 俊一
 関根 正雄 宗田 一 高木圭二郎
 高山 担三 田中 助一 津崎 孝道
 津田 進三 筒井 正弘 土屋 重朗
 戸苅近太郎 中泉 行正 中川 米造
 中沢 修 中西 啓 中山 沃
 長門谷洋治 中野 操 服部 敏良
 福島 義一 藤野恒三郎 本間 邦則
 富士川英郎 古川 明 丸山 博
 松木 明知 三浦 豊彦 三木 栄
 三廻 俊一 谷津 三雄 山形 徹一
 矢数 道明 山下 喜明 山田 光胤
 安井 広 吉岡 博人 和田 正系
 以上

文部省科学研究費補助金(學術定期刊行物)の交付決定

本年度も本誌の刊行に關して補助金二五万円が交付されることが文部省より通知された。

編集後記

今年には解体新書出版二百年ということ、華々しく行事がくりあげられた上に、去る十月二十六日は先に回向院前の道路拡張のために移築を余儀なくされていた観藏

記念碑を本堂の下の広場に移して、その除幕式を行うなど行事が重なり、あつという間に歳月がたつてしまつた。

本号は通巻一三九八号を数えるが、これは明治十三年、中外医事新報と題して発行された第一号から数えているものである。その間、医学界の動向の波を受け、幾多の変遷を経ているものの、こうして続いていく、来年はより一層の発展を願うものである。

昭和四十九年十月二十五日 印刷
 昭和四十九年十月三十日 発行

日本医史学雑誌

第二十卷 四号

編集者代表 大島 蘭 三郎

発行者 日本医史学会
 代表 小川 鼎三

〒二三 東京都文京区本郷二一

順天堂大学医学部医史学

研究室内

振替 東京 一五二五〇番

製作協力者 金原出版株式会社

〒二三 東京都文京区

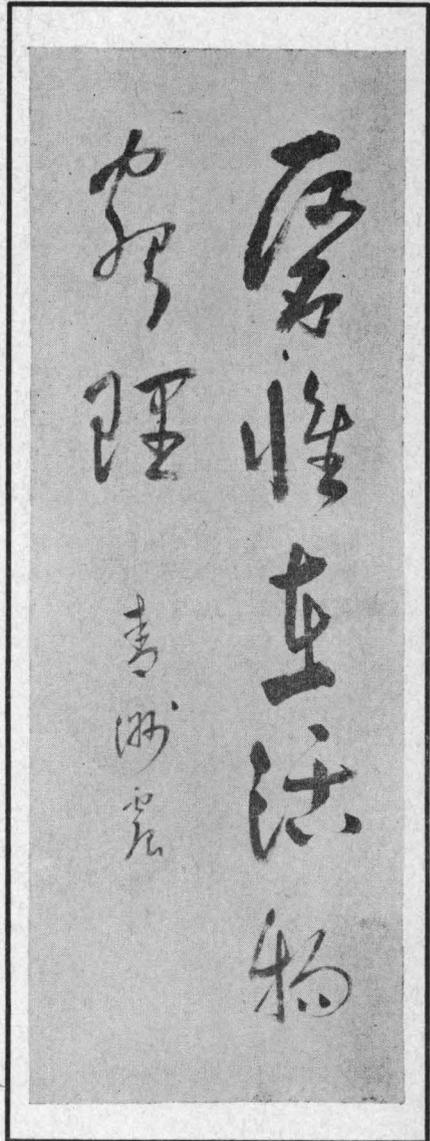
医学文化保存会

〒二三 湯島三三二一四

印刷者 五協印刷有限公司

〒一五 東京都板橋区

南常盤台二二三



華岡青洲書

医惟在活物窮理

青洲震

巧芸版・絹本軸装 (115×42.5 cm)
桐箱入・緒方富雄先生箱書

限定五〇〇部

定価四〇、〇〇〇円 (送料他)
(五〇〇円)

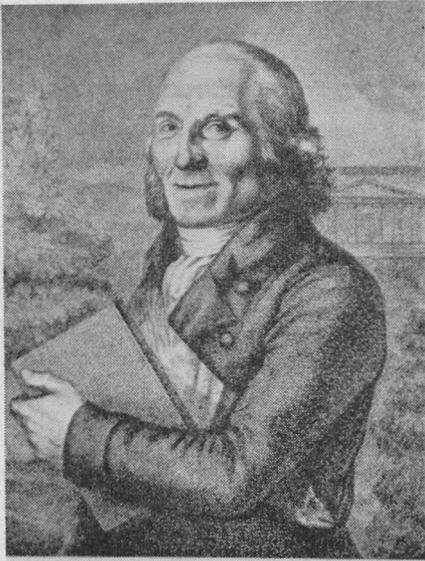
● 解説

緒方 富雄

「活物」とは「生体」のこと。「窮理」とは「探究」研究のことである。「活物窮理」とは生体について研究、探究することである。世界にさきがけて、一八〇五年以来全身麻醉下に乳癌その他の大手術により成績をあげ、世界の近代外科の先驅となった華岡青洲(一七六〇—一八三三)は、「活物窮理」を外科医としての生命をかけた信案とした。いまなら当然のこととおもえるが、その知見のほぼしかった当時、青洲が先入観を排して、これを強く主張したのは、たいした見識である。青洲の画期的な成功の秘訣もここにあったといふべきであろう。質と量との差こそあれ、青洲の「医惟在活物窮理」は、今日でもあじわうべき名言である。

青洲は書家としてもその名が高く、ことにその草書は自由自在で見事である。ここに複製した一冊もその一つである。原品は絹本であつて、絹本でなければ出ない味をたえているので、原品にある大きな染みを製版の過程で取り除いて仕上げた。落款にある歳は、青洲の名である。また三代随賢を稱した。(二代華岡青洲氏藏)

売捌所／株式会社金原商店 製作所／財団法人日本医学文化保存会



CARL PETER THUNBERG

Kopparstik af J. G. Ruckman 1818 efter Der Kræftt d. y:s målning 1608
(i Med. fak., Uppsala).

Abb. 16 Porträt Carl Peter Thunberg



Abb. 17 Grabdenkmal Philipp Franz
von Siebold in München

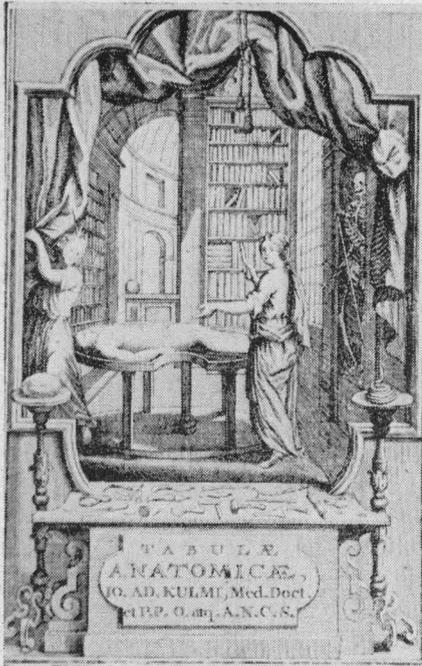


Abb. 12 Titelbild, Augsburg 1740

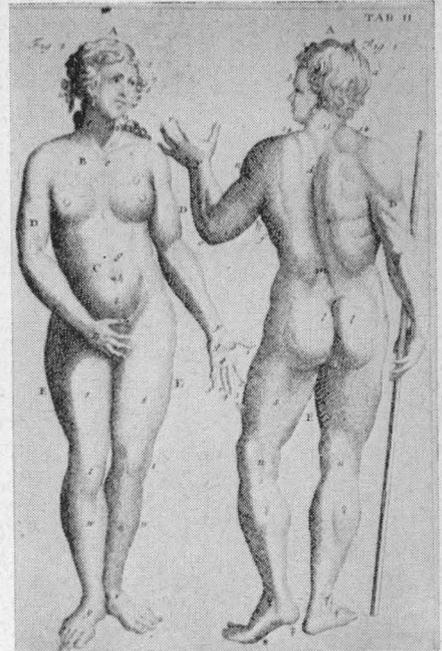


Abb. 13 Tabelle II, Auflage Augsburg 1740

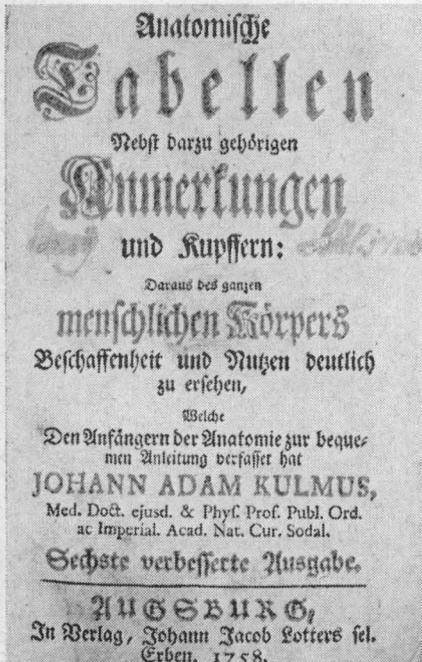


Abb. 14 Titelblatt, Auflage Augsburg 1758



Abb. 15 Titelblatt, Auflage Leipzig 1789

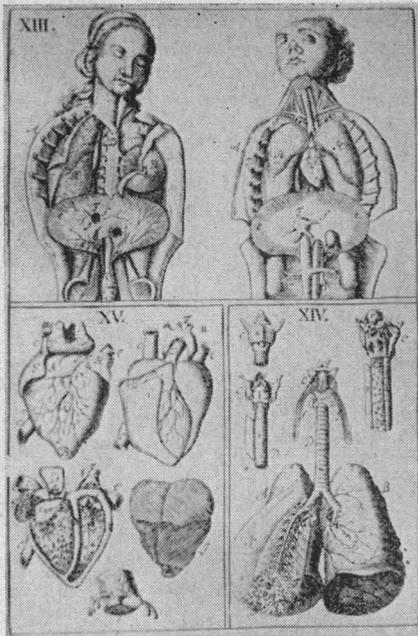


Abb. 8 Tabelle XIII-XV, 1. Auflage

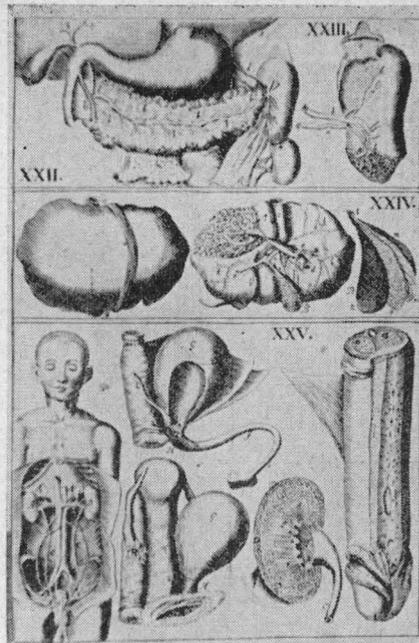


Abb. 9 Tabelle XXIII-XXV, 1. Auflage

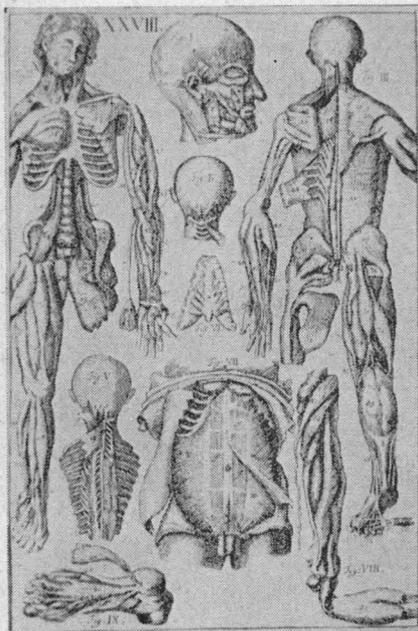


Abb. 10 Tabelle XXVIII, 1. Auflage

Anatomische
Tabellen/
 Nebst dazu gehörigen
Anmerkungen
 und Kupfern/
 Darauß des gantzen
Menschlichen Körpers
 Beschaffenheit und Nutzen deutlich
 zu ersehen, *Witte*
 Den Anfängern der Anatomie zu beque-
 mer Anleitung verfaßt hat
JOHANN ADAM KULMUS,
 Med. Doct. ejusd. & Phys. Prof. Publ. ord.
 ac Imperial. Acad. Nat. Cur. Sodal.
Vierte Auflage/
 Viel vermehrt, und mit neuen Kupfern
 versehen.
AUGSBURG,
 Drucks und verlegt Johann Jacob Lotters sel.
 Erben. 1740.

bb. 11 Titelblatt, Auflage Augsburg 1740

Anatomische Tabellen/

Daraus des
ganzen Menschlichen Körpers
 und aller dazu gehörigen Theile
 Beschaffenheit und Nutzen deutlich zu ersehen,
 Wie solche
 Denen Anfängern der ANATOMIE
 Zu bequemer Anlesung
 Nebst dazu gehörigen Kupffern
 Best. set hat

Johann Adam Kulmus /

Med. Doct. & Acad. Nat.

Cur. Collega.



Zu finden in DANZIG, bey
CORNELIUS von Neugem.

1722.



Abb. 4 Tabellen von Kulmus, 1. Auflage
 Danzig 1722

Abb. 5 Titelbild, 1. Auflage

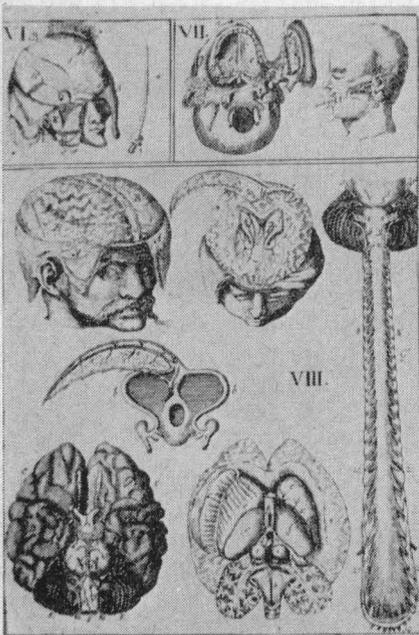


Abb. 6 Tabelle VI-VIII, 1. Auflage

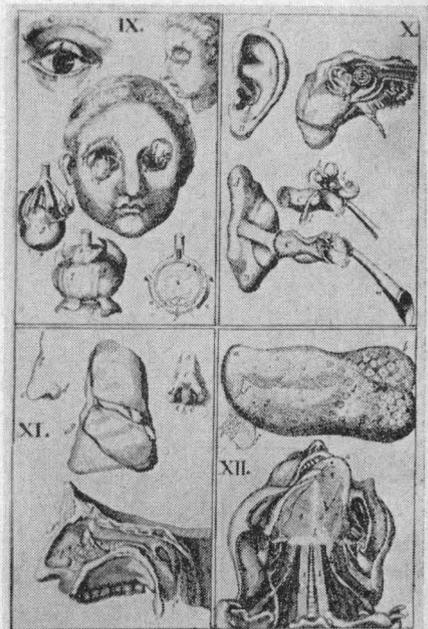


Abb. 7 Tabelle IX-XII, 1. Auflage

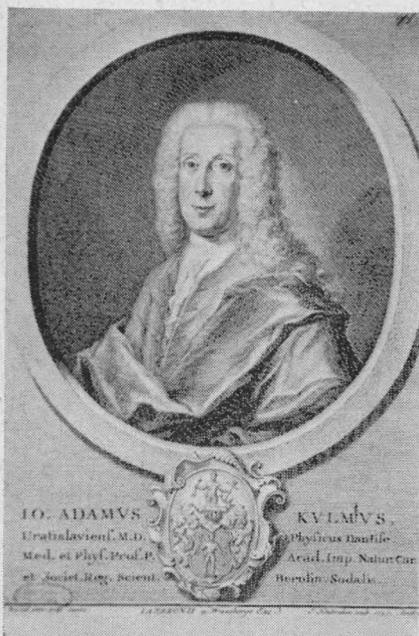


Abb. 1 Porträt Johann Adam Kulmus
(Kupferstich von J. Houbraken)

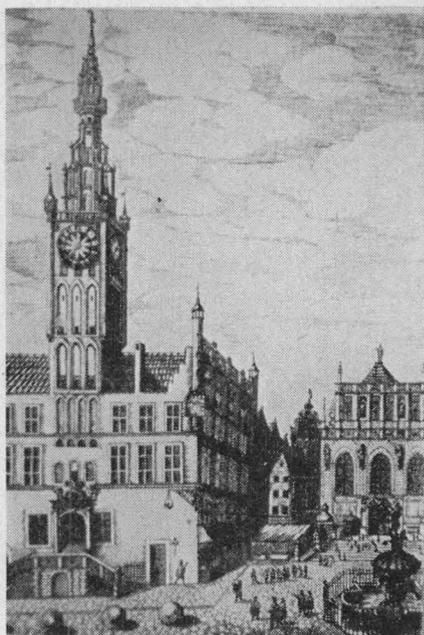


Abb. 2 Danzig, Rathaus zur Zeit
von Kulmus



Abb. 3 Plan der Hansestädte, Hanse war eine mächtige Vereinigung
von Handelsstädten im Mittelalter, bestand bis 18. Jahrhundert.

Deutschland ein Teil des großen und faszinierenden Prozesses ist, durch den mühsam über Jahrhunderte und noch fortdauernd eine Weltmedizin entsteht. An ihr hat Japan mit seinem Ärzten einen großen Anteil, die Medizin unserer Gegenwart kann man sich ohne die Medizin dieses Landes nicht mehr vorstellen.

[Dieser Vortrag wurde zum 200-jährigen Jubiläum der Publikation des "Kaitai-shinsho" am 17. August 1974 in Tokyo gehalten.

Anschrift des Verfassers :

Prof. Dr. Dr. h. c. Heinz Goerke, Direktor des Instituts für Geschichte der Medizin der Ludwig-Maximilians-Universität München, D-8000 München, Pettenkoferstr. 35]

Tokyo zu entsenden. Der besondere Ruf der deutschen Medizin und wohl auch die Nachwirkung der Leistungen Philipp Franz v. Siebolds hatten diese auf höchster politischer Ebene vorgetragene Bitte veranlaßt. Infolge des Deutsch-französischen Krieges verzögerte sich die Ankunft der beiden ersten Lehrer der Medizin, des Chirurgen Dr. Leopold Müller und des Internisten Dr. Theodor Hoffmann, beides preußische Militärärzte. Im August 1871 trafen sie in Tokyo ein. Der wichtige Nachfolger von Dr. Müller war Dr. Julius Scriba. Als Nachfolger von Dr. Hoffmann kam 1873 Dr. Agathon Wernich, der 1876 durch Erwin Baelz (1848—1913) abgelöst wurde. Baelz, geboren in Bietigheim bei Stuttgart, hat 29 Jahre in Japan gewirkt und in ganz besonderem Maße zu den guten Beziehungen beigetragen, die sich zwischen der japanischen und der deutschen Medizin entwickelt haben. Der Name Erwin Baelz ist zu einem Symbol für die engen persönlichen und menschlichen Verbindungen der Ärzte beider Länder geworden. Seit dieser Zeit haben die guten Beziehungen sich immer wieder bewährt. Dem Historiker der Medizin fällt es nicht schwer Namen zu nennen, die dies bestätigen. Man denkt an Professor Shibasaburo Kitasato (1852—1931), den genialen Mitarbeiter Robert Kochs, der selbst im Jahre 1908 zwei Monate hier als Besucher gewesen ist. Als Kliniker und Krankenhausleiter kann ich die engen Verbindungen auch für die Gegenwart nur bestätigen. Die Zahl der Kollegen aus Japan, Professoren, Ärzte und Medizinstudenten, die ich selbst als Gäste in Deutschland sowohl in Berlin wie in München begrüßen durfte, ist groß. Mehrere der heute hier anwesenden Herren gehören dazu, die wiederzusehen mir eine hohe Ehre und besondere Freude ist. Aber auch umgekehrt ist die Zahl der deutschen Ärzte in den letzten Jahren größer und größer geworden, die nach Japan kommen, um hier die vorbildlichen Einrichtungen für Forschung und Krankenbehandlung kennenzulernen, an Kongressen teilzunehmen, Freunde zu treffen und Erfahrungen auszutauschen.

Zieht man auf diese Weise die Linie der historischen Betrachtung bis in die Gegenwart, dann erkennt man, daß diese Entwicklung der medizinischen Beziehungen zwischen Japan und Europa und vor allem auch

Bilder nach besonderer Liste (Abb. 1~Abb. 17)

Ich habe bereits den Namen eines deutschen Arztes genannt, der gegen Ende des 17. Jahrhunderts nach Japan kam und sich zwei Jahre dort aufhielt, auch im Dienste der Holl.-Ostindischen Kompanie :

Engelbert Kaempfer (1651—1716). Kaempfer hat zweimal an der Reise nach Jedo teilgenommen zur Audienz bei Hofe und zur Übergabe der Geschenke der Kompanie an den Shogun. Kaempfer ist 1693 nach Holland zurückgekehrt, hat dort die Doktorwürde erworben und sich dann in seiner Vaterstadt Lemgo niedergelassen. Seine ärztl. Praxis nahm ihn bald so sehr in Anspruch, daß er die Bearbeitung seiner Aufzeichnungen nicht mehr vollenden konnte. Er starb am 24. Oktober 1716. Glücklicherweise wurden seine Sammlungen und Manuskripte für das Britische Museum angekauft. Seine Reisebeschreibung erschien zuerst in englischer Übersetzung 1727, in französischer 1729 und erst 1774 in der deutschen Originalfassung.

Der dritte für Japan bedeutende Arzt, der als holländischer Gesandtschaftsarzt im Dienste der Holländisch-Indischen Kompanie nach Japan kam, war Philipp Franz von Siebold (1796—1866), der einer bedeutenden deutschen Ärztfamilie entstammte. Siebold trat 1822 in die Dienste der Holländisch-Ostindischen Kompanie, wurde als Arzt und Naturforscher nach Japan entsandt. Im Jahre 1829 ist er aus Japan verwiesen worden, da man ihn des Landesverrats verdächtigte. In den Jahren 1832 bis 1853 hat er in mehreren großen Werken die Ergebnisse seiner Forschungen veröffentlicht. Siebold hat einen noch wesentlich größeren Schülerkreis als Thunberg gehabt und auch engere Verbindungen zu den Ärzten des Landes gewinnen können. Er hat sich auch sehr eingehend mit den traditionellen japanischen Heilverfahren beschäftigt. Erst 1859 durfte er Japan wieder aufsuchen und erfreute sich als Arzt wieder größter Beliebtheit. Im Jahre 1861 kehrte Siebold nach Deutschland zurück, am 18. Oktober 1866 starb er in München, wo er auf dem Südlichen Friedhof beigesetzt ist.

Im Jahre 1869 wandte sich die japanische Regierung an die preußische Regierung mit der Bitte, Ärzte als Professoren der Medizin nach

In Uppsala nahm Thunberg seinen Dienst als Demonstrator auf und begann gleichzeitig mit der Bearbeitung der Sammlungen und Reiseaufzeichnungen. Im Jahre 1781 wurde er außerordentlicher Professor, nach dem Tode von Linné dem Jüngeren 1784 dessen Nachfolger.

Nach einigen Jahren veröffentlichte er in schwedischer Sprache seinen umfangreichen Reisebericht "Reise in Europa, Afrika und Asien in den Jahren 1770—1779" in 4 Bänden (Uppsala 1788—1793), der auch in einer deutschen, einer englischen und einer französischen Übersetzung erschienen ist. Dieser Reisebericht ist eine historische Quelle von größtem Wert für alle diejenigen Länder, über die Thunberg berichtet hat, nicht zuletzt für Japan. Allerdings darf man nicht übersehen, daß Thunbergs Japanbild bestimmt war von den Informationen, die ihm zugänglich waren und er keinen Einblick in die wirklichen politischen Verhältnisse haben konnte. Unbestritten ist jedoch, daß auch die von ihm vermittelte Kenntnis europäischer Geisteslebens für seine japanischen Kontaktpersonen auch in politischer Hinsicht von erheblicher Bedeutung war.

Thunberg hat in Uppsala bis zu seinem Tode am 8. August 1828 sein Lehramt mit kaum zu übertreffendem Erfolg ausgeübt. Mit Recht galt er als der größte Naturforscher nach Linné, 65 Akademien und wissenschaftliche Gesellschaften haben ihn zu ihrem Mitglied erwählt, die Zahl seiner Schüler erreichte ein bis dahin in Schweden nur noch bei Linné gekanntes Ausmaß. Seine Sammlungen und auch seine riesige Korrespondenz gingen in den Besitz der Universität Uppsala über, wo sie noch heute aufbewahrt werden.

Gestatten Sie, daß ich Ihnen nun einige Bilder zeige, von denen ich annehme, daß sie für viele unter Ihnen eine Ergänzung zu dem darstellen, was ich bis jetzt vorgetragen habe. Ich weiß, daß die Projektion von Bildern bei einem Festvortrag eigentlich nicht üblich ist, und bin deshalb den Herren Präsidenten besonders dankbar dafür, daß sie eine Ausnahme zulassen.

handelt es sich dabei nicht um Dolmetscher im heutigen Sinn, sondern um Gelehrte, die für die Verbreitung des europäischen Wissens eine große Rolle gespielt haben und auch selbst Beiträge von wissenschaftlicher Bedeutung geleistet haben. Auch nachdem Thunberg Japan verlassen hatte, blieb er mit mehreren dieser Männer in Verbindung. Es wurden Briefe gewechselt und naturwissenschaftliche und medizinische Bücher sowie Naturalien ausgetauscht.

Die Sammlungen, die Thunberg sowohl durch eigene Arbeit als auch mit Unterstützung seiner japanischen Freunde zusammentragen konnte, waren von einmaligem Wert. Sie waren neben seinen Aufzeichnungen die wichtigste Grundlage für seine späteren Veröffentlichungen, vor allem die "Flora japonica," das klassische botanische Werk mit 39 Bildtafeln, erschienen 1784 in Leipzig. Im Jahre 1935 ist in Tokyo ein in Europa sehr seltener und wegen seiner Güte geschätzter Nachdruck erschienen.

Thunberg wurde von seinen japanischen Freunden gebeten noch länger in Nagasaki zu bleiben, doch hatte er nun den Wunsch in seine Heimat zurückzukehren. Nach einem Monat Schiffsreise traf er Anfang 1777 wieder in Batavia ein. Im Juli 1777 reiste er weiter nach Ceylon, wo er ein halbes Jahr blieb, um botanische Studien zu treiben. Er konnte jedoch nur das Küstengebiet, nicht jedoch das unter singhalesischer Herrschaft stehende Hochland aufsuchen. In Kapstadt erreichte ihn die Nachricht, daß er inzwischen zum botanischen Demonstrator an der Universität Uppsala ernannt worden war. Sein Lehrer Linné war gestorben und dessen Sohn hatte die Nachfolge angetreten, die Stelle eines Demonstrators mußte deshalb besetzt werden. Umgehend trat Thunberg die Rückreise an und besuchte von Amsterdam aus London, um dort im British Museum die Herbarien von Engelbert Kaempfer zu studieren. In der "Flora japonica" hat er ein Verzeichnis über diese Pflanzensammlung veröffentlicht. Am 14. März 1779 konnte er in Ystad wieder schwedischen Boden betreten.

Wegen der engen Zusammengehörigkeit von Botanik und Medizin im 18. Jahrhundert verdienen Thunbergs Untersuchungen über die Pflanzenwelt Japans besondere Beachtung. Dennoch möchte ich seine Bedeutung als Arzt und für die Verbindung der europäischen zur japanischen Medizin unterstreichen.

In regelmäßigen Abständen pflegte der Leiter der holländischen Handelsmission in die Hauptstadt Jedo zu reisen, um dort vom Shogun in Audienz empfangen zu werden und Geschenke zu überreichen. An einer solchen Reise nahm auch Thunberg teil. Am 4. März 1777 verließ man Desima, traf am 1. Mai in Jedo ein, erhielt am 18. Mai Zutritt zur Residenz des Shoguns und kehrte am 25. Mai nach Desima zurück.

Während des Aufenthaltes in Jedo fand ein Treffen mit japanischen Gelehrten statt, darunter einer großen Zahl von Ärzten, die von Thunberg lernen wollten. Es handelte sich dabei um die führenden Wissenschaftler des Landes, darunter auch die Leibärzte des Shoguns. Die Namen von 10 Ärzten, die mit Thunberg zusammentrafen, sind überliefert. Aus den Tagebuchaufzeichnungen kann man sich ein Bild davon machen, wie dieser Gedankenaustausch stattgefunden hat. Thunberg schreibt, daß er Unterricht in Innerer Medizin, Arzneimittellehre und Chirurgie, über diagnostische Technik und über operative Eingriffe gehalten habe. Im Austausch gegen chirurgische Instrumente erhielt er Mineralien und Pflanzen, deren wissenschaftliche Namen er seinen japanischen Gesprächspartnern mitteilte. Nach seiner Rückkehr nach Nagasaki hat Thunberg auch dort medizinische Kenntnisse an interessierte Japaner vermittelt. Eine große Rolle haben dabei die sogenannten Dolmetscher gespielt, Japaner, die Holländisch gelernt hatten und begierig waren, möglichst viel zu lernen. Thunberg hat darüber berichtet, wie sehr gerade diese Dolmetscher sich auch für die Medizin interessierten. Sie hatten bereits durch Berührung mit holländischen Ärzten Kenntnisse über die europäische Medizin erworben und bemüht sich ihr Wissen und ihre Erfahrungen zu vertiefen. Die Namen der Dolmetscher hat Thunberg nicht mitgeteilt, sie sind aber bekannt. Eigentlich

satzungen einige Tage Ruhe finden. Daher bauten die Holländer auch die Südspitze Afrikas zu einem Stützpunkt mit einer Garnison aus und brachten Siedler ins Land.

Drei Jahre lang hat sich Thunberg in Südafrika aufgehalten und zuerst die nähere Umgebung von Kapstadt erforscht, dann drei größere Reisen ins Landesinnere unternommen. Er entdeckte viele neue Pflanzen und Tiere, vor allem auch Insekten. Samen und getrocknete Pflanzen hat er an seine Freunde nach Holland und vor allem an seinen Lehrer Linné nach Uppsala geschickt. In den Werken "Prodrum plantarum Capensium" (1794—1800) und der von Joseph August Schultes (1773—1831), Professor in Landshut, 1823 vollendeten "Flora Capensis" (1807—1823) hat Thunberg seine Forschungsergebnisse niedergelegt. Südafrikas Pflanzenwelt wurde durch ihn für die wissenschaftliche Botanik erschlossen.

Im März 1775 verließ Thunberg Südafrika und reiste zu Schiff weiter nach Batavia auf Java. Der kurze Aufenthalt diente der Vorbereitung der Reise nach Japan. Am 20. Juni verließ das Schiff, auf dem Carl Peter Thunberg als Arzt Dienst tat, Batavia und erreichte am 13. August die auf der Insel Desima bei Nagasaki gelegene Niederlassung der Holländisch-Ostindischen Kompanie. Insgesamt hat Thunberg über 1½ Jahre in Japan verbracht, bis er am 3. Dezember 1776 das Land wieder verließ. Über seinen Aufenthalt im Lande hat er selbst in seinem im Druck erschienenen Reisetagebuch ausführlich berichtet. Diese wichtigste Quelle ist ergänzt worden durch die Auswertung von Briefen von ihm und an ihn. Besonders wertvoll sind aus neuerer Zeit die Arbeiten, die als Vorträge bei den Gedenkfeiern für Thunberg in Tokyo und Nagasaki 1952 gehalten wurden und ein Jahr später unter dem Titel "Forschungsmaterial zu Carl Peter Thunberg" vom Science Council of Japan und der Japanischen Botanischen Gesellschaft herausgegeben worden sind. Ganz besonders nützlich war für mich der Aufsatz von Professor Iwao über Thunbergs Bedeutung für die japanische Kulturgeschichte, der 1953 in schwedischer Übersetzung im Jahrbuch der Schwedischen Linnégesellschaft abgedruckt worden ist.

Mittelschweden, die als das Zentrum der Zündholzindustrie später weltbekannt wurde. Im Jahre 1761 begann er das Studium der Medizin an der Universität Uppsala, wo Carl von Linné ihn in seinen Schülerkreis einbezog. Thunberg beendete sein Studium 1770 mit dem Erwerb des medizinischen Doktorgrades und begab sich auf eine Auslandsreise, die ihn eigentlich nur nach Westeuropa, vor allem nach Paris führen sollte. Daß er erst 9 Jahre später wieder in sein Vaterland zurückkommen würde, hat Thunberg nicht voraussehen können.

Im Herbst 1770 reiste er von Kopenhagen auf dem Seeweg nach Amsterdam. Hier traf er mit alten Freunden seines Lehrers Linné zusammen, den Professoren Vater und Sohn Burmann. Diese beiden holländischen Gelehrten waren mit anderen Freunden der Naturwissenschaft schon seit längerer Zeit daran interessiert einen jungen und tüchtigen Naturforscher nach Japan zu entsenden. Japan, das sich den Europäern fast völlig verschlossen hatte, war für den Naturforscher voller Geheimnisse. Thunberg schien für ein solches Vorhaben geeignet, Linné hatte sich in einem Brief empfehlend für ihn ausgesprochen. Um überhaupt die Möglichkeit zu bekommen japanischen Boden betreten zu dürfen, mußte Thunberg in den Dienst der Holländisch-Ostindischen Kompanie treten, die das Recht hatte, mit Japan Handel zu treiben und dort auch eine eigene Handelsniederlassung besaß. Um die holländische Sprache erlernen zu können, kam Thunberg als Chirurg auf ein Schiff, das am 30. Dezember 1771 nach Kapstadt in See ging. In der Zwischenzeit hatte er sich nicht nur in Holland umgesehen, sondern auch viele Monate in Paris zugebracht. Besonderes Interesse widmete er überall dem Studium der großen Pflanzensammlungen, vor allem den großen Herbarien im Jardin des Plantes.

Die Reise nach Kapstadt dauerte $3\frac{1}{2}$ Monate, Thunberg erkrankte schwer, viele Mitglieder der Besatzung starben. Liest man heute die Tagebuchaufzeichnungen, dann versteht man auch, welche Bedeutung der Hafen von Kapstadt für Holland gehabt hat. Hier konnten die nach Ostindien fahrenden Schiffe frische Verpflegung aufnehmen und die Be-

rschten also kein Latein. Er hat die weiteren Auflagen verbessert und die Tabellen ergänzt, ist aber immer bemüht gewesen, die Kürze der Darstellung zu erhalten, den Stoff also in Grenzen zu halten. Er wußte, daß es ein solches Buch bisher nicht gab. Nur das von dem berühmten Anatomen und Professor der Chirurgie Lorenz Heister (1683—1758), 1717 in erster Auflage herausgegebene lateinische "Compendium anatomicum" war damit zu vergleichen. Es erschien davon 1721 eine deutsche Übersetzung. Kulmus hat selbst auf den wesentlichen Nachteil dieser sonst sehr guten Schrift hingewiesen, das Fehlen von Abbildungen, so daß die Studenten dennoch auf die großen und teuren Anatomiebücher angewiesen blieben. Dies war bei der Verwendung der "Tabellen" von Kulmus nicht erforderlich, denn er hatte sein Buch illustriert. Alle Zeichnungen stammten von ihm selbst und er hat darauf hingewiesen, wie gut es ist, wenn jemand in der Lage ist den Zeichenstift ebenso gut zu führen wie das Sektionsmesser. Er ist dann nicht darauf angewiesen, einem andern die für die Darstellung wichtigen Gesichtspunkte zu erläutern.

Seinen Lehrer der Anatomie in Straßburg, Johann Salzmann, hat Kulmus ausdrücklich in seinen Tabellen erwähnt, offenbar hat er dort am meisten gelernt. Auch Friedrich Hoffmann, Herrmann Boerhaave und Bernhard Siegfried Albinus nennt er mit Namen, ohne auf eine persönliche Verbindung hinzuweisen, die aber nach den biographischen Daten bestanden haben dürfte.

Im August 1774 erschien die japanische Übersetzung der "Anatomischen Tabellen" von Kulmus, ein Jahr später kam Carl Peter Thunberg nach Japan. Thunberg war der bedeutendste Schüler der großen schwedischen Arztes und Botanikers Carl von Linné, der sich sehr darum bemüht hat, seine Schüler auf Entdeckungsreisen zu schicken, um die Pflanzen- und Tierwelt fremder Länder zu erforschen. Thunberg war aber nicht nur der erfolgreichste Schüler Linnés, sondern wurde auch später sein Nachfolger auf dem Lehrstuhl in Uppsala (1783). Thunberg kam am 11. November 1743 in Jönköping zur Welt, einer Stadt in

auch eigene Praxis aus. Kulmus hat, wie aus dem Vorwort zu seinen Tabellen hervorgeht, den Schülern des Gymnasiums auch anatomischen Unterricht erteilt und dafür ähnliche Tabellen in lateinischer Sprache verfaßt, die jedoch nicht gedruckt worden sind. Daneben hat er den angehenden Wundärzten, den Barbierchirurgen, anatomischen Unterricht erteilt. Dazu muß gesagt werden, daß sich in Europa seit dem 11. Jahrhundert bis zur Mitte des 19. Jahrhunderts die Medizin und die Chirurgie voneinander gelöst hatten und verschiedene Berufe daraus geworden waren. Nur die Ärzte wurden an den Universitäten ausgebildet, wo es nur selten einmal Professoren gab, die auch über Chirurgie Vorlesungen hielten. Die Chirurgen gehörten zum Handwerkerstand und waren eng mit dem Barbierberuf verbunden. Meistens übten sie beides nebeneinander aus, häufig aber waren sie doch in erster Linie Chirurgen. Viele dieser Chirurgen standen im Dienst der Armeen, oder waren an den Fürstenhöfen im Dienst der großen Städte tätig. Sie waren wie andere Handwerker zusammengeschlossen zu Gilden oder Zünften. Diese Berufsorganisationen haben sich auch um die Ausbildung gekümmert, die Fürsten und die großen Städte haben sie dabei oft sehr wirksam unterstützt. In Danzig bestand eine bedeutende Chirurgen Gilde, deren Ruf bis in die fernen Küstenstädte der Ostsee und weit nach Polen reichte. Den Lehrlingen dieser Chirurgen Gilde hat Kulmus Unterricht in der Anatomie erteilt. Im Jahre 1736 wurde Kulmus Physikus in Danzig, erhielt also das Amt des Stadtarztes, der für die Maßnahmen zur Bekämpfung von Seuchen und sonstigen Angelegenheiten des öffentlichen Gesundheitswesens zuständig war. Die Kaiserlich Leopoldinische Akademie der Naturforscher wählte ihn zum Mitglied, ebenso die Berliner Akademie der Wissenschaften. Kulmus starb am 30. Mai 1745 in Danzig. Sein Bild ist uns in einem Stich von J. Houbraken nach einer Zeichnung von J. Wessel in Danzig aus dem Jahre 1740 erhalten.

Über Kulmus erfährt man auch etwas, wenn man in seinen "Anatomischen Tabellen" sorgfältig liest. Er hat diese Tabelle ausdrücklich für die jungen Chirurgen geschrieben, daher auch in deutscher Sprache, denn diese jungen Lehrlinge hatten kein Gymnasium absolviert, beherr-

geworden sind. Noch mehr blühte die Anatomie aber in Basel, dem letzten Studienort von Kulmus. In dieser Stadt hatte einmal Andreas Vesal seine berühmte "Fabrica" drucken lassen, hier hatte dieser große Reformator der Anatomie im gleichen Jahre auch selbst eine öffentliche Demonstration an einer Leiche abgehalten. Das Skelett wurde in der Baseler Anatomie aufbewahrt und ist noch heute erhalten. Unter den Professoren der Baseler Universität waren berühmte Anatomen. Im 17. Jahrhundert hatten drei Mitglieder der Anatomenfamilie Bauhin hier gewirkt. Als Kulmus in Basel studierte, war Johann Heinrich Stähelin Professor für Anatomie, der literarisch aber nicht weiter hervorgetreten ist. Interessant ist übrigens, daß der Besuch der drei Universitäten Halle, Straßburg und Basel auch bei anderen Ärzten gerade in dieser Zeit nachzuweisen ist. Auch der spätere Professor der Anatomie in Halle Heinrich Bass (1690 bis 1754) hat etwa gleichzeitig mit Kulmus an den genannten Universitäten studiert.

Kulmus hat nach seiner Promotion in Basel mit einer Dissertation über den Zusammenhang zwischen sittlichem Verhalten und Krankheiten, eine Studienreise nach Holland unternommen. In dieser Zeit war es in Europa üblich, solche Studienreisen zu unternehmen. Man schloß sie entweder an das beendete Studium an, oder reiste ins Ausland, um an einer berühmten Universität die Doktorwürde zu erlangen. Dies war dadurch erleichtert, daß an allen Universitäten der Unterricht noch fast ohne Ausnahme in lateinischer Sprache abgehalten wurde. Daß Kulmus nach Holland reiste und nicht nach Italien, wie dies viele seiner Kollegen aus alter Tradition taten, beweist, daß die dortigen Universitäten eine große Anziehungskraft besaßen. Sicher ist Kulmus auch in Leiden gewesen, wo Hermann Boerhaave (1668—1738) seit 1701 als hochangesehener Lehrer der Medizin wirkte, ein echt hippokratischer Arzt, und Bernhard Albinus (1653—1721), ein großer Anatom. Kulmus ist nach Beendigung dieser Reise nach Danzig zurückgekehrt, wo er 1725 Professor der Medizin und Physik am Gymnasium wurde. Viele Gymnasien hatten in dieser Zeit Ärzte als Lehrer angestellt, die den naturwissenschaftlichen Unterricht erteilten. Sie übten daneben selbstverständlich

ist wahrscheinlich, daß noch einige weitere Auflagen herausgekommen sind. Es hat sich also offenbar größter Beliebtheit erfreut.

Betrachtet man den Lebenslauf von Johann Adam Kulmus, dann läßt sich auch nachweisen, wo er seine anatomische Ausbildung erworben hat und feststellen, welche Lehrer ihn beeinflußt haben. Kulmus, dessen Name darauf hinweist, daß seine Familie aus der Gegend der unteren Weichsel stammt, also aus der Nähe von Danzig, ist in Breslau am 18. März 1689 geboren. Breslau hat er auch als seine Vaterstadt bezeichnet. Über seine Eltern wissen wir nichts. Es ist sehr wahrscheinlich, daß die Familie aus Kulm an der Weichsel stammte, einer bekannten Handelsstadt, und ein Vorfahre sich den Namen als Student nach seinem Heimatort zugelegt hatte, ein damals übliches Verfahren. Breslau gehörte zu dieser Zeit zu Böhmen und damit zum alten Deutschen Reich. Es war eine große und bedeutende Handelsstadt mit wohlhabenden Kaufleuten und regen Beziehungen sowohl nach Osteuropa als auch in den Ostseeraum. Johann Adam Kulmus kam in seiner Jugend nach Danzig, wo er seine Schulausbildung beendete. Er begann sein Medizinstudium 1711 in Halle, setzte es dann in Leipzig und Straßburg fort und beendete es in Basel. Es ist nicht sicher, ob er auch an der Universität Frankfurt an der Oder studiert hat, wie behauptet wird. In Basel erwarb Kulmus 1719 die Würde eines Doktors der Medizin. An der 1694 gegründeten Universität Halle wirkten zu seiner Studienzeit mit Friedrich Hoffmann (1660—1742) und Georg Ernst Stahl (1660—1734) zwei bedeutende Ärzte mit weltweitem Ruf. Der Unterricht in der Anatomie wurde von Hoffmann abgehalten. Die äußeren Bedingungen waren jedoch ungünstig, ein anatomisches Theater ist erst später entstanden. Besser waren die Verhältnisse an der Universität Straßburg, an der von 1708 bis 1734 Johann Salzmänn (1679—1738) als Professor für Anatomie tätig war. Hier konnten die Studenten in viel größerem Umfang als an vielen anderen Universitäten selbst anatomische Präparierübungen an Leichen ausführen und dabei bessere Kenntnisse erwerben, als nur aus Büchern. Dies bestätigt allein die Tatsache, daß 5 Schüler von Salzmänn später selbst Professoren der Anatomie

die japanische Medizin bis in die Gegenwart den japanischen Ärzten bewußt ist. Diese Bindung an die Tradition verdient besondere Hochachtung.

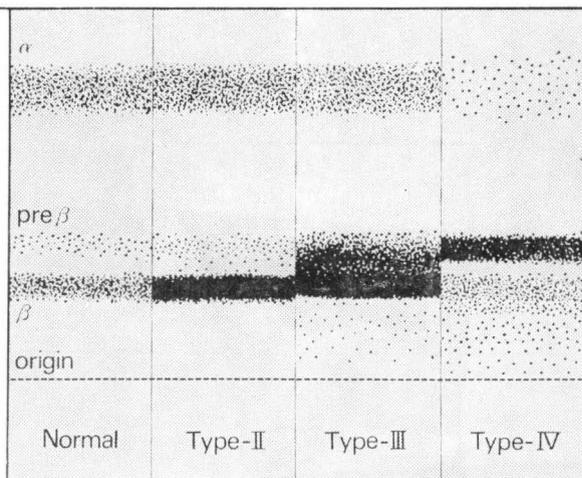
Wenn ich über die Beziehungen Japans zur europäischen Medizin im 18. Jahrhundert aus diesem festlichen Anlaß zu Ihnen spreche, dann werden Johann Adam Kulmus und Carl Peter Thunberg im Mittelpunkt der Darstellung stehen. Aber auch andere für die Verbindung zwischen Japan und Europa wichtige Ereignisse und Personen werden erwähnt werden und dabei müssen rückwärts und vorwärts die Grenzen des 18. Jahrhunderts auch etwas überschritten werden.

Über das "Kaitai-shinsho" ist schon wiederholt auch in deutscher und englischer Sprache veröffentlicht und auf seine Bedeutung hingewiesen worden. Der japanischen Übersetzung lag nicht die erste deutsche Auflage zugrunde, sondern die holländische Ausgabe, die der Leidener Chirurg Gerardus Dichten nach einer der deutschen Auflagen übersetzt hatte. Diese Übersetzung trägt den Titel "Ontleedkundige Tafelen" und war 1734 in Amsterdam erschienen. Das Originalwerk von Kulmus war 1722 in Danzig unter dem Titel "Anatomische Tabellen" herausgekommen. Es stellte den ersten erfolgreichen Versuch dar, den Wissensstoff der Anatomie, der in den vergangenen zwei Jahrhunderten seit dem Erscheinen des Buches von Andreas Vesal "De corporis humani fabrica" im Jahre 1543 gewaltig angewachsen war, in übersichtlicher und leicht lernbarer Form zusammenzufassen und mit Bildern zu erläutern. Wie erfolgreich das Buch von Kulmus war, beweisen die zahlreichen deutschen Auflagen und Übersetzungen in europäische Sprachen. So sind bereits 1725 und 1728 weitere Auflagen in Danzig gedruckt worden, in Amsterdam erschien 1732 eine deutsche und eine lateinische Ausgabe, 1736 eine französische Übersetzung. In Leipzig wurde das Buch 1742 und 1759, in Augsburg 1740, 1745, 1758, und 1766 in weiteren Auflagen veröffentlicht, in Rom 1748, in Utrecht 1755 und schließlich in einer stark umgearbeitete Ausgabe erschien es noch einmal 1789 in Leipzig. Das Buch ist also in wenigstens 15 Auflagen erschienen, es

Die Beziehungen Japans zur europäischen Medizin im 18. Jahrhundert

Heinz Goerke

Am 4. März 1771 nahm Ryotaku Mayeno zusammen mit seinen Kollegen Gempaku Sugita und Junnan Nakagawa an der Sektion der Leiche einer hingerichteten Frau teil. Mayeno und Sugita stellte dabei fest, daß die Zeichnungen in dem Tabellenwerk von Johann Adam Kulmus, das sie in der holländischen Auflage kannten, mit der Wirklichkeit weit mehr übereinstimmten als das, was in den alten clinesisch-japanischen Anatomiebüchern geschrieben stand. Sie waren von dieser Tatsache so sehr beeindruckt, daß sie sich entschlossen, das Buch von Kulmus ins Japanische zu übersetzen. Nach mehrjähriger Arbeit erschien dieses Buch 1774, also vor 200 Jahren. Das fünfbändige Werk steht, wie Fujikawa in seiner "Kurzen Geschichte der Medizin in Japan" (1911) festgestellt hat, am Anfang einer wirklichen Reform der Medizin dieses Landes, deren maßgebliche Initiatoren Mayeno und Sugita waren. Daß dieses Ereignis für die Verbindung der europäischen Medizin, nicht zuletzt auch der deutschen zu Japan, ebenfalls eine große Bedeutung gehabt hat, bestätigt sich am deutlichsten dadurch, daß dieses Ereignis heute hier in dieser Form gefeiert wird. Die Feier findet statt kurz vor Beginn eines Internationalen Kongresses, dessen Ziele der Austausch von Erkenntnissen auf dem Gebiet der Wissenschaftsgeschichte und die Förderung der Zusammenarbeit zwischen den Gelehrten aller Erdteile sind. Daß ich als Vertreter des Landes, in dem Kulmus geboren ist und das über zwei Jahrhunderte eine besonders enge und echt brüderliche Beziehung zu Japan gehabt hat, diesen Festvortrag halten darf, ist nicht nur eine große Ehre und hohe Anerkennung für mein Vaterland und für mich persönlich, sondern auch eine Bestätigung dafür, daß die Bedeutung des "Kaitai-shinsho" für



高脂血症の血清リポ蛋白像 (Fredricksonによる)

高脂血症に

● 脂質代謝改善剤

コレソルビン®

(一般名=シンフィブラート) 散・カプセル

コレソルビンは脂質(血清総コレステロール、トリグリセライド、 β -リポ蛋白など)全般の代謝異常を改善し、しかもエスケープ現象が少なく安定した持続効果を示します。さらに、耐糖能を改善します。

原体は結晶性粉末で、製剤は無味・無臭
(ゲップ等の不快な症状がなく、服用しやすい)

当社研究・創製品

健保適用



CHOLESOLVIN

〔包装〕 カプセル(250mg) (コード番号: Y-CL 25)
= 120・600・1500・6000カプセル
散(2倍散) = 100・500g

- (使用上の注意)等については現品説明書をご参照ください。
- 文献等ご要望の向きは吉富製薬學術部(大阪市東島区内)まで。



吉富製薬株式会社

大阪市東区平野野丁3丁目35番地

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 20. No. 4

Oct. 1974

CONTENTS

Articles

- Rembrandt's Famous Painting "Anatomy Lessons
of Dr. Tulp and Deyman".....Akira FURUKAWA...(289)
- Diseases in the Edo era as described in Popular
LiteratureShoji TATSUKAWA...(313)
- The Rise and Development in Japan of Medical
Laboratory Technicians in the Clinical Area
.....Kiyoo TANISHIMA...(336)
- Names of Drugs in the Pen-ts'ao-cang-mu being
seen in the Haiku of Japan.....Saburo MIURA...(347)
- On the Prayers and Masseurs in the Ancient
JapanTaku SHINMURA...(356)
- Studies on Morita's brothers, Scholars of Dutch
Learning (2)Kazuo HASEGAWA...(364)
- Die Beziehungen Japans zur europäischen Medizin
im 18. JahrhundertHeinz Goerke...(418)

Materials.....(370)

Miscellaneous(376)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1 Bunkyo-Ku, Tokyo